

強制連行調査ネットワークの集い2000 in 神戸

資料集



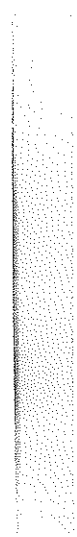
「朝鮮國獨立」「緑の春」の落書きが残る西宮甲陽園地下壕跡

日時／2000年9月9日（土）～10日（日）

会場／神戸学生青年センター

主催／（財）神戸学生青年センター・兵庫朝鮮関係研究会

連絡先／〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1
（財）神戸学生青年センター内 TEL 078-851-2760 FAX 821-5878
E-mail rokko@po.hyogo-iic.ne.jp
<http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/renko.html>



プログラム

<9月9日(土)>.....

司会 堀内 稔(神戸学生青年センター、むくげの会)

13:00~14:00 受付

14:00~14:30 開会行事 開会のあいさつ 兵庫朝鮮関係研究会 徐 根 植

14:30~15:10 地元からの報告「神戸港の朝鮮人・中国人強制連行」

同調査する会 安井 三吉 孫 敏 男

15:10~15:50 鄭鴻永さんを偲ぶ会(司会 兵庫朝鮮関係研究会 徐 根 植)

ビデオ サンテレビ放映のニュース、三浦スタジオ製作追悼ビデオ

追悼の言葉 広島強制連行の歴史を調査する会 内海 隆男

甲陽園地下壕を保存する会 徐 元 洙

尹奉吉義士遺跡保存会 朴 仁 祚

15:50~18:00 各地からの報告 *印は、10日の交流討論会で詳しく発題していただきます。

1. 石川県・七尾への中国人強制連行 七尾強制連行を調査する会 角三 外弘

2. 中国人強制連行・西松建設裁判について* 中国人・強制連行西松裁判を支える会 中土 勝雅

3. 「港運敦賀重工管理事務所」華人労働者就労願末書について 敦賀市 橋本 一郎

4. 強制連行された中国人・静岡県の実例ー 静岡強制連行の歴史を調査する会 小池 善之

5. 「エノゲイラの飛んだ時……」砲台調査 広島強制連行の歴史を調査する会 内海 隆男

6. 日本製鉄裁判について* 日本製鉄裁判を支援する会 上田 慶司

7. 慶尚北道・土谷クローム強制連行体験者をたずねてー日本人・在日朝鮮人

・韓国大学生らによる共同聞き取り調査ー 北海道・空知民衆史講座 殿平 真

* 知られていない事実・朝鮮北半部からの強制連行* 兵庫県朝鮮人強制連行真相調査団 梁 相 鎮

9. 栃木・茨城県下における朝鮮人強制連行・労働に関する調査現況 下野チョソン問題研究会 孫大勇

10. 大江山強制連行訴訟(レジメは別紙) 中国人戦争被害者の要求を支える会京都支部 桐畑 米蔵

11. 西宮甲陽園の地下壕保存運動 西宮甲陽園地下壕を記録し保存する会 原田 孝一(フェー・レ・ワ・フ)

12. 西宮甲陽園の地下壕保存運動 西宮甲陽園地下壕を記録し保存する会 原田 孝一(フェー・レ・ワ・フ)

※ ホールの展示は、兵庫県立西宮甲山高校写真部「徳知川線工事と朝鮮人」

※ 白壁の展示は、兵庫県朝鮮関係研究会「兵庫県下の朝鮮人の歴史」

18:30~21:00 交流会(参加費 4000円、於神戸学生青年センターホール)

<9月10日(日)>.....

9:00~12:00 交流討論会 (司会 飛田 雄一)

※「テーマ別交流会」と予告していましたが、3つのテーマで各20分の発題を聞いて全体で討論することになりました。

1. 中国人強制連行・西松建設裁判について 中国人・強制連行西松裁判を支える会 中土 勝雅

2. 日本製鉄裁判について 日本製鉄裁判を支援する会 上田 慶司

3. 知られていない事実・朝鮮北半部からの強制連行 兵庫県朝鮮人強制連行真相調査団 梁 相 鎮

4. 栃木・茨城県下における朝鮮人強制連行・労働に関する調査現況 下野チョソン問題研究会 孫大勇

開会のあいさつ 徐 根 植

13:00~17:00 フィールドワーク

①神戸電鉄+神戸港コース 午後1時30分 神戸学生青年センター出発(定員 24名)

案内/金慶海、徐根植、梁相鎮、高祐二、近藤富男、飛田雄一

②西宮甲陽園地下工場跡コース 午後2時 阪急甲陽園駅前集合(定員なし)

案内/徐元洙、宮林信吉 (阪急六甲より梅田行き、夙川で甲陽園行きに乗り換えて終点下車)

※ 打ち上げ/反省会(参加自由、費用はワリカン、3000円程度) 午後4時30分~

「磯」(阪急六甲東50メートル、ケンタッキーフライドチキン3階、TEL078-322-1132)

強制連行調査ネットワークの集い参加者名簿

No.	氏名	性別	所属等	泊	部屋	交流 会	フィード バック	備考
1	塚崎 昌之	男	茨城	○	B-1	○	?	
2	師田 小夜子	女	タチソ	○	和室B	○	??	
3	藤田 武	男	タチソ	○	B-1	○	??	
4	橋本 徹	男	タチソ	×		○	神戸港	
5	浄土 卓也	男	愛媛	○	B-2	○	?	
6	前田 朗	男		○	B-2	○	?	
7	上野 恵子	女	西宮	×			×	9日のみ
8	山下 秀子	女	西宮	×			×	9日のみ
9	山角 三弘	男	大阪	×		?	甲陽園	
10	池田 善之	男	大沢	×			×	レポート
11	小伊田 稔	男	金沢	○	B-3	○	?	レポート
12	伊田 久則	男	米沢	○	和室C	○	参加	
13	石塚 則弘	男	米馬	○	和室C	×	×	
14	生沼 芳裕	男	群馬	○	B-4	○	×	
15	小松 司起	男	熊本	○	B-3	○	甲陽園	
16	前田 尚彦	男	日鉄	○	B-5	○	参加	レポート
17	橋口 威大	男	京都	○	和室B	○	×	
18	岡田 雅子	男	金沢	○	B-5	○	甲陽園	
19	田中 隆男	男	大阪	×	B-6	○	×	
20	中正 海	男	大島	×			甲陽園	レポート
21	内久保 薫	男	広島	○	B-7	○	神戸港	レポート
22	菊山 仁	男	広島	×	B-7	○	甲陽園	
23	飛田 雄一	男	金庫	○			神戸港	レポート
24	堀内 三吉	男	兵庫	○	和室A	○	甲陽園	
25	安井 敏根	男	兵庫	?	和室D	○	神戸港	レポート
26	孫金 慶子	男	兵庫	?	和室D	○	神戸港	レポート
27	中田 政子	女	兵庫	?	和室D	○	神戸港	
28	中野 孟	女	兵庫	?		○	?	
29	星野 孟	男	空知	×	B-6	○	×	レポート
30	徐元 洙	男	兵庫	○	和室D	○	甲陽園	
31	高相 廣	男	兵庫	○	和室D	○	神戸港	レポート
32	梁金 地知	男	兵庫	×		○	神戸港	
33	伊下 義輔	男	兵岐	○	和室D	○	?	
34	村田 久寛	男	九州	○	和室A	○	?	
35	小金 正一	男	大坂	○	和室A	○	神戸港	
36	松本 百合	女	大坂	○	和室B	○	神戸港	
37	伊賀 智人	男	大阪	×		?	甲陽園	
38	伊賀 康一郎	男	大坂	○	和室A	○	神戸港	
39	竹内 孝一	男	浜松	○	和室A	○	神戸港	レポート
40	橋本 大勇	男	宝塚	×	和室A	○	神戸港	10日のみ
41	孫枝 智恵子	女	木庫	○		×	神戸港	レポート
42	楊井 秀一	女	兵大	×		×	神戸港	
43	櫻谷 恵子	女	阪城	×		×	神戸港	
44	矢野 加恵子	女	大坂	×		×	神戸港	
45	佐藤 生蔵	女	兵庫	×		○	神戸港	
46	徳富 米蔵	男	江大	×		?	神戸港	レポート
47	桐原 幸一	男	兵庫	?	和室D	○	神戸港	レポート
48						?	神戸港	
49								
50								
51								
52								
53								
54								
55								
56								
57								
58								
59								
60								
61								
62								
63								
64								
65								
66								

原稿に「興」の字あり、得續の字に誤りあり。
心韻に重なり、たぬなり

知識の発展

「政府、真言」臺灣を叩きながら、「威く聞いた上
 にあった。その、その、大。一三五 あの大。一三五（朝
 日戦争）」風潮し力が入った。一九五〇年十二月十
 五日午後十時頃北臺が撃った一発は民間人である大
 「李進傑」を即死させた。享年三十一才。

保 保羅 (サノヒ・相持) りん 相持 二十才
サノヒ・相持
 畠山 四才 (麗華堂) 次郎 鉦重 一才 (麗華堂)
 村山 三才 (麗華堂)

あの動乱、破竹の勢いで南下し釜山の占領を目前にした頃だった。北軍は威張っていた南班や惠徳地を主権排除し一部民衆から罵られたと聞く。島は国軍が支配後は山から北が襲撃を行い、昼夜の支配權は交替の様相であった。夫は羅西と近くの三越の住民間の連絡員（ボランティヤ）であった。故郷が過剰な丸腰の夫が狙撃された。

落葬工事は終りに近づいた。丸太で天端を叩き固めている（浸水を防ぐ）この落葬の全部を采配する相禮さんに迎えられる人は眉を顰める。最幼の序を弁える光實は羨ましく思えた。愈々成壇祭が始まった。

祭床が置かれ、祭席が並べられた。今日の為一族が誠意に込めて作られた数々の供物である。

相禮をくは禱石上方に墜り、経に似た祭文を延々と両手を増合せながら唱え続けた。一族は耳を刺し、唇並び、時折耳をこき鳴らした。

最上すると文森西泊まりになるので、乗知らぬ振
りして山を下りた時は午後二時であった。一緒に訪
問した金真の離荘の事実を確認し、大田経田で尹義
士出身地に向い、月進会長を再度訪ねた。訪問のおれ
を近く相互交統の協議を行った。

ホテルから来　千瀬さんに電話でお礼と別れを告
げだ。

一族が盛沢山の馳走を先祖に供じ和氣禱詞として作
業してゐる中にいた私は、皆の先祖を敬つてのものし

幼児を抱えて塗方に暮れていた。親類の誰も彼も
蟹を饒々として自己保身が手一杯であった。

北軍の支配から逃れる為土地家財は北軍の軍票に換
わった。言へ南へと逃げ、釜山に辿りついた。

子供を預け、炊事婦や使い走りや總ゆる仕置をしたが、わが子に夢を託した。

「北の軍勢所着者は統殺する」この指示で全部廃棄し一時無一文の乏食となった。(休戦後戻ったようだ)親としてこの子の為強く生きねばならぬ。立派な社会人に育て上げる事が夫に対する供養である今日、故郷に戻って父祖伝来の地を耕し何時の間にか黄泉に近づいて来た齡となった。ハァハァ……

$$A_{\text{max}} = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{\lambda_{\text{max}}} + \frac{1}{\lambda_{\text{min}}} \right) \quad (1)$$
[illegible]

唐 氏 宗 祠

多くの同胞が死んだと聞かされていた。
資金らしいものはなく、一で買込んだと言う。
何時やったかわかんないがもう三人の名前を挙げた。
上の人が四人分の学生服を持って来た。着替えて僅か
しかない私物を持って高い真山を越すことにして朝
逃げた。食糧もなく歩いて歩いてその時は距離で度
た。

翌日 山道より井倉道に出たら日本人に親切を
受けた（内容を書かない）彷徨している中に朝鮮人
飯場の世話になった（地名等不明）翌日から四人は
ある遺棄現場に連れて行かれリヤカーで土を煉瓦等
運ぶ作業であった。仕事も馴れ慣る金を稼ごうと腹
に決めていた。一週間経って多勢の警官が来た。呆
気なく捕まった。十八才の若だけがこっぴどく叩か
れ、みんな一晩監禁に泊められた（地名不明）
明るる日、峰々沢に連れて行かれ数重に着脱された、
間もなく八名は4年4月2日石川県小松駅から軽便
車に乗って終点の屋小屋駅で降りた。民家もあった
店もあり人の住める処と思ったが、山の方へ暫く歩

き進んでいくので森の中の木々に放逐す。重宝獲
った五軒村の旅には余り凶悪が乏しい、名簿に
植田の五名が記されているので決心する。

「五月四日」再び国事研究所の、羅さんを導き五人
の巨峰調査をした。一区二区とあって監阻が広く二
区に飯倉貯水池が作られ、名簿の五軒が水没の危機
に陥っていた。（又ついでないなあ）

- 金 春鶴 光州市光山区警備所に移駐
- 金 永云 死亡
- 金 豊鉉 移駐先不明
- 金 正鉉 死亡
- 朴 永圭 移駐先不明

貯水池に近い一区の人から何か聞ける思い、日は着
陽屋一区へ。家がぽつぽつとある、農繁期で三軒廻
りでも留守である。山道にある一軒を最後と定めた。

玄關口で段々道を大きく、
呼びかけながら裏口に出て仕舞った。巨五十米位の
真山の中腹で土木機械が走り20名位の男女が右往左

ろろ多くの人達が動いているとノコ（遺棄場）に
女達もいた飯場は飯量が極端に少なかった、後山は険
しく人を寄せつけず古は断崖絶壁で飯場というより
収容所だ同胞はかり60〜70名は居た。夜達とは別に
たせられ仕事は掘削機を現場と飯場への配達係だ。
一度も外出はなかった同胞達は憂鬱しくしてくれだ。
重労働と空腹の為何人も逃げた。日本敗戦ですぐ帰
らしてくれだ。

峰々沢真山で外出もないから大人達がこっそりベッ
チをしていた。石川に来てから少し金さへれた。家
に帰った時手紙に10円があった。唯一の財産だった。
韓国で補償の語は口だけで朴と金の野郎が喰った、
と吐き捨てた。父は死んでおり弟達が死んだが孫
等に囲まれて暮せば日々を送っていると言う。

住っている。これはちまたの収獲調査に無し、来るこ
なならなかった。あつ来るんじやなかった。

今まで下の方におった父母の墓を中腹を跨いで谷
澤工事と隣接一同の作業中であった。（習慣として
尾学舎は本館で）日本から二区の人聞き取り調査
に来た主旨を話した。師の末相れり総監査、弟の末
千源助監査が喜ぶながら木陰に菜園を敷き歓迎され
た。70才位の千源さんは運行された体験もなく二区
の話は聞いた事がない。これにはがっかりした。

カメラやビデオを廻すのは不謹慎と思いつつある
男に放方を教えた、無茶苦茶に取り始めた。
（30分とビデオテープと写真廿六枚後日送付す）
その時カメラが若千調子が悪くなった。私
は相れさんから移駐の説明を聞いた。カメラの貸与
で監阻が一度に和やかになって来た。

強制連行調査ネットワークの集い
2000 in 神戸 <資料集>
目次

プログラム 3

参加者リスト 4

地元からの報告「神戸港の朝鮮人・中国人強制連行―中国・韓国現地調査報告―」
同調査する会 安井 三吉 孫 敏 男 6

鄭鴻永さんを偲ぶ 12

各地からの報告 15

- 1. 石川県・七尾への中国人強制連行 七尾強制連行を調査する会 角三 外弘 16
- 2. 中国人強制連行・西松建設裁判について* 中国人・強制連行西松裁判を支える会 中土 勝雅 20
- 3. 「港運敦賀華工管理事務所」華人労働者就労願末書について 敦賀市 橋本 一郎 24
- 4. 強制連行された中国人―静岡県の事例― 静岡強制連行の歴史を調査する会 小池 善之 27
- 5. 「エノゲイラの飛んだ時……」砲台調査 広島強制連行の歴史を調査する会 内海 隆男 31
- 6. 日本製鉄裁判について* 日本製鉄裁判を支援する会 上田 慶司 35
- 7. 慶尚北道。土谷クローム強制連行体験者をたずねて 一日本人・在日朝鮮人
韓国人学生らによる共同聞き取り調査― 北海道・空知民衆史講座 殿平 真 41
- 8. 知られていない事実・朝鮮北半部からの強制連行* 兵庫県朝鮮人強制連行真相調査団 梁 柱韓 45
- 9. 栃木・茨城県下における朝鮮人強制連行・労働に関する調査現況 下野チョソン問題研究会 孫大勇 49

フィールドワーク・ガイド

- ①神戸電鉄+神戸港コース 66
- ②西宮甲陽園地下工場跡コース 72

「強制連行調査ネットワーク」ホームページの紹介 77

案内チラシの再録 81

広告／神戸学生青年センター出版部・出版物

地元報告「神戸港における朝鮮人・中国人強制連行」① 中国訪中報告

訪中報告

2000年9月9日

安井三吉（神戸港調査する会）

1 訪中準備

神戸における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会（略称、神戸港調査する会）は、1999年10月14日、神戸学生青年センターで結成された。現在、18団体、約100人が参加している。本会創立ともに、調査・研究グループとして韓国・朝鮮班とともに、中国班が編成された。

神戸港における中国人強制連行に関するもっとも基礎的（内容的には批判的検討が必要である）な資料は、日本海運業会神戸華工管理事務所・神戸船舶荷役株式会社編『昭和二十一年三月 華人労務者就労期末報告書』（東京華僑総会蔵、神戸・南京をむすぶ会復刻、1999年、以下『神戸港報告書』と略記する）である。この報告書によれば、神戸港に連行され、働いていた中国人労働者は996人で、相生市の播磨造船での労工482名を加えると兵庫県下の中国人労働者総数は、1,478人になる。神戸港に限定した場合、現在刊明している名簿によれば、河北省の広平県、~~山東省~~、河南省の原陽県、そして山東省日照県が多い。上海出身者の多いのも注目される。

中国班としてのこれまでの取組みは、次の四点である。

(1) 神戸港の関係施設の確認。

この点については、上田雅美氏を中心に、かつて1950年代に中国人俘虜殉難者慰霊活動に参加された影井巳喜雄氏の聞き取りを行い、戎井旅館（元の新華寮）の戎井隆寿氏がかって書き残された証言が提供され、また新華寮の元の所在地を確認した。しかし、神戸自身に関する調査はまったく不十分である。

(2) 連行者名簿の作成。

これは、『神戸港報告書』に記載されている中国人名と関連データをすべてパソコンに打ち込み、さらに別の資料を加えて名簿を作成した。省別、集中している場所については、県さらには村単位の名簿を作成した。このもっとも基礎的で、重要な作業には、信長正義、斎藤俊博の両氏が当たってくれた。

(3) 生存者（幸存者）・遺族へのアンケート（案）

ともかく、神戸港で働いていた中国人生存者と遺族に対してアンケートをとろうということで、アンケートの案文の作成とその中国語訳に取組んだ。この作業は、村田壮一氏と安井が担当、また、翻訳に際しては中国人研究者から大きな援助を得た。

(4) 中国との協力関係の構築

この点では、二つの手がかりがあった。一つは、2000年4月、張忠杰氏が神戸に来られ、交流できたことである。張忠杰氏は、河南省原陽県の人、父の張修正氏が大阪港に連行されていたという方である。原陽では、家業の傍ら、「二戦時期在日勞工遺留問題連絡処・河南省原陽県民間勞工調査処」を開設、活動されている。大阪の調査する会の招きで来日したのを契機に神戸でも講演をお願いしたわけである。今回張忠杰氏には、原陽で大

米坂の園に十三才で連行された金炳必さん

四月三十日午後七時三〇分ソウルのホテルにいる私に六枚のFAXが来た。高校で教鞭を執りながら浜松で歴史の発掘や市民運動に於ける第一人者の盟友である竹内康人さんから。

石川県小松市の山間部、~~そ~~ては鑛山として日本中に誇っていた尾小屋鑛山に獄中二百四〇名の朝鮮人が連行された公文書が残っているのに未だ私は名簿の入手が出来なかった。昨秋竹内先生からの手紙に義士出身地近くの忠清南道内から連行された名簿を頼りに、義士と縁の深い尹圭相先生と聞き取り調査をした。該当の五人は既に故人でその遺族達からの収養は無い事だった。

四月訪韓前竹内さんより調査行を促されて一人での調査は無理と断わったばかりであった。然し地元と主君に託した名簿の一人に目を注いだ。

※これは本館を本拠地とし囚虜連の出国を確認し最後は出国。

事は殆ど記憶になく、方言で話すので難解であった。読解するうちに語が通じた。

ある日「酒風」等が来て父親を尋ねるので、徴用に連れられた途中で逃げ家には戻らぬという私を連れて行った。ある建物の中に日本の労務係がいた。確かまだ子供三々という言葉が耳に残っている。「おっしういたさう」。母は十四才にもならぬ子供と哀願したが聞く耳はなく車に乗せられ泣き別れた。奴等は「重労働で年令は何時も誤魔化していた。孫四（サンシ）面取の人数は70人位はいたと思ふ。この様は井金君のため見るものが珍しく釜山で大きな船に乗せられ下関についた。そして大阪という地名を知っている。東海道本線に乗って浜松で下車トラックに乗せられて山奥へ山奥へと連れた。民家もなく心細くなつた誰を配ても増年上である三時位位まで。降られて高い山に横を渡っていくと飯場へ又して飯場が山奥にあった。外には何も無い暗いところまで連れて来たなあと思つた。

一九三二年一月三十一日出生。四四年六月十四日連行。金炳必。全南長城郡漆面邑石馬里とある。尾小屋鑛山を知る生き証人が目の前に居るようだ。大田経由で四巨村、大邱経由で五巨村である。いさゝか準備せねばならず決断は鈍った。遠いながらも日本国内なら何時でも行けるが、折角のチャンスであり、九月の「強制連行調査ネットワークの集い」の発表事項にもなり、竹内先生の厚意などが交差し悶々とした一夜を過ごした。

断念して大邱で待機したが滞付かず、ついに準備万端整え六日、鉄道がないので光州行バスに乗った。タクシーとバスに乗継ぎ漆面事務所に入った。若い女性職員のリさんは親切で生存の金炳必さんに電話連絡してくれた。タクシーで石馬に到着。大邱から六時間掛かった。

体格の良い大柄な人である。部屋に通され聞き取り調査の目的を話すと意外であった。

十三歳五ヶ月で連行された少年は、五十七年前の

初めて見る鑛山、どんな仕事をさせるのかなあ！

【資料】 静岡県磐田郡龍山村大平山、日本鉱業株式会社 社長の浜山 昭和19年6月14日 連行

七千人の殆どが朝鮮から連行されて来た。飯場は廊下を挟んで両方が部屋で一棟に50人位いた。冬余り寒く雪が吹き込むため大人達が昔とった姪柄で湯火を作ったりした。午前八時から午後八時までの仕事で鑛内のあちこちの使い走りや定位置はなかった。

食事は豆糟にべらべらとし飯が振っているもので飯数はさすがに腹一杯にはならず我慢だった。仮病を使って休む者もいた。大抵朝食後腹痛を訴えて休む。食へ盛り過ぎる少年には苛酷な労働であった。

その中三人の友達が出来た。上が十八歳で四人は仲良しとなり何時の間にか此処から逃げようと相談が出来た。警備が厳しい中を道もわからず、山奥から柵を回らしてある飯場から外に出たことがなく、

本年の調査資料が残されている第一工場以外、クワリーの主要ルートはほとんど解明できない。特に成倉から北西部にあたる山中のクワリー工事構造跡については用途が不明である。後述に同様のものがあるという点もわかっていないが、他にも存在するのかもしれない。情報を整理していきたい。

貯水池は幅約16m・奥約8mの台地中のものが、中心部に幅約20m・奥約20m・深さ約7mの堀り込みがあるものがある。他に幅約45m・奥約50m・深さ約6mの貯水池のものがある。



変お世話になった。

もう一つは、林伯耀氏が、花岡事件を始めとして長く強制連行問題に取り組んでこられた中で培われたネットワークである。今回は、林氏の「老朋友」にも、大変お世話になった。

以上の二つのルートは、今回の現地調査において重要な役割を果たすことになる。ただ、今回は、もう一つのルートを構築することに努めた。昨年12月、来日され、学生青年センターにも宿泊された柴維木氏（中国社会科学院近代史研究所の雑誌『抗日战争研究』副主編）を通じて研究・調査の関係を構築するという道である。2000年1月、柴氏とこの件で連絡を取り、生存者へのアンケート調査の件も含めて相談に乗っていただいた。5月には、林伯耀氏の招きで劉述礼氏（北京中国抗日战争史研究会会長）ご夫妻が神戸に来られ、改めて中国側の協力と今夏の訪中について要請を行った。実は柴氏は、この研究会の副秘書長の一人でもあり、引き続き中国との連絡は同氏を通じてお願いすることにした。

生存者と遺族へのアンケート調査については、長崎の経験にならって日本から直接郵送することも考えたが、最終的には、中国側と打ち合わせてから行うことにした。

6月、北京中国抗日战争史研究会（以下、北京抗日研究会と略記する。）との今後の協力関係、アンケートの案文についての基本的合意が成立した。7月、同会より招請状が送られてきた。そこで、訪中の手続きに着手するとともに、具体的なスケジュールの打ち合わせに取り組んだ。これら柴氏との連絡は、すべて E-mail でやり取りした。まことに便利になったものである。

2 中国にて

今回の訪中は、村田壮一氏と私の二人で、期間は8月16日—8月25日の10日間である。主な五つの点について、その概要を説明しよう。

（1）北京中国抗日战争史研究会（北京抗日研究会）との交流。

北京抗日研究会は、1999年11月成立した民間の研究団体である。中国人民抗日战争纪念馆内に事務局がある。北京地区の抗日战争資料の収集、纪念馆の活動の支援、研究会の開催、出版を主たる活動としていて、劉述礼氏が会長で、張承欽氏（纪念馆副館長）が秘書長、柴維木氏は副秘書長である。8月17日、纪念馆にて、劉会長、張秘書長などと日程、協定、今後の協力関係について意見交換を行った。席上、纪念馆の李宗遠編研部主任・館長秘書より、纪念馆としても抗日战争勝利60周年（2005年）に向けて、日本で働いていた労働者について徹底的な調査を行う予定であるとの話があった。私たちの協力申し入れも、丁度良い時期と重なったといえる。協定は、帰る前々日の8月23日に調印された。①資料、情報の交換、②現地調査、③資料の利用、出版、④経費、⑤有効期間、などについて取り決めたものである。

（2）関係機関・関係者との交流。

今回、交流した機関・関係者は、以下の通りである。

B 河南省原陽県出身者について

日時 : 8月20日(日)、21日(月)

場所 : 原陽賓館・韓文清氏宅

世話人 : 趙忠杰 (女) 77~78

幸存者 : 江有才 (78歳)、王琴洲 (75歳)、黄国明 (79歳)、韓文清 (77歳)

方法 : 各自2-3時間ずつ聞き取り。韓文清氏にいては、体調の関係で自宅で聴取。

通訳 : 方軍、老田裕美

記録 : 唐曉輝

<①年齢は、70代後半、②日本軍（または傀儡軍）に捕らえられたか、騙されたかして連行、③“没発過銭”、④“經常想日本政府応賠償”>

(4) 関係資料の収集、交換。

我々の方からは、中国側に対して会報の『いかり』、『神戸港報告書』と神戸港関係の劳工名簿（全体のもと省別のもの）をお渡ししたが、『神戸港報告書』と劳工名簿は、中国側も相当な関心を示していた。

中国側から提供されたものは、すべて書籍で、档案の類はなかった。書籍の中で主なものは、『日軍槍刺下的中国劳工』全4冊（新華出版社、1995年）、陳景彦『二戦期間在日中国劳工問題研究』（吉林人民出版社、1999年）、謝忠厚・肖銀成主編『晋察冀抗日根拠地史』（改革出版社、1992年）、郭金平・趙金山主編『中国民族与件中国民族抗戦与』（新華出版社、1996年）など。

(5) アンケートの発送。

この点については、北京抗日研究会に依頼した。今後、北京でどのような方法で進めるか検討して実施に移すとのことであった。

おわりに

私たちは、劳工問題について知っていることは神戸の状況だけで、日中双方でのこれまでの調査・研究についての成果、現地調査のノウハウについてほとんど無知のままの訪中であった。もっと予習をしっかりとっておけばさらに適切な調査を行うことができたに違いあるまい。次のチャンスの教訓としたい。他方、中国での現地調査の一方、足元の神戸について関係者の証言を集めていくことが私たちの重要な課題であろう。

.....
強制連行調査ネットワークの集い2000 in 神戸 <資料集>

2000年9月9日発行 1000円
発行／(財)神戸学生青年センター・兵庫朝鮮関係研究会
〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 821-5878 rokko@po.hyogo-iic.ne.jp
<http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/renko.html>
.....

地元報告「神戸港における朝鮮人・中国人強制連行」① 韓国訪中報告

現地調査報告

神戸船舶荷役(株)に連行された朝鮮人労働者

— 全羅北道龍池面出身18歳「李南淳」 —

第二次大戦中の港湾労働力不足を解消するため、神戸港湾事業の戦時統制会社「神戸港運株式会社」の船内荷役業を下請する「神戸船舶荷役株式会社（神戸市生田区波止場町、1942年12月設立、1949年6月解散）」は、1944年から「官斡旋」による「朝鮮人労働動員」を実施した。

神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会 孫 敏 男（在日コリアン人権協会・兵庫）



李南淳さん庭先で2000年8月21日撮影。左から孫敏男、鄭順泰(76)、李南淳(74)、南淳さんの妻「許(ハ)」さん、通訳の金恩受、金堤榮(大学教授)。

(1) 厚生省調査報告書をたよりに

各種未払金の供託処遇通達とともに、厚生省勤労局は、1946年6月17日付勤発第337号「朝鮮人労働者に関する調査の件」〔未公開〕によって、全国の勤労署を通じて戦時中に朝鮮人労働者を雇った事業所から、名簿・入退所・未払金などに関する報告書の提出を命じた。

神戸船舶荷役(株)から提出された報告書「厚生省調査報告書（以下、報告書という）」をたよりに、1999年10月14日に結成された「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会（以下、調査する会という）」は、生存者を捜し出すために2000年2月15日から名簿に記載された148名の韓国本籍地役場（面事務所）27箇所へ照会文を郵送した。

◆出身地（本籍）◆

忠清南道	錦山郡	82人
全羅北道	金堤郡	60人
	鎮安郡	2人
	井邑郡	1人
	高敞郡	1人
慶尚南道	居昌郡	1人
本籍不明		1人

◆1944年入所時年齢◆

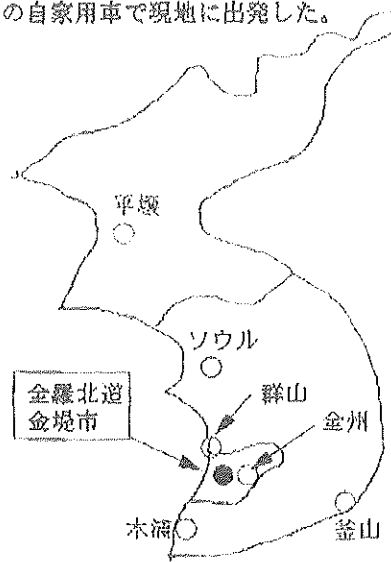
最高齢者 54 歳。最年少者 14 歳。
50 歳代 2 人、40 歳代 10 人、
30 歳代 32 人、20 歳代 66 人、
10 歳代 38 人。

(2) 報告書 No.86「鳳山南淳」

現地調査に出発するまでに7通の回答を得た。全羅北道 金堤市 龍池面事務所からの回答一通だけに、報告書 No.86「鳳山南淳（李南淳）」さんが居住地（臥龍里690番地）で現在も生活されていることが電話連絡先と共に確認された。

「調査する会」の私と金恩受の2名は、宿泊先の群山観光ホテルまで出迎えに来ていただいた国立群山大学校 社会科学大学 経済学科教授 金恩榮（経済学博士）の自家用車で、群山市内に今も残る植民地時代の群山港税関、日本家屋等を案内していただいた後、金教授の大学内研究室で午後1時半からの聞き取りの打合せをした。

李南淳さんが、日本語に堪能な知人の「鄭順泰」さんの同席を希望されていることを当日知り、手みやげを追加購入して群山大学から金教授の自家用車で現地に出発した。

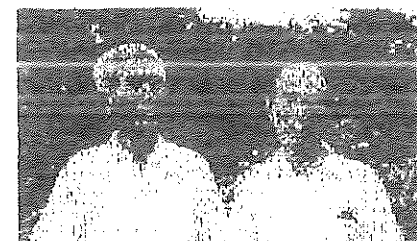


(3) 官斡旋の実態

『前触れもなく突然訪れた朝鮮総督府龍池面事務所（役場）の参事（チムサ）が、徴用（官斡旋）通知札状を持ってきて「行きなさい」と言うから

行った。強制的やった。今すぐ来いと言うから訳も分からずついて行った。何も準備せずについて行ったら強制的に連れて行かれた。その頃は全部強制だった。その時は相手が役所なので、逆らうことは出来なかった。

金堤から直行で汽車に乗って釜山まで行った。その当時、全羅北道が全部、金堤と直結されているのかわからないけど、その車両の中にたくさん人が集まっていた。釜山から埠頭に集められ船に乗って下関まで行った。下関から汽車に乗ってみんな各地に行ったのではないかな。ここ（金堤）から行ったひとは、みんなそこ（神戸）に行った。」と李南淳さんは当時を回想して語った。



李南淳(74)さん 鄭順泰(76)さん

(4) 神戸船舶荷役(株)での労働

幼く、おとなしかったこともあり李南淳さんは厳しい船内荷役作業（沖仲仕）から外されており、事務所内清掃作業に1ヶ月間就労後に発病し、回復しないまま職場復帰できずに帰国している。別添資料「厚生省調査報告書」の摘要欄どおり「病氣送還」されていたことは事実だった。

『1回だけの給料5円を受け取ったことだけは覚えている』と証言された。当時、日給4円30銭と「報告書」に記載されており、一日分の日当しか支払われていない。

李南淳さんは、神戸に官斡旋される前に北朝鮮のダム建設現場で砂利運搬作業に従事し、「道内動員」されていたことも証言されている。

李南淳さんは、日本で発病した足の病気の後遺症に今も苦しんでいる。（韓国の身体障害者5級認定）

鄭鴻永さんを偲ぶ会



一九九七年二月一日、宝塚ホテルでの『歌劇の街のもうひとつの歴史―宝塚と朝鮮人―』出版記念会の後、近くのスナックで。「ホテルでの出版記念会も悪くないな」と笑う鄭鴻永さんに、「次は帝国ホテルで」との声がかかる……。

兵朝研の会員である鄭鴻永さんが今年1月18日に異形性骨髄白血病で亡くなりました。満70歳でした。

故鄭鴻永さんの略歴

- 1928年12月8日 朝鮮慶尚北道尚州郡で生まれる。
- 6歳の時両親とともに渡日
- 15歳の時大阪市住吉区で解放を迎える。
- 1951年立命館大学経済学部を卒業
- 1958年姜易金女史と結婚
- 1960年から朝鮮総聯宝塚支部組織部長、副委員長を歴任
- 1966年から78年まで委員長を務める
- 1979年から一年半兵庫県朝鮮人商工会副理事を務める。
- その後1995年まで朝鮮総聯宝塚支部顧問に
- 1985年兵朝研入会、「兵庫と朝鮮人」に『大阪国際空港建設と朝鮮人』を執筆
- 1987年「釜山と朝鮮人強制連行」に『資料編―兵庫県の釜山と朝鮮人年表』執筆
- 1990年「地下工場と朝鮮人強制連行」に『戦時下地下軍用施設建設と朝鮮人』『今、鮮やかによみがえる「朝鮮國獨立」の文字―川西航空機・甲陽園地下工場―』『北朝鮮から大勢の若者が連れて来られた―川西航空機・福知山地下工場―』を執筆、『戦時下地下軍用施設一覧表』『全国の研究調査グループ紹介』を掲載
- 1993年「在日朝鮮人90年の軌跡」に『伊丹協会の組織と活動―皇民化政策と朝鮮人部落について―』『住友電工伊丹製作所と朝鮮人―ある在日徴用工の証言を追跡して―』『三田に残る地下トンネル―大阪造兵廠藍本地下工場』『尹昌運―設営隊員としてネグロス島へ』を執筆
- 1997年1月 著作「歌劇の街のもうひとつの歴史―宝塚と朝鮮人」出版

案内のちらし. 再録です.

「強制連行調査ネットワークの集い2000 in 神戸」ご案内

全国各地で強制連行調査の活動にたずさわっておられるみなさん。これからその活動を始めようとしておられるみなさん。来る9月9日～10日、下記のとおり「強制連行調査ネットワークの集い2000 in 神戸」を開催します。各地での調査結果を発表し、情報を交換し、これからの調査活動のエネルギーを得ることができるよう「集い」となることを願っています。ご参加をお待ちいたします。

2000年6月23日

兵庫朝鮮関係研究会 代表 徐根植
(財)神戸学生青年センター 館長 飛田 雄一

日時/2000年9月9日(土)～10日(日)

会場/神戸学生青年センター
(〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1
TEL 078-851-2760、阪急六甲下車 北東徒歩2分)

プログラム/(予定)

<9月9日(土)>

- 13:00～14:00 受付
- 14:00～14:30 開会行事
- 14:30～15:10 地元からの報告「神戸港の朝鮮人・中国人強制連行」同調査する会
- 15:10～15:40 鄭鴻永さんを偲ぶ会
- 15:40～18:00 各地からの報告(各5～10分、発表者募集中)
- ※ 発表希望者は、8月10日までに申し込みください。A4、4枚までのレポートを9月5日までに送ってください。冊子にして配布します。間にあわない方は、150部各自で印刷してお持ちください。
- 18:30～21:00 交流会(含夕食)

<9月10日(日)>

- 9:00～12:00 テーマ別交流会
- 13:00～17:00 フィールドワーク(予定)
- ①神戸電鉄コース、②神戸港コース、③西宮甲陽園地下工場跡コース、費用別途。

参加費/2000円(資料代込)。宿泊代4000円(朝食付、相部屋)は別途。

交流会費4000円(予定)。

定員/120名(宿泊は、60名)

申込み/①氏名、②連絡先、③所属(あれば)、④TEL-FAX(あればE-mail)、⑤宿泊の有無&性別、⑥フィールドワークの希望を下記、申込み先までFAX、ハガキまたはE-mailで。

申込み締切/8月25日

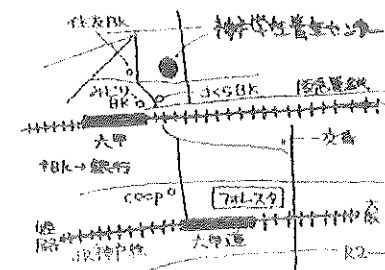
※ 前日(8日)、後日(10日)に神戸学生青年センター宿泊希望の方は、直接センターに申し込みください。(宿泊代は人数・部屋によりますが、2800～4500円です。)

※ 強制連行調査ネットワークはメーリングリスト、ホームページ等による情報交換をしています。ホームページアドレスは、<http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/renko.html> メーリングリスト参加希望者は、E-mail rokko@po.hyogo-iic.ne.jp まで。

主催/(財)神戸学生青年センター(館長・飛田雄一)・兵庫朝鮮関係研究会(代表・徐根植)

問合せ・申込み先/〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内 飛田(ひだ)

TEL 078-851-2760 FAX 821-5878 E-mail rokko@po.hyogo-iic.ne.jp



	日本の侵略の歴史を知るわかやまの会,,和歌山市有本25 大場誠三郎様方,0734-33-1619,
鳥取県	
島根県	
岡山県	倉島山地下工場を語りつく会,712-0025,岡山県倉敷市水島南春日町33-1 倉敷医療生活協同組合内,0864-48-6210,
広島県	広島強制連行を調査する会,731-1142,広島市安佐北区安佐町飯室1445-1 山田方,082-835-0221,082-875-5445 強制連行された中国人被爆者との交流をすすめる会,,広島市小河内町1-13-3 広島キリスト教会会館,082-232-4214, 中国人強制連行・西松建設裁判を支援する会,730-0004,広島市中区東白島10-13 足立法律事務所気付 http://www.sikkou.co.jp/hokai/renko/index.html 三菱広島・元徴用工被爆者裁判を支援する会 http://www.mitsubishi-hiroshima.com/kyokai/kyokai.html
山口県	長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会,755-0031,山口県宇部市常盤町1-1-2 日本キリスト教団・宇部緑橋教会 戸井 気付,0836-21-0003,0836-21-7274
徳島県	
香川県	
愛媛県	
高知県	
福岡県	強制連行を考える会,970-0503,福岡県嘉穂郡桂川町吉隈52番地,, 厚狭朝鮮人収容所跡を保存する会,906-0000,福岡県北九州市八幡西区扶原1-10-3 ベ東録方,093-621-0923,
佐賀県	
長崎県	長崎の中国人強制連行の真相を調査する会,550-0062,長崎市筑後町2-1 教育文化会館内 市民運動ネットワーク長崎気 付,111-FAX095-822-4050
熊本県	セットンくまもと,558-6233,熊本市黒髪2-10-1 熊本大学文学部小松研究室気付,096-342-3333,
宮崎県	
鹿児島県	
沖縄県	

「強制連行調査」ネットワーク | 更新情報

電 最前線

阪神総局
勝沼 直子

宝塚市に住む在日朝鮮人一世の歴史研究家で「兵庫朝鮮関係研究会」の主要メンバー、鄭鴻永(チョン・ホンヨン)さんが一月十八日に亡くなった。地域の「在日」の足跡を事実の積み重ねで明らかにする手法で多くの研究成果を残されたが、未整理の貴重な資料も膨大だといふ。道半ばの死はさぞ無念だっただろう。志を同じくする研究者や市民のショックも大きい。

私にとって鄭さんは「トンネルの先生」だった。西宮市内に残る太平

鄭さんからの宿題

「知らないことは聞いてほしい。そして、伝えてほしい」。一年半ほど前、初めて訪れた地下壕で言われた。知らない者には寛容に、知ろうとする者には粘り強く、どんなときも全身で語ってくれた。

鄭さんが先頭に立って訴え続けた地下壕の保存、という宿題が残った。壁の文字は急速に薄れつつある。行政と市民が協力し、いい知恵を出せないものか。シク(泣く)。

洋戦争末期の軍用工場跡「甲陽園地下壕(こう)」で、多くの朝鮮人が建設に動員され、壁面には「緑の春」「朝鮮国独立」などの文字が見える。最近増えている中高生らの見学の手配で地下壕に行くたび、鄭さんが待っていた。

「神戸新聞」2000年3月7日

歌劇の

宝塚と朝鮮人

神戸市立・青年センター出版部

第一部 埋もれた足跡をたどって

西谷の山にねむる朝鮮人たち
ある朝鮮人部落のルーツをたずねて
武庫川・逆瀬川改修工事と四工場
朝鮮へ行った山本の植木
尾宝建設工事と小浜村の朝鮮人
皇民化政策と宝塚協和会
良元村の二人の朝鮮人村会議員
宝塚空襲と川西航空機
旧西谷村役場に残る朝鮮人調査書類
宝塚の四・二四阪神教育闘争と民族教育
人災だった西田川部落の水害
宝塚の朝鮮寺

159 145 100 80 48 7

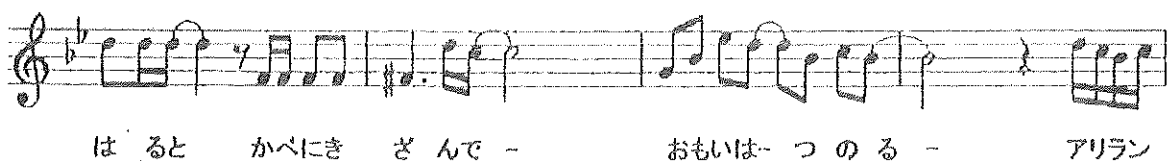
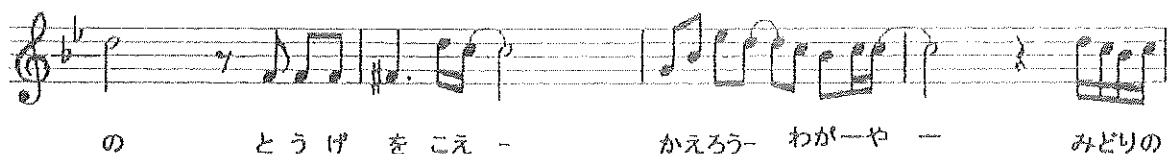
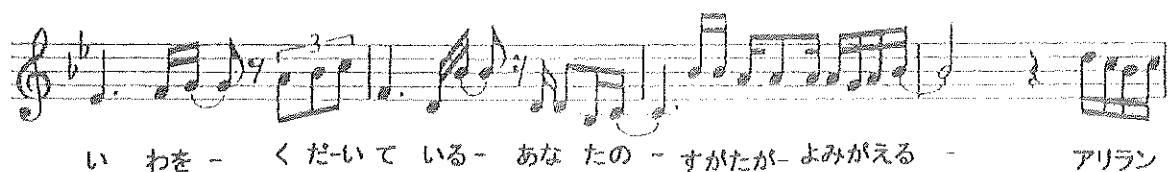
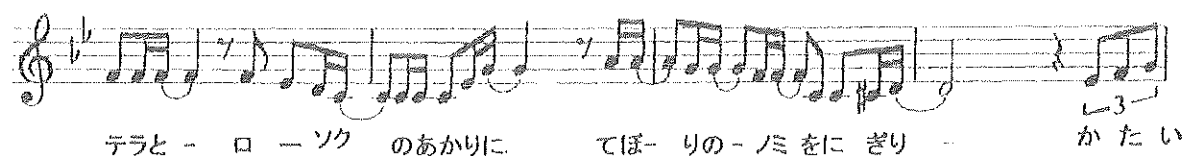
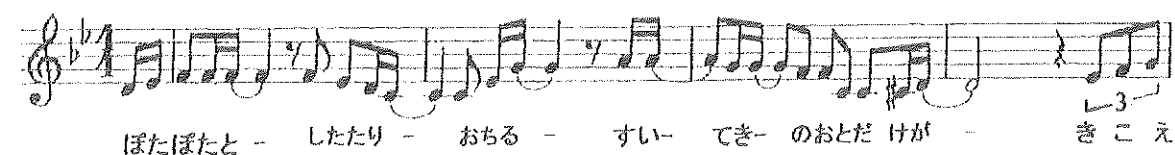
第二部 故郷遠く宝塚に生きて(聞き書き)

御宿さんの朝鮮人チゲクン(徐己用)
四工場にあった飯場のこと(崔漢伊)
トロコで廃川敷を埋めて(申在煥)
チヨギリ・ハルムニと呼ばれて(裴泰秀)
鳴尾 伊丹飛行場工事から四工場(韓吉男)
舞鶴の海軍施設工事に連行されて(朴吉男)
生き残ったのが不思議です(金章煥)
七四才まで現役のダンプカー運転手(吳再煥)
一カ月間、学校に泊まり込んだ(崔斗雲)
「護国二三部隊」から日本に帰る(崔聖旭)
船坂の砂防工事のことなど(徐廷燦)
空襲の中を朝鮮から仁川へ(黃斗雲)
地震で全壊して仮設住宅に住む(吳蓮子)
三工場から立退きで西田川へ(趙福来)
「さかなや金さん」の裏として(高南彦)

233 221 210 206 191 186 187 178 173 171 166 155 126 100 80 48 7

アリランの峠を越えて

原詩 鄭 鴻永
作詩・作曲 ポン四郎



	中国人強制連行を考える会, 137, 東京都江戸川区松江1-2-7, 03-3651-2653, 03-3651-3459 八王子の地下壕問題を考える会, 152-0054, 東京都八王子市小門町3-4-101 鶴のんぶる会内, 0426-23-5132, 0426-23-7319 浅川地下壕の歴史を語る会, 197-0090, 東京都八王子市市川町244-7 中田均様方, 0426-52-0544, 日本鋼管元徴用工裁判を支援する会, 102-0073, 東京都千代田区九段北1-1-4 都職労特別区一部事務組合気付, TEL03-5210-9416 (矢野) FAX03-3234-1005, http://www.dia.or.jp/~nishi18/ 日本の戦争責任をハッキリさせる会, 150-0003, 東京都渋谷区渋谷1-5-9 パル青山301, TEL03-5450-0652, 03-5455-0706 http://www.hiroshima-sdas.or.jp/home/renko/renko.htm 関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会, 133-0065, 東京都江戸川区南篠崎町4-15-21 第1竹内荘105 落合様方, TEL03-3675-8356 グループ・ほうせんか, 131-0044, 東京都墨田区文花2-16-3 西崎雅夫様方, TEL03-3614-8372
新潟県	上越朝鮮問題研究会, 943-3160, 新潟県中頸城郡大潟町四ツ屋浜501 佐藤忠治方, 0245-34-3159,
富山県	強制連行の足跡をたどる in 富山, 939-0003, 富山市神通町3-5-3 LL会議事務所内,,
石川県	
福井県	
山梨県	
長野県	松本強制労働調査団, 353-0861, 長野県松本市横が崎6-5-1 豆工房 小島気付, 0263-33-3123,
岐阜県	岐阜県地下壕研究会, 506-0011, 岐阜県中津川市駒場1520-13 下崎義輔様方,,
静岡県	静岡朝鮮人強制連行を記録する会, 433-0017, 静岡県浜松市葵師町303-25 小池様方, 053-422-0033,
愛知県	半田空襲と戦争を記録する会, 475-0533, 愛知県半田市花園町3-12-12 佐藤方, 0565-27-5548, 豊橋日中友好協会, 441-0000, 愛知県豊橋市 豊橋郵便局私書箱69号, 0532-45-4529, 瀬戸地下軍需工場跡を保存する会, 469-0503, 愛知県瀬戸市追分町54-1 瀬戸市職員労働組合内,, 愛知県下の朝鮮人強制連行歴史調査班, 464-0916, 名古屋市千種区希聖7丘1-5-3/ 高橋気付, 052-762-1529, 日朝協会愛知県連合会, 464-0013, 名古屋市千種区小松町6-8-1, 052-731-9445, 052-731-9445
三重県	
滋賀県	
京都府	
大阪府	高槻「タチソ戦跡」保存の会, 565-1006, 大阪府高槻市塚腔1-16-1 大田修様方, 0726-83-5792, 花岡「蜂起」問題にこだわる会(大阪), 551-0062, 大阪市西成区津守1-13-26 ナツメ 気付, 06-5561-9372, 大阪・中国人強制連行を語りおこす会, 557-0025, 大阪市西成区長橋2-5-11 ポッポ気付, 06-6451-9312, 「茨木市安威地区に戦争と平和を学ぶ公園を」茨木市民の会, 564-0962, 大阪府吹田市垂水町1-30-16 塚崎様方,, 韓国の原爆被害者を救済する市民の会, 560-0003 豊中市東豊中町4-21-10 市場淳子様方, TEL/FAX06(6854)7308, http://www.hiroshima-sdas.or.jp/home/renko/renko.htm
兵庫県	(財)神戸学生青年センター, 〒457-0004 神戸市灘区山田町3-1-1/ TEL 078-851-2760 FAX 078-1670 E-mail renko@renko.sas.ac.jp/http://www.hiroshima-sdas.or.jp/home/renko/renko.htm 兵庫朝鮮関係研究会, 661-0965, 兵庫県尼崎市次屋1-15-5 徐根様方, 06-6433-3443, 06-6439-3443 西宮甲陽園の地下壕を記録し保存する会, 663-8245, 兵庫県西宮市津門奥羽町9-36, 0798-24-2341,
奈良県	
和歌山県	紀州熊山の強制連行の史跡を調査する会, 542-0002, 和歌山県海南市日方1166 金静美様方, 07343-2-2555,

「強制連行」調査ネットワーク・リスト

1. ホームページのあるなしに関係なく公表されている連絡先および申し出のあった個人連絡先を掲載しています。もちろん、ホームページ、E-mailのない団体も掲載します。() 内の要約は飛田が適当に付けたものです。追加、訂正等があれば、E-mail rokko@po.hyogo-iic.ne.jp までご連絡ください。
2. 全国的または都道府県をまたぐグループについては連絡先の都道府県に入れてあります。

最近改定2000年4月9日

各地からの報告

1. 石川県・七尾への中国人強制連行 七尾強制連行を調査する会 角三 外弘 16
2. 中国人強制連行・西松建設裁判について* 中国人・強制連行西松裁判を支える会 中土 勝雅 20
3. 「港運敦賀華工管理事務所」華人労働者就労顛末書について 敦賀市 橋本 一郎 24
4. 強制連行された中国人―静岡県の事例― 静岡強制連行の歴史を調査する会 小池 善之 27
5. 「エノゲイラの飛んだ時……」砲台調査 広島強制連行の歴史を調査する会 内海 隆男 31
6. 日本製鉄裁判について* 日本製鉄裁判を支援する会 上田 慶司 35
7. 度尚北道。土谷クローム強制連行体験者をたずねて 一日本人・在日朝鮮人
8. 知られていない事実・朝鮮北半部からの強制連行* 兵庫県朝鮮人強制連行真相調査団 梁 相鎮 45
9. 栃木・茨城県下における朝鮮人強制連行・労働に関する調査現況 下野チョソン問題研究会 孫大勇 49

韓国人学生らによる共同聞き取り調査― 北海道・空知民衆史講座 殿平 真 41

北海道	札幌碑土を掘る会,007-0507,札幌市東区東苗穂7条3-7-16, 藻岩犠牲者の碑を維持する会,005-0532,札幌市南区北ノ沢3-15-22 堀口晃方,011-571-5876, 北海道強制連行実態調査委員会,069-0333,北海道江別市文京台11 札幌学院大学船津研究室気付,011-387-2366,011-387-2366 空知民衆史講座,074-0141 北海道濠川市多度志町弥栄 一乗寺気付、電話・FAX 0164-27-2359,Eメール tempi@cocoa.ocn.ne.jp , workshop4ka.org , http://zenbuu.alln.ne.jp/aiassyashi/ 日韓共同ワークショップ http://city.hokkai.or.jp/~lanakot/WS-1/index.html
青森県	
岩手県	
宮城県	
秋田県	
山形県	
福島県	
茨城県	
栃木県	
群馬県	旧中島飛行機太田地下工場を保存する会(トンネルの会),373-0663,群馬県太田市石原221-17 石塚久則方,0276-46-1681, 群馬県朝鮮人・韓国人強制連行追悼碑を建てる会,371-0031,群馬県前橋市下小出町1-13-2 猪上操方,027-232-7511,027-232-7511
埼玉県	日朝協会埼玉県連合会,330-0802,埼玉県大宮市宮町1-27(大栄橋下),048-641-4225,
千葉県	「もうひとつの歴史館・松代」建設実行委員会,756-0042,千葉県千葉市中央区椿森1-25-2 黒崎操方,043-275-7746,026-778-7746, watsushiro@bs.ai-ho.ne.jp , http://www.bs.ai-ho.ne.jp/watsushiro 千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼調査実行委員会,千葉県船橋市丸山3-2-11 平形操方,TEL047-438-1737(午後6時以降)
神奈川県	相模湖グムの歴史を記録する会,199-0201,神奈川県津久井郡藤野町佐野川3367-4 高村方,04258-3-2142, 日吉台地下壕保存の会,223-0064,横浜市港北区下田町3-15-27 寺田方,045-562-1282,
東京都	在日朝鮮人運動史研究会・関東部会,182-0017,東京都調布市深大寺元町1-24-3 777問題研究所内,0424-82-7012,

1. 石川県・七尾への中国人強制連行

「強制連行調査ネットワーク2000in神戸」資料

2000. 9. 9

七尾への中国人強制連行

七尾強制連行問題を調査する会 かくみ 角三、外弘

1. はじめに

(1)大陸文化の窓口だった日本海側

日本海は古くから中国や朝鮮半島との交流の窓口であった。石川県には、能登地方を中心に朝鮮半島や渤海との交流を物語る遺跡や文化が色濃く残っている。また、北九州から山陰、北陸は古代には日本海文化圏ともいべき交流があったといわれる。鉄道や自動車・飛行機による陸上・航空交通が主流になる前は、海上交通が大きな役割を果たしていた。日本海を渡って、中国や朝鮮半島、北九州、出雲から人や文化が越（こし、北陸地方の古称）の石川県へも伝わってきたのであろう。

(2) 能登の中心地・七尾

石川県の北部は能登地方、金沢などの南部は加賀地方とよばれている。七尾は能登半島の付け根に位置し、能登地方の中心地である。波静かな七尾湾にある七尾港は天然の良港といわれ、七尾は港とともに発展してきた。幕末には開港場の候補地とされ、米・英・蘭の黒船が入港している。中世の能登守護畠山氏の財力や江戸期の回船問屋や水産物関係の商人の繁栄は、港がもたらした光の部分であろう。いっぽう、シベリア出兵をはじめアジアへの侵略戦争に出發する兵士を送り出したことや中国人強制連行などは、七尾港の影の部分であろう。港は平和なときには人や物資の交流により新しい文化をもたすが、戦争になれば苦しみを引き起こす。七尾港も、その例外ではない。

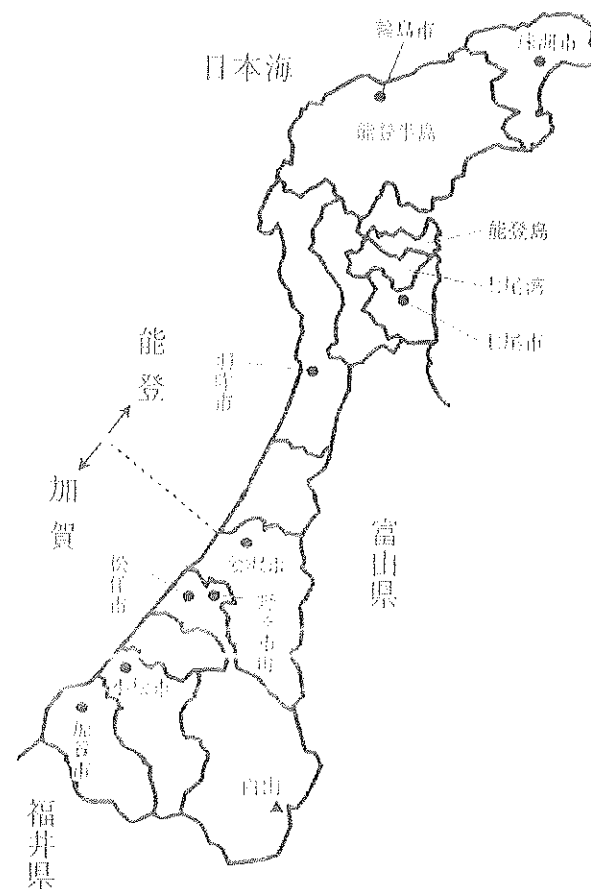
2. 七尾への強制連行

(1) 399人の中国人が七尾へ

『外務省報告書』によれば、七尾港へは399人の中国人が連行され、七尾港で港湾荷役の労働をさせられている。北陸地方では、石川県の七尾港のほか、敦賀港（福井県）、伏木港（富山県）、初瀬港へ中国人が強制連行されている。戦争末期になると米軍の空襲で太平洋側の港が使えなくなり、日本海側の港が中国などアジア各地から運ばれてきた食料や資源などを荷揚げする役割を担ったからである。

七尾へ強制連行された中国人は、中国各地で１９４４年頃に日本軍に捕まえられている。道路や市場、仕事場などで日本軍の「勞務狩り」（うさぎ狩り）で捕まえられた人がもっとも多く、馬得志さんのように抗日分子とされて捕まえられた人、日本軍のかいらいであった地方の自衛軍に入っていて「済南に仕事がある」とだまされて山東省済南へ送られた人もいる。大部分は、農民であった。省別内訳は河南省から２６２人、山東省から５８人、河北省から１８人、陝西省から１５人などとなっている。

日本軍に捕まえられた中国人は、山東省済南にあった日本軍の捕虜収容所(勞工訓練所)に入れられた。そこで捕虜から勞工に仕立て上げられ、山東省青島から船に乗せられ下関へ着いた。中国から七尾へ直接連行された200人(七尾では第1隊・第2隊)は下関から汽車で七尾へ送られ、1944年11月に七尾港近くの



強制連行調査ネットワーク・ホームページの紹介

「強制連行調査」ネットワーク

$$1/1 \wedge^0 \text{---} 5/12$$

「強制連行調査」ネットワーク

<http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/renko.html> 最近更新 2000.6.28

2000年9月8日~9日

「強制連行調査ネットワークの集い2000 in 神戸」を開催します。

1990年から各地で10回開かれた

「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」が

<http://www.hyogo-ic.ne.jp/~rokko/kr.html>

99年7月31日～8月1日・第10回九州集会（熊本）で終了しましたが、その後のネットワークとしてつくられたものです。

当面、関連団体のリストをみんなで作りたいと思います。

団体リスト | 更新記録

メーリングリストをつくりました。

参加希望者は、rokko@po.hyogo-ic.ne.jp

まで「強制連行調査ネットワークメーリングリスト参加希望」というメールをお送りください。

管理人・飛田雄一（ひだ ゆういち、(財)神戸学生青年センター館長）

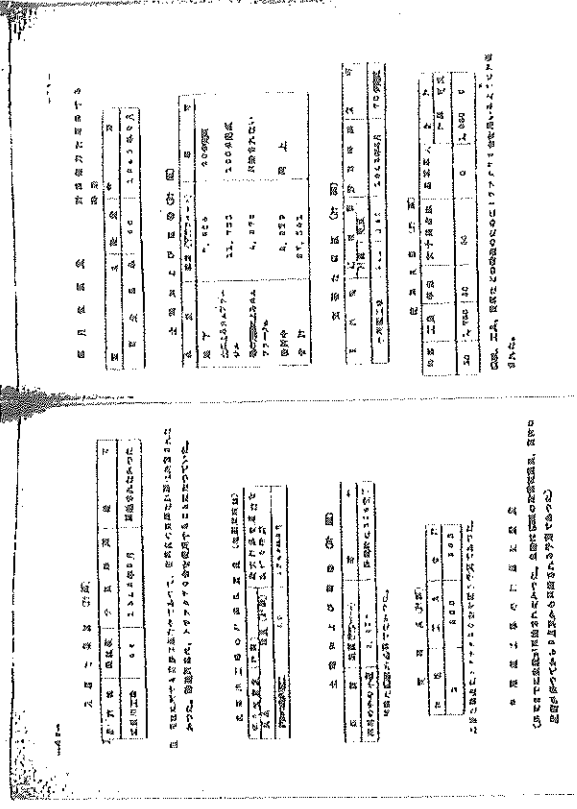
E-mail rokko@po.hyogo-ic.ne.jp

神戸学生青年センターのHPへ

<http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/renko.html>

2000/09/08

また、神戸女学院の中に「工作機械54台を設置、女子学生作業員170人によって紫電改部品の製作を開始した」と記録されています。
以上が「本土決戦」体制の中で、最後の高性能戦闘機といわれた「紫電改」を造るための「まぼろし」の地下生産計画であったのです。



『米国防務省調査報告書』
『川西航空機株式会社』より 航空自衛隊幹部学校・派

よみがえれ 緑の誓 — 西宮・甲陽園地下壕ガイドブック —

2000年7月24日 第1刷発行

編集・発行 西宮・甲陽園の地下壕を記録し保存する会

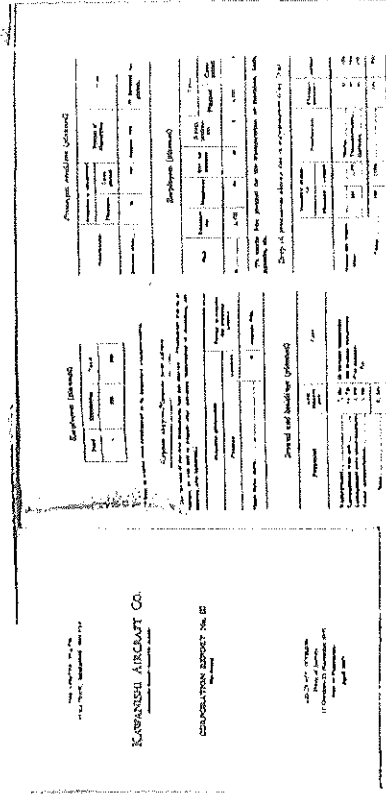
〒663-8245
西宮市津門呉羽町9-30 教育会館
西宮市教職員組合
TEL 0798-34-2341
FAX 0798-34-2530

頒価 700円

そして、完成すれば、幹部30人、工員1750人、学生50人、女子挺身隊1850人が就労して操業することになっていたことも詳細に書いてあります。
ここで、この報告書に書かれている川西航空機の他の地下工場について、またそれぞれの地下工場の完成後の操業計画について、簡単に記しておきたいと思います。

地下工場名	所在地	計画面積㎡	工作機械数	従業員	備考
正明寺	福知山	6,400	154	500	調査、確認 現在無
石原	福知山	1,100			調査、未確認
北条	加西	7,000	309	1,200	調査、確認 現在無
芦葉園	西宮	16,000			調査、未確認

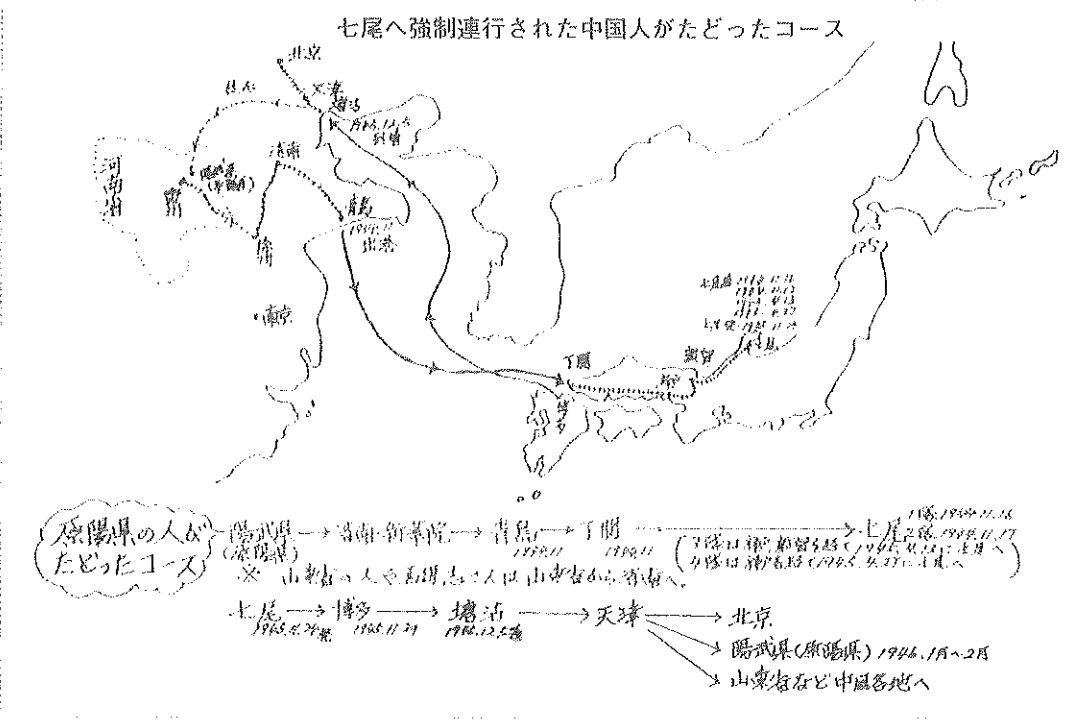
次に、これは地下工場とは別ですが、参考のため少しふれておきましょう。
接収されていた関西学院の建物に、川西航空機の第一、第二、第三設計部と印刷工場が疎開していたが、ここには1945年7月15日現在、幹部30人、工員252人、学生110人、女子挺身隊136人が配置されていました。



『米国防務省調査報告書』第18巻
『川西航空機株式会社』原文より

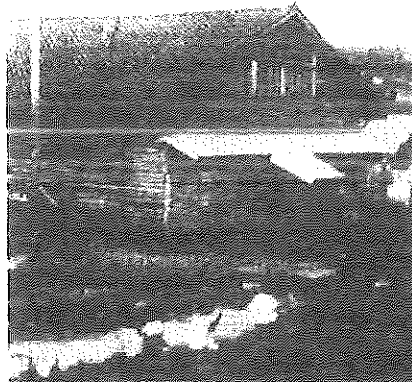
—24—

七尾華工管理事務所に入れられた。1945年4月には敦賀から99人（神戸へ連行された後敦賀へ移された人）、神戸から100人の計199人が七尾へ移され（七尾では第3隊・第4隊）、合計399人となった。



②七尾での苛酷な生活

中国人が押し込められた七尾華工管理事務所は倉庫を改造した平屋の建物であり、事務所と中国人の宿舎にあてられた部分に分かれていた。宿舎部分は間口20間(約36メートル)、奥行き6間(約11メートル)に過ぎず、399人が寝泊まりできるような広さではなかった。畳も布団もなく、敷き布団がわりに藁を敷いただけの木製2段ベッドに寝かされており、宿舎とはとうい言えないようなものであった。宿舎から、中国人たちは七尾華工管理事務所の職員に引率されて七尾港へ向かい、1日に12時間～14時間もの港荷役（100kgの荷物を船から陸揚げしたり、陸揚げした荷物を貨車積みしたりするなど）の重労働を強いられた。しかも、朝、昼、夜とも1個100グラムほどの饅頭（蒸しパン）2個という食事、着替えの衣服の支給はなく、風呂にも入れず、病気になっても薬も医師の治療もない衛生状態であった。栄養不足と過労、不衛生な環境の中で15人が七尾で死亡した。生きのびた人たちも、失明者64人を含めて重症眼病307人、皮膚病179人、胃腸炎124人など、全員重症状態であった。



七尾華工管理事務所の建物（1948年頃）

七尾港では港湾会社の労働者のほか近隣から勤労働員で集められた人、学徒動員で集められた旧制中学の生徒も働いていた。特に、旧制中学の生徒は中国人の港での様子を間近に見ており、私たちの訪中調査報告会にも参加して当時の様子や意見を述べたり、中国人生存者の七尾訪問に協力してくれたりするなど、私たちの運動に理解を示してくれている。

③戦後の要求闘争

日本の敗戦は七尾の中国人にはすぐに知らされなかった。9月に入り、神戸の仲間から日本の敗戦を知らされた中国人は、9月～10月にかけて、食事や衣服、医療など衛生状態の改善、捕虜の待遇を求めて要求闘争を行った。その際、市民との間でトラブルも発生し、一時七尾市内が混乱した。警察はGHQのお墨付きをもらい、中国人を逮捕し、幹部42人を金沢の警察へ移した。この闘争は、日本側では「七尾華工事件」

とよばれ、警察資料をもとにして郷土史家などが記録を残しているが、中国人側の証言がなく、一方的であるとの指摘もされていた。七尾市民の間には、「事件」のことが強く印象づけられ、「自分たちは被害者である」という考え方が強い。七尾へ強制連行された中国人幸存者（中国では生存者のことを幸存者という）は「強制連行して牛馬のように重労働を強いたうえ、さまざまな危害を加え、病気になっても医療を受けさせず、まるで奴隷のように酷使した。私たちは生きるために要求と抗議を行った。日本政府は私たちに謝罪もしていない」と語っている。私たちは、中国人生存者の証言をもとに中国人強制連行の原因と本質を訴えている。

七尾市民の中には、日本の敗戦後、外出できるようになった中国人の世話をしたり交流したりした人もいた。そうした家には中国人が帰国する時においていた写真が残されている。中国人に対する差別意識が強かった当時であっても、中国人に対して人間的なつきあいをした良心的な民衆がいたことを地域の歴史に残さなければならない。

(4) 帰国

『外務省報告書』によれば、七尾へ強制連行された中国人は日本の敗戦後の1945年11月に七尾港駅を出発し、帰国の途についた。博多まで特別列車で行き、福岡から船に乗り12月初旬に天津（塘沽港）へ着いている。七尾で死亡した15人の遺骨も天津まで運ばれている。天津で国民党軍に入るように勧められたが、大部分の人は断り徒歩で故郷へ向かった。生存者の証言によれば、食べ物もなく、故郷までたどり着けず途中で死亡した人も多いという。

(5) 一衣帯水(いちいすいすい)

七尾港には「一衣帯水」(日中友好)碑が建てられている。1977年8月15日に七尾日中友好協会が結成され、その日に除幕された石碑である。当時の早瀬市長の後押しで作られた会であり、碑である。碑の表には中国仏教会会長で書家の趙 樸初さん(2000年5月21日死去)が揮毫した「隣邦水共一衣帯、文化花開連理枝、休戚相関日禦侮、子孫萬代永提携」という七言絶句の漢詩が、裏には七尾で死亡した15人の中国人の名前と七尾市日中友好碑建立趣旨が刻まれている。

その後、七尾日中友好協会は毎年8月15日に「一衣帯水」碑の前で、七尾で死亡した中国人15人を追悼する日中友好碑前祭(法要)を続けている。



「一衣帯水」碑と七尾幸存者(中央の3人) 1999. 7. 24

3. 中国人強制連行の調査

七尾への中国人強制連行の調査は、1970年代に地元の教職員によって行われたが、当時は中国人の証言を得ることができなかった。敗戦50年の1995年8月に、七尾へ強制連行されていた馬得志さん(中国社会科学院考古研究所教授)が偶然のきっかけで七尾を訪問した。馬得志さんは、中国で日本軍に捕まえられた様子や日本へ連行される状況、満足な食料が与えられない中で七尾における厳しい強制労働、宿舎で不衛生な生活を強いられたこと、帰国後の苦しい生活などを七尾市民に証言した。馬得志さんの七尾訪問は、中国人に対する差別意識を払拭できず、強制連行の本質を知らされないままに「日本の敗戦後に中国人が暴動を起こした」という被害者意識が強かった七尾市民に、戦争加害と日中友好を考えさせる機会になった。これを機に私たち地元七尾の教職員が調査を始めた。しかし、七尾での調査には限界があり、中国側の証言を得るため馬得志さんに幸存者さがしを依頼した。馬得志さんや中国同僚友誼促進会(中国外務省の外郭団体)などの尽力で、七尾へ強制連行された中国人幸存者が確認された。

4. 2次にわたる訪中調査と幸存者の七尾訪問

私たちは、七尾へ強制連行された幸存者に会うために、17名で訪中調査団を結成し1996年8月に第1次訪中調査を行った。第1次訪中調査では河南省原陽県と山東省済南市中で、馬得志さんなど5人の幸存者に対面し、証言を聞くことができた。1998年には13名による第2次訪中調査を行い、河南省原陽県で幸存者13人から証言を得た。訪中調査では、馬得志さんとともに、七尾へ連行された中国人が集められた

■「オイオイ」と呼ばれてそのまま連行

甲陽園には、すでに日本に住んでいた朝鮮人の他に、朝鮮から強制連行されてきた者もいたと駿河さんは証言しました。

「飛鳥組の場合は大阪の多奈川や千里の海軍工事をしていた朝鮮人を連れてきた。それでも人手が足りないので、朝鮮まで行って連れて来られた者も甲陽園にはいた。少なくとも60人ぐらい。畑仕事をしていた所へトラックを乗り付けて、「オイオイ」と呼ぶ。何かしらと思っただけで寄ってきた者を片っ端からトラックに乗せてそのまま連行してくる。それらを各組に割り当てるのだけど、その人らは言葉がわからず、見ればすぐ区別がつくようなナッチャ服を着せられて、みんな「マル防」の印をつけた。こんな格好では逃げるにも逃げられへん。その人らの飯場は、普通の飯場から離れて甲陽園西側の山の中にあつた。たくさん生えた松の木を、坑木にするため切つてしまったやけど、そこに5、6棟の飯場が建てられましたよ」「徴兵検査の時に調べると、本人の言う本籍地や名前が書類にあるのとまるっきり違っているのでビックリした。仕方がないので、一人一人書類の通りに覚えさせるのが一番苦労した」

各地のトンネル工事に強制連行されて来た朝鮮人達は、甲陽園の場合と同じく、一般の飯場から離れた所にあった飯場に寝泊りし、厳しく監視されていたことが報告されています。これは日本にいた朝鮮人達が逃亡の手引きをすることを恐れたためです。

また軍需工場などへ連行されて来た者が飯がへって辛抱できない。また空襲で焼け出されても行くところがない。それで同胞を頼って飯場に逃げ込んできた者が多かったのです。飯場へ入れば食物もあったし、逃亡してきた者も皆ががっかりして捕まるから捕まる心配がなかったのでしょうか。

■「預けた機械がみんな無事だった」

1945年8月15日、昨日まで谷間に響きわたっていたダイナマイトの音がピタリと止まりました。

待ちわびた解放の日を迎えた朝鮮人達は、あちこちの飯場から一人一人残らず東山の谷間へ集まってきました。日が暮れると、真ん中で大きな火が焚かれて盛大な祝賀会が始まったのです。

川西航空機の「甲陽園主任」として鳴尾の本社から派遣されていた宇野唯男さんは、その夜のことや運び込んだ機械のことを次のように話してくれました。

「私の感じでは、全部で2000人ぐらい集まっていたと思います。私も招待されて参加しました。肉もあつたし、酒もありました。トンネルのなかに入っておくと自然冷蔵庫ですからね。すんでから甲陽園まで行進したんですが、海軍施設部の事務所は閉まっていて誰もいませんでした」

「その頃はもうすでに、旋盤やミリングなんかも、かなりの工作機械を甲陽園に運び込んでいました。六軒町の川筋(御手洗川)の道を遡って、

いっぺんは橋が落ちてしまつて車が動けなくなつて難儀したこともありましたが、切羽作業はトンネルの中、板金仕事は瓦土工場でする計画でした。戦争が終わってから、落ちていたたぐいずれ取りに来るから、それまで預かって欲しいと朝鮮人長老に頼んで帰ったのでした」

「戦後すぐに賠償指定工場になった川西は、アメリカ占領軍の命令であちこちの疎開地にちぎられていた機械を、いったん甲南工場へ集めてリストを作ったのですが、甲陽園の機械類はほとんどそのまま返ってきました。他のところはモーターなんかねえましたのが多かったのですが、朝鮮人は長老を尊敬するのは知っていました。甲陽園にいた人達はよく統率をとれていたように見受けられたし、リーダーとしてもしっかりしていたと思いますよ。」

■ まぼろしの地下工場計画

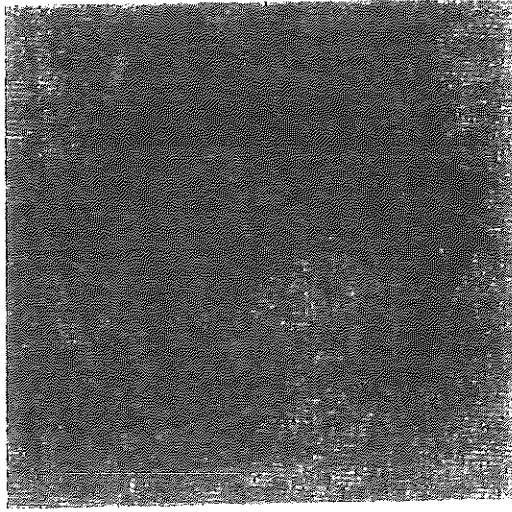
『米国戦略爆撃団報告書』第18巻、『川西航空機株式会社報告』の記述によると、「甲陽園工場」には211台の機械を設置する計画であったが、160台が運び込まれていたと記述しています。また、機械、工具、資材など輸送のために応用トラック75台を用いることになっていました。

の事務所に保管されている書類綴りの中に、工事が行われていた1945年の3月から8月までの間に死亡した朝鮮人4人の火葬認可証が残されています。

氏名	年令	住 所
鄭 徳 守	25	西宮市中字目神山1
ベ 福 寛	44	西宮市中字目神山
新井 鶴 基	17	西宮市中字目神山1-216
光山香太郎	18	中字目神山 大阪海軍施設部

その当時の甲陽圏一帯の地名は、丘陵地までもがすべてが目神山でしたが、二人の住居欄の記載に注目したいと思います。新井鶴基の番地、目神山1-216は、現在の東山町の6号トンネルのすぐそばで、飯場があった場所と一致しています。また、創氏改名はしていても朝鮮人と見てほぼ間違いのないと思われる光山香太郎は、番地の代わりに「大阪海軍施設部」と明記されています。

駿河さんがいう事故死の者が含まれているかどうかは不明ですが、状況から判断して、この4人がトンネル工事による死亡者であると考えられます。しかし遺骨がどこに埋葬してあるのか、身内の誰かが引き取って行ったのか何一つわかっていません。



満池谷墓地に保管されていた火葬認可証

「トンネルの工事は、私が勤めていた飛島の他に、大林、西松、鴻池、奥村などが入っていました。どの組もみな海軍からの請負いやった。ハッキリした数はわからんけど、一つの組で100人くらいやったから、全部で500人くらいはおったと思う。みな、駅の西側の山の中や、大池のそばなんかにあった飯場で寝泊りしていたのをよう覚えてる。

トンネルは一ヶ所が4、5本の単位で、それが何ヶ所にもあった。飛島は大師道の交差点から北向きに4、5本掘ったけど、陥没してしもうて今も残っていない。『はり半』に向かって上がる道の左側のは今も残ってますよ。(現在はまだ残っていません。)」

■ ダイナマイトの事故で死んだ朝鮮人

苦しかった日々を思い出しながら駿河さんの話は続きます。

「海軍の秘密工事やったから監視の目が厳しうて、他の組の工事現場や飯場には私等でも近づけなかった。一般の人はもちろん立ち入りが禁止されとった。突貫工事やったから昼夜兼行でトンネル掘ってましたよ。仕事を急がせるため毎日、掘り進んだ距離を測って、一番たくさん掘った班には金一封か酒が出る。みな、これだけが楽しみで一生懸命やった。

ある時、仕事してるトンネルの中に入ろうとして、日本人の工夫から、生きて出られんかもしれんから絶対に入らなと止められたことがありますよ」

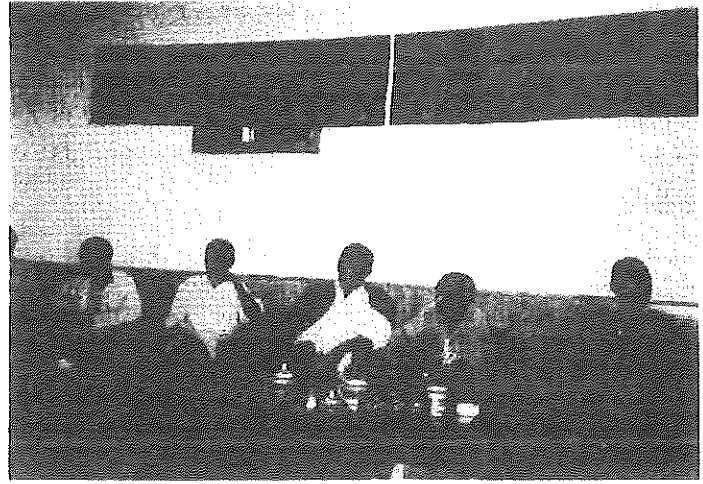
「ある時、落盤事故で逃げ遅れて死んだ朝鮮人の班長がいましたよ。火薬を詰め込んで導火線に煙草の火でいっぺんに何本も点火して素早く避難するんやけど、その時は逃げ遅れて溺死の重傷を負いましたが、とうとう助からずにその夜、息を引き取った。海軍に接収されていた旅館でお通夜したけど、私も列席したのを覚えてる。」

■ 火葬認可証に「大阪海軍施設部」と記載

西宮市営の満池谷火葬場と墓地は、甲陽圏からはすぐ近くで、この火葬場

収容所「新朝院」(山東省済州市)、中国を離れた青島(山東省)、帰国して着いた天津を訪れ、馬得志さんや中国人研究者から証言も得ている。

こうした調査は、「七尾強制連行問題を調査する会」(略称「調査する会」という市民団体で行っている。メンバーは教職員や日中友好協会会員などである。私たちは、七尾港開港100周年にあたる1999年7月には、七尾へ強制連行された中国人生存者3人とその家族など計8人を七尾へ招待し、証言会や市民との交流などを行った。このとりくみには、大阪や神戸、富山からも参加があり、これを機に港湾連絡会議という形で交流しながら、調査を続けている。



河南省原陽県で七尾生存者と座談会(第2次訪中)

これまでの調査で、私たちが現在の状況をつかんでいるのは、七尾へ連行された中国人399人のうち生存者14人、七尾で死亡した15人、帰国後死亡した12人の41人にすぎない。生存者も高齢であり、調査を急がなければならない。

5. 市民や子どもたちに知らせるために

私たちは、こうした調査結果を教職員や労働組合の関係者だけでなく七尾市民や石川県民に広く知らせるために訪中報告会を開催したり、全道紙記者の七尾市広報や一般の新聞・テレビで取り上げてもらったりした。教職員が多い会であり、教職員組合に働きかけて子どもたちに教えるための教材化をすすめている。すでに小学生の「夏休み張」(6年生用)に『七尾へ連れてこられた中国人』として載せられ、8.6平和教育などに活用されている。

地元の七尾・山王小では、日本の敗戦後に外出の自由を得た中国人が出入りした理髪店を中心に聞き取り調査を行った。中国人を差別するのが当たり前であった当時、店主の近藤栄次郎さん(故人)は、店へ来た中国人に行水をつかわせるなどの世話をし、中国人と心を開いて交流した人である。当時小学生だった近藤幹子さん(栄次郎さんの子ども)から聞き取りをした地元の山王小学校6年生が、栄次郎さんと中国人の交流を描きながら強制連行を考える紙芝居「七尾の大人(たいじん)」を1998年8月に制作した。山王小学校では同年8月6日の平和集会に幹子さんを招き、全校に発表した。このとりくみは、1999年1月の第48次全国教研(岡山)の平和教育分科会で石川県代表レポートとして報告されている。

1999年には、紙芝居をもとにして、地元の石川県教組七尾支部組合員と「調査する会」が協力し、教材ビデオ「七尾の大人(たいじん)」を制作した。七尾現地の撮影では近藤さんの家族も出演していただいた。この教材ビデオも活用して子どもたちに「七尾への中国人強制連行」を教えるとりくみが続いている。

※ 本会場で教材ビデオ「七尾の大人(たいじん)」(15分、1本1,000円)と「訪中報告集」(1冊1,000円)を販売している。

6. 今後に向けて

4月に大阪を訪問した張忠傑さん(大阪へ強制連行された張修正さんの遺児。河南省原陽県で日本へ強制連行された人の聞き取り調査を独力で続けている農民)の話では、七尾へ強制連行された裴希祥さん(1998年の第2次訪中調査で対面した人)が、その後にくつものことを思い出して七尾の人に話したいと言っていたという。第2次訪中調査で、原陽県で多くの七尾生存者に会うことができたのも、張忠傑さんが調査し、働きかけをしてくれたからである。その意味でも、原陽県を訪れて七尾生存者や張忠傑さんに会えればよいなど思っている。

2. 中国人強制連行・西松建設裁判について

中国人強制連行・西松建設裁判について

広島 中国人強制連行・西松建設裁判を支援する会 中 土 勝 雅

1 安野への中国人強制連行

1944. 8. 6西松組（現 西松建設）は広島市の北西約40kmの安野へ水力発電所建設工事のため、中国人360名を青島港から下関経由で強制連行した。

4箇所の収容所（坪野・1中隊100名、津浪・3中隊100名、香草・2中隊100名、土居・4中隊60名）に収容し、生活の総てを警備・監視つきの管理下において、南北約8kmにわたる導水トンネル工事に従事させた。

日本の敗戦後1945. 11. 24アメリカ軍のトラックで祖国へ出発したのは317名であった。

強制連行された中国人の出身地、職業、年令や安野での動向をまとめると次のようになる。

出身地は	山東省 291名（80. 8％）、江蘇省5名（1. 4％） 河北省 53名（14. 7％）、錦州市1名（0. 3％） 河南省 9名（ 2. 5％）、安徽省1名（0. 3％）
職業は	軍 人 254名（70. 6％）、農 業14名（3. 9％） 労 工 63名（17. 5％）、商 業 2名（0. 6％） その他 27名（ 7. 5％）
年令は	最低16歳、最高53歳、平均27歳で 16～19歳 67名（18. 6％） 20～29歳193名（53. 7％） 30～39歳 61名（16. 9％） 40～49歳 34名（ 9. 4％） 50～53歳 5名（ 1. 4％）

動向	強制連行 360名
死亡者 29名	船中死亡 3名 安野で死亡 26名
	病死 17名、事故死 2名 他殺 2名、原爆死 5名
行方不明 1名	鄭光遠（国防保安法違反で有罪判決、服役中に被曝、自力帰国）
途中帰国 13名、	1945年3月、病気・ケガで帰国させられる
解放後帰国者 317名	（被爆者 11名を含む）
労災事故による障害者 3名、	負傷者 112名、罹病者 269名

外務省報告書、聞き取り調査から

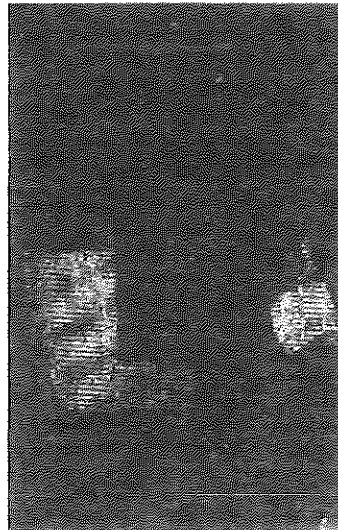
大阪海軍施設部の現場事務所は甲陽園駅のすぐ近くにありました。そこに勤務していた江上道子さんから頂いた当時の貴重な写真を見ると、全員写っていないとしても、設営隊というにはあまりにも人数が少なく、男性がわずかに11人だけです。その後の調べでわかったことですが、軍人の隊員はわずか、京大の学生が2名、東大1名、それに都島工専の学生が2、3名、いずれも下士官待遇であったのが敬用学徒であったそうです。

甲陽園に派遣されていた設営隊は、「200設営隊」の名前はついていたとしても、隊長名や編成隊員の構成などから推測して、独立した一つの部隊ではなく、大阪海軍警備府の特命任務に従事した大阪設営隊の分遣隊でなかったのかとも考えられます。

■ 「働いていた朝鮮人は500人ぐらい」

小編成の設営隊と大手建設5社の下で、トンネルの掘削工事にたずさわったのは、そのほとんどが朝鮮人でした。地元や関係者を捜し出して聞き取りを進める中で、朝鮮人労働者の話が断片的によく出てきましたが、誰よりも詳しく知っている人が甲陽園在住の駿河珠堤さんでした。

建設工事が行われていた当時、駿河さんは飛鳥組の現場事務員として工事に直接関係していませんでした。またそれだけではなく、朝鮮人達への食料配給の



市民集会で建設当時の様子を説明する駿河珠堤さん

仕事を担当していたので、工事のことから彼らの日常生活にいたるまで、鮮明に記憶していました。

以下、駿河さんの証言を中心に建設工事と朝鮮人について、その足跡をたどって見るとにしましょう。

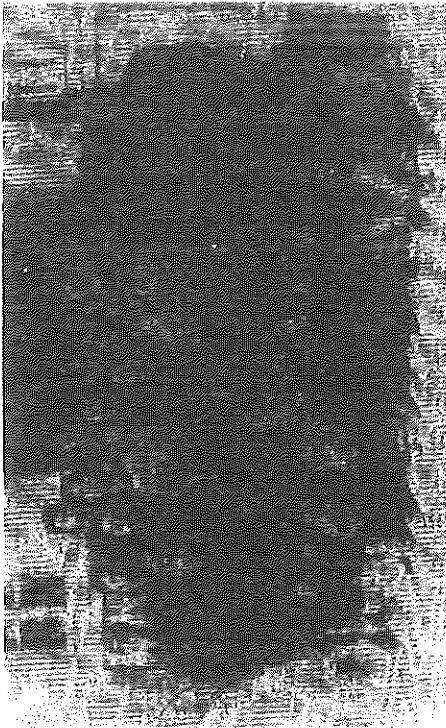
地下壕の建設工事と朝鮮人

■ 甲陽園地下壕の建設工事

甲陽園での地下壕建設工事は、大阪海軍警備府所属の第200設営隊の下で、大林組、西松組、鴻池組、奥村組、飛鳥組が分担して請負い、ほぼ同時に着工されました。工事については、鴻池組の社史に、「昭和20年、甲陽園工事、2,565,856円」の記述が一行あるだけで他の社史にはまったく何も書いていません。

一ヶ所のトンネル工事に、このように大手建設会社が5社も同時に施工した所は、全国的に見てもあまり例のないことです。

それは、工事の規模などとはあまり関係なく、工事が急がれていたこと、労働者の確保が困難であったことなどが理由ではなかったかと考えられます。日本の各地で建設された地下壕は多くの場合、実際に工事に従事したのは、数百人編成の設営隊員や民間建設会社の飯場頭などを通じて集められた朝鮮人達であったことが明らかになっています。



海軍第200設営隊員と事務員
(1945年5月26日撮る、江上道子さん提供)

歴史遺構として地下壕の保存を！

西宮市甲陽園の地に地下壕が建設されてから55余年、そして、その存在が世に明らかになり、調査が始まってから10余年の歳月が流れました。

マスコミの報道や見学会を通じて、市民の関心を集めるようになり、西宮市在住の作家、小田実さんを代表に「戦争の記録を残す市民の会」が発足、調査活動や保存運動が次第に広がりを見せるようになりました。

しかし、この10年の間に、誰もが予想しなかったさまざまな出来事があり、活動は一時、中断を余儀なくされました。

1994年秋、当時衆議院議長であった土井たか子さんの地下壕視察を契機に再び保存の声が高まって、市民集会を開催して新しく「保存する会」が結成されました。新年明けから具体的な行動を始めようとしていた失先にあの阪神淡路大震災だったのです。

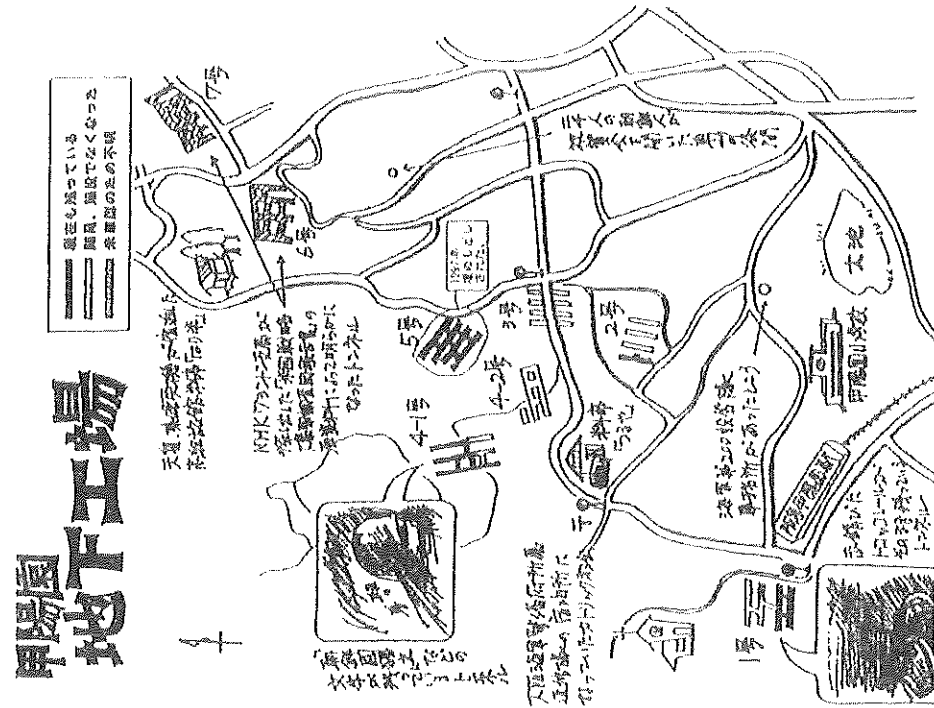
今、甲陽園周辺では、マンション建設が次々計画されたり、新たな造成工事などがあって環境が激変しようとしています。また、トンネル内部の崩落や風化も著しく、鮮明であった壁面の文字もすっかり薄れてしまいました。

日本の各地には、まだまだ数多くの地下壕が残っていますが「朝鮮國獨立」のような文字が残されている所は他に例がなく、甲陽園だけです。それだけに、日本国内だけではなく、アメリカ、ドイツ、ロシア、韓国など外国からトンネルを訪れた人達も、保存を強く望んでいます。また、いまでも見学を希望する人が後を絶ちません。

暗かった過去に決して目をそむけてはならないと思います。新しい世紀を目の前に、未来に生きる新しい世代に残す生きた教科書として、かけがえない貴重な歴史の遺構として、誰でも何時でも自由に見学できる地下壕を、いつまでも保存すべきではないでしょうか。

フィールドワーク②「甲陽園地下壕跡」コース・ガイド

建設当時の地下壕と現状



地下壕は、甲陽園西山町から、山王町、日之出町、新甲陽町、「はり半」のある東山町まで、広い範囲にわたって7ヶ所に分散して建設されました。いずれもが数本の横穴でつながり独立したトンネル群になっています。

2 西松建設との主な交渉経過

- ① 1993年8月 呂学文さん孟昭恩さんが広島、西松建設中国支店で交渉
◎ 公式謝罪 ◎ 歴史を伝える記念館 ◎ 正当な補償 を求める
- ② 1995年5月 宋継堯さんが東京、西松建設本社で交渉
◎ 3項目の要求 ◎ 失明に対する補償
外務省に川島アジア局長を表敬訪問する
- ③ 1995年8月 楊世斗さん陳秀英さん（遺族、長男・妻）が広島、西松建設中国支店で交渉
◎ 3項目の要求 ◎ 死亡通知の発行
- ④ 1997年5月 呂学文さん臧允伝さんが広島、西松建設中国支店で交渉
◎ 要求の早期実現

これまでの不誠実な対応などから、訴訟にふみきる決断

3 西松建設の主張

50年にもなる随分前のことなので、記録もないし、語り継がれたこともない、また、そのころのことを知っている社員も従業員もいない

- ① 1993. 9. 29の回答 「強制連行は国策で行なわれた」
「労務、食料、衣類など、当時としてはできる限りのことはした」
- ② 1995. 7. 21の回答 「中国人は国から割り当てられた」
- ③ 1995. 12. 7の回答 「一民間企業としての経済活動を法律の範囲内で行なっただけ」
「50年以上経過し、客観的事実の把握は非常に困難」
- ④ 1996. 7. 11の回答 「日中共同声明と日中平和友好条約で解決済み」
- 交渉担当者（中国支店 河野事務部長）はこれまで数回
「証拠書類があって言うのではないが、賃金はたぶん支払っているはず」と発言している

4 提訴と裁判の進行情況

- 1998. 1. 16 邵義誠さんが広島地裁へ提訴
原告（生存者）呂学文、宋継堯、邵義誠（遺族）楊世斗、曲訓先
代理人 弁護士 4名
- ◎ 1998年、4月21日、6月23日、8月10日、10月6日の計4回の口頭弁論
- ◎ 1999年、2月2日、5月18日、9月7日、12月7日の計4回の本人尋問
- ◎ 2000年、3月7日 中国・河北大学助教授 劉宝辰の証人尋問

◎ 2000. 9. 12 第十一回 口頭弁論

栗栖 薫さんの証人尋問 決定

◎ 2000. 10. 17 第十二回 口頭弁論

潘洪元さん（生存者）の証人尋問 決定

◎ 今後、龍谷大学教授 田中 宏、大阪大学教授 杉原 達の学者証人尋問の実現を目指して、裁判所へはたらきかける

5 被告側準備書面にみる問題点

- 被告西松建設は1998年に6月10日付、9月18日付で2回準備書面を提出し
 - ・ 資料も残っておらず、関係者も不明で、語り継がれた形跡もない安野での就労した事実のみ認めている
 - ・ 民法上のことなので時効、除斥により請求権は消滅
 - ・ 『事業場報告書』のコピーは原告側から受領したが、作成経緯も内容も不明で、認否の資料にはならない
 - ・ 死亡診断書の偽造、食事の内容、逆さに宙吊された中国人のこと等いずれも確認したことはない

など、答弁・主張しておきながら

- 2000. 5. 10付準備書面では、多くの部分で『事業場報告書』の内容を『外務省報告書』からとり、拠り所にしている。全く無責任で矛盾に満ちた内容に一変している

なかでも、次の3点は絶対に認めることのできない内容である

- (1) 侵略戦争を否定し、アジアを解放するための戦争であった
- (2) 戦争状態においては、どちらの国の国民も多大な被害を強いられたが、中国人も日本人と同じように被害を受忍しなければならない
- (3) 当時の華北の生活実態よりも、安野の生活の方が高い水準の生活内容であった

また、これまでに唯一回だけ、支援する会のメンバーと西松建設中国支店の交渉窓口の事務部長、課長の2人が一緒に安野の現地で聞き取りをしたことがあるが(1994. 11. 17)この日、話してくださった

- (a) 林 正子さん(81)、医師 林 盛夫さんの夫人
- (b) 岡田ヒデ子さん(72) 第3中隊収容所の隣、母屋を下請けの責任者に
- (c) 栗栖正未さん(63) 第二中隊の作業現場に居住

の話についても、事実関係、現場の状況確認をしたことはないと答弁している

- 宋継堯さんの失明に到るトロッコ事故のことも全く触れていないし
- 食料の支給量は華人 1日 1kg、摂取カロリーは初めから終わりまで、1日 6666カロリーとある 驚くべき数量である

戦時中の中国人強制連行の記録『草の墓標』（昭和39年刊）の中に次のような記述がある。

神戸船舶荷役株式会社に労役されていた中国人の平均一日の就労時間は十時間。二十四時間の徹夜作業もしばしばであった。海岸宿舎と名付けられた倉庫の中は、ワラむしを敷いてその中に押込め、冬でも暖房の設備はなかった。

日本軍占領地域にいた中国人の日本への強制連行は、昭和十七年十一月二十七日、東条内閣の閣議で「華人労働者内地移入に関する件」として決定された。翌十八年四月から実施され、九月九日神戸船舶荷役会社に二〇人が到着。最も大規模に投入されたのは十九年二月十八日の次官会議決定以後、神戸における受入れは、連行者九六六、転出者三三〇、死亡一七七となっている。

俘虜の使用について『三井倉庫五十年史』（昭和36）に次の記事がある。

この頃になると労働者の不足が漸く目立ち、これを補うために俘虜の使用が始められた。これは同年（十七年）十一月二十一日公布即日施行された陸軍省令俘虜派遣規則によるものであって、当社では神戸支店及び大阪支店の埠頭係倉庫に多く配属され、その他の支店でも臨時の使用が行われた。

これは文字通りの俘虜であつたが、当時、強制連行者は一般に俘虜として見られていたから、混同された数字かも知れない。当時神戸船舶荷役会社に俘虜の労役係を担当していた班長格のFさんは、次のように語ってくれた。

私の受持っていた中国人俘虜は、三越の山側の北長狭にバラックがあり、約六十人の人数がいた。朝六時ごろ起床、仕事は七時ごろからで、今の第七突堤の所で、小型船舶に積んで入港して来る台湾や朝鮮からの、米の荷役を主としていた。大型貨物船は、港内外に機雷が浮着して危険で航行ができなかったし、戦争末期にはほとんど沈んで、なかったのかも知れない。

大きくても四、五百トンの船舶が、二、三百トン程度の機帆船が近海航路や内航に就航している以外、大型貨物船はほとんど見ることができず、たまには戦時標準型の船も入港することもあった。当時は神戸港の東のはずれ、埋立て半ばで戦争で放り出したままになっていた赤土の土砂、それも長い間中止されていた突堤工事を示す荒れ放題の一角で荷役が行なわれていた。

軍から労役人夫として配属された俘虜は神戸船舶会社の労働部長の配下であり、約二十人に一人の割合で日本人の熟練した古参株の班長がついていた。ウインチやデッキマンは日本人の場合も、また中には俘虜がやっている班もあった。焼玉エンジンのウインチは操作の難かしい機械である。俘虜の中には機械の操作を覚えて上手に使う者もいた。

Fさんは中国人俘虜から、大人大人と頼まれ慕われていた。米の荷役の時は、荷役中とばれた米をみんな少しづつ隠して持ち帰っ

ていた。腹の中に巻いたり、足袋にかくして来た。宿舎での食事はトウモロコシと米と半々ぐらいで改善協会という給食場から支給された。日本人と同じ食べ物であったが、重労働を請うた栄養をとることのできるような物ではなく、副食は漬物と味噌か塩汁。たまに出るスケソウダラや干物、丸干の魚は大変なごちそうであった。

そんな時俘虜は持ち帰った米をみんな集めて飯詰の空缶や洗面器で飯を炊いて、かくれて食べるのが何よりの楽しみだったようである。異国の土地に俘虜として強制的につれて来られた連中にしては、割り合いに楽天的だったようである。宿舎は殺風景ではあったが清潔にしてあったし、たまには故園をしのぶ明声が聞こえることもあったが、日本人との接触は仕事場や病氣見舞い以外は厳しく取締られていた。憲兵の目が光っていたことは申すまでもない。

宿舎には寮長がいて夜の番人として監視をしていた。仕事は朝七時ごろから始まり、寮に夕方五時には帰れるように作業をやめ、深江や仁川の川西航空などに仕事に行く時の往復は電車を利用していた。中国の草色の軍服から俘虜であることが一目でわかるシナ草の下士官が、一個班に一人ぐらい追廻しとして選ばれ指示をしていた。通訳はいない時のほうが多いので、手まね足まねで、片言の日本語、シナ語で、けっこう通用していたそうである。

作業が終わった後は神戸港運会社の警備員が、カンカンと言って、俘虜が何か持帰りはせぬか、体にさわって検査をした。Fさんは警備員に「あまりきびしくすると使うのに困るから、そこそこにしてやってくれ」とたのみ、少々のは大目に見るようになっていた。米の持帰りなどもそうで、そんな時、日本人も食糧不足で困っていることをよく知っていた俘虜は、Fさんにこれは大人の分だ、と分け前を出したりし、断わるのに困ったという。

俘虜は空襲があると、今に日本は戦争に負ける、私たちは中国に帰れる、と喜んでいて、敵機が頭上に来てもなかなか防空壕には入りたがらず飛行機を見つめていた。俘虜の下士官が棒を持って防空壕にはいるよう追い廻すがなかなか聞かず、川西航空と深江で一人ずつ空襲で死んだ。

昭和二十年八月十五日、日本敗戦。俘虜は大いに喜んだ。警備員の人の一部や昨日まで手荒く俘虜をこき使った人で空をかくした人もいた。

Fさんは終戦後も以前使っていた俘虜が時々呼びに来た。そして日本人は食べ物に困ってるだろう、と自分たちで作ったマントウやたばこなど、何度か買って家に帰った。昨日までの主客が転倒した。病氣だった俘虜の一人は終戦後も山手の隈病院に入院していて、後に和歌山の白浜温泉に治療に行ったりと聞いたが、その後の生死はわからない。

敗戦後、戦勝国としてずいぶん威張った者もあったらしいが、朝鮮人よりははるかに温和だったそうである。

西松政治「戦後の港湾労働」
「歴史と神戸」44号(1970.10)

三菱・川重造船所（旧強制労働現場）

川崎重工業（株）製鉄所兵庫工場への朝鮮人強制連行
1946年厚生省調査「朝鮮人労働者に関する調査の件」より
2000.8.18 「神戸港…調査する会」 金慶海

I。入所経路別

“内地ニテ徴用”は13名、“徴用”は19名、
彼ら以外は全員“官斡旋”で189名 合計221名？

Ⅲ。職種

・製鋼工：62名
・圧延伸張工：45名
・運搬工：72名
・不明：42名

Ⅳ。入所年月日

・’43.12/2:110名（この内、13名が“内地ニテ徴用”）
・’44.8/10:92名
・’45.5/15:19名（全員が“徴用”）

V。退所年月日

・’44.2/? :2名
・’44.3/? :7名
・’44.4/? :2名
・’44.5/? :3名
・’44.6/? :1名
・’44.8/? :2名
・’44.10/? :1名
・’44.11/? :1名
・’45.2/4:2名（空爆死）
・’45.2/16?:1名（空爆死）
・’45.2/21:1名
・’45.3/3:2名
・’45.8/30:13名（内地徴用者）
・’45.10/26:108名
・不明:77名
合計:221名

Ⅵ。退所理由（以下の各項目は第一号表と対照のこと）

・逃亡:68名
・病気:7名
・公務死亡:1名・空爆死(’45.):5名
・終戦:119名
・兵隊:12名
・帰国:9名
5名の内訳 2/4に2名、2/16?に1名 その他2名の月日は不明
例:重光貞男;本籍、生年月日共に不明、’45.2/4空爆死

『川崎重工業株式会社社史』（昭和34年発行）

p.761に、

4. 徴用工員

昭和16年(1941)10月、労働緊急
対策要綱により徴用制度が事業場にも
適用されることになり。当社には
同18年までに20次にわたる多岐の
広徴士が配属された。しかし、同年
末には内地における徴用労働者が不
足を告げるに至ったので、その範囲
を朝鮮に拡張。翌19年には、造船工
場では約1,600人の半島出身の“強
制徴士”を迎えた。

6 これまで続けてきた支援活動

(1) 中国現地での聞き取り調査など

① 1993、1994、1995、1996、1998、1999年
山東省、河北省で聞き取り 旅順、台北でも聞き取り

② 1995、1997、1998年
日中国際学術研究会、南京国際学術研究会、撫順・水豊での聞き取り、調査

(2) 中国から生存者、遺族に訪日していただき西松建設との交渉、支援集会

① 1993年8月、1995年5月と8月、1997年5月の4回
生存者、遺族に延べ7名訪日していただく

② 提訴以降の訪日
○ 1998年1月と4月 提訴と意見陳述のため計3名来ていただく
○ 1999年2月、5月、9月、12月の4回、本人尋問のため計5名に
来ていただく 曲訓先さんの代わりに、長男 曲啓杰さん訪日
○ 2000年3月 証人尋問のため1名訪日

(3) 裁判の数日前のピラ配り

西松建設社員住宅とその周辺にピラ配りする 中国支店幹部宅とその周辺にも

(4) 裁判当日 ピラまき、街宣車、金融関係訪問、報告集会

① ピラまき・・朝(7:30~8:30)中国支店、市役所前 中国支店へ申し入れ書
昼(11:00~12:00)そごう百貨店前
② 街宣車・・午前中、広島市内をテープを流して、車で回る
③ 金融関係・・西松と関係が深い、富士銀行、安田信託銀行へ文書で説明
④ 報告集会・・裁判終了後、まとめの集会を弁護士会館で開く

(5) 支援集会

① 中国から訪日されたとき開く
② 証言、裁判の経過・課題など、講演会
③ カンパのお願い、参加費 500円

(6) 出版関係

① ニュースの発行（これまで1~11号を発行）
② 裁判の資料集（これまで1~5号を発行）各 300円
③ 聞き書き、報告書、訴状など6種類の図書（500~1700円）
④ イラストマップ（安野を歩く）350円
⑤ ビデオ 3種類（訪中間き取り、小学生向き、中高校生向き）各 1500円

(7) 署名活動 公正な裁判と学者証人の採用を求めて

これまで、5264、8084、河北大 1873、4502 計19,723

(8) 支援する会の事務局と世話人会（支援団体の代表で議決機関）

・日常の事務、会計、諸連絡、計画、提案、印刷、発送など

3. 「港運敦賀華工管理事務所」華人労働者就労類末書について

橋本一郎（敦賀市）

アジア・太平洋戦争後期に中国人が強制連行され、日本国内の鉱山、港湾、工場で就労使役されていたことは知ってはいましたが、私の生まれ育った敦賀にも存在していたことを、1999年7月「神戸港に強制連行された中国人労働者の証言を聞く会」の案内チラシで知りました。歴史学を学ぶひとりとして、とりあえず収容されていた施設の場所位は確認しようと友人、知人たちから聞き取りをはじめましたが確認できませんでした。

1999年秋、結成された「神戸港調査会」に参加し飛田雄一氏の教示、助言を受けて「敦賀港に於ける実態事実」を多くの市民と共に認識しなければと努めています。東京華僑総会、名誉会長陳混旺氏のご協力により、基本資料と考える敦賀の「就労類末書」のコピーをいただきましたので、とりあえずその概要を報告します。

敦賀華工管理事務所が昭和21年3月報告の「華人労働者就労類末書」は敦賀港海陸運送株式会社、縦書き社用箋で本文18ページ、死亡診断書など調査表9ページ「関係書類焼失の為メ詳細不明ナル也」と記されている。以下報告書の概要。

1. 事業場の状況

決戦輸送の強化、港の輸送関係は暁部隊揚塔司令部の指揮下、会社はすべて軍の指揮下に入る。任務遂行の為には、1000名の労務員を要するも、兵役招集や、強行使役による疲労欠勤多く労働力不足すでに半島移入労働者を雇用するも申請に充たず、任務遂行のため「日本港運業会」に華人労働者を申請する。

2. 昭和20年2月15日、神戸港にて就労中の華労100名を借り受けるため、当社員5名、敦賀警察署員6名出向。神戸にて受入れ午後1時20分敦賀着列車にて到着。敦賀華工管理事務所に入れる。

3. 就労者の氏名、年齢、出生地、職業等は関係書類、焼失により不詳なるも、大部分華人にして帰順兵なりし模様。日本語を解するもの通訳1名のみ。

4. 敦賀華工管理事務所

所長 伏木華工管理事務所長 宮崎武雄。
副所長 敦賀港海陸運送株式会社労務課長 橋本安定。
会社より所員2名、守衛4名、炊事係2名、炊事婦5名。
華労関係官憲2名毎日交替で事務所に敦賀警察署特高係員巡遣。

5. 宿舎

受入に際し敦賀警察署の指示により、旧敦賀警察署庁舎を改装。階上階下2室に分け階下に第1第2第3の3ヶ班計50名、階上に第4第5第6班計47名収容。隊員1人当り畳1畳。各室木炭火鉢備つく。床の上に簾をしきその上にゴザをしく。ふとんは各1人当り、しき1枚掛け1枚づつ。

6. 被服

到着時、隊員全員に作業服上下1着地下足袋1足作業帽1つつ貸与する。雑貨等は準家庭として一般配給あり、敦賀港海陸運送会社より月1回1個づつ石けんを配給する。

7. 食糧事情については最も意を用いたる所にして、受入れに先立ち伏木、神戸、大阪に出張、華工事務所関係者並に宿舎等見学、意見を聞き、当地警察署、県当局に依頼し万全を期すべく努力せり。

新華寮（連行された中国人の宿舎）跡

新華寮（戎井旅館）について戎井隆邦さんに聞く

神戸に強制連行された中国人 _____ さんが写っている写真の場所を特定するために戎井旅館の主人、戎井隆寿さん（故人）の長男、戎井隆邦（兵庫区在住、54才）さんをお宅に尋ねた。

小学校へ入学（昭和27年）した頃までは、自宅の旅館は戦時中のままの建物であったと思う。その後引越をしたので建物がいつ頃まで残っていたのかはわからない。旅館の間取りとか、中庭の様子については全く覚えていない。ただ、道路から玄關までは石畳が敷かれていて、その両側は庭になっていたことだけは覚えている。旅館の前の道路は現在の道幅の半分くらいであった。

戎井さんは当時を知る何人かに戎井旅館について聞いた結果、実兄の森本さん（灘区在住）は、「旅館の建物は三階建てで六角型の様な形をしていた。中庭があったことは覚えているが、写真に写っているのが戎井旅館の中庭かどうかはわからない。」と言う。

記憶のよいと言われる隆邦さんの妹、石井邦子さん（58才）は、写真を見て戎井旅館の中庭の様な気がすると言っているが、断定はできないと言っている。

旅館が存在した当時から近隣に居住する人を渡し出し聞く以外に方法はないかも知れない。

報告者 中国人調査グループ 上田 雅美

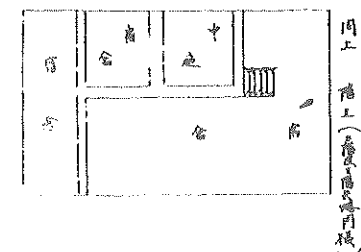
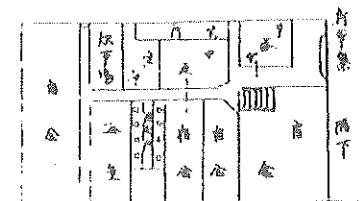
③新華寮

神戸市生田区北長狭通7丁目58、「元日人港湾労務者300名ノ宿舎ヲ改造転用セルモノニシテ諸施設完備セル申分ナキ宿舎ナリ」とある。現在のJR神戸駅より東、宇治川商店街南入口の少し東、現在のライオンズマンション付近。

第1次北支撃工300名、1945年2月15日に99名が敦賀へ、4月27日に100名が七尾へ移り、残り100名のこの寮に先の萬国寮より150名が入った。こども3月17日の空襲で3分の1が焼失し、海岸宿舎に移転した。

の往復しかなかったのでもここが宿舎か分からない」とのことだったが、資料調査によるとこの新華寮にいたと考えられる。図面は、上の通りだが吹き抜けがあったという黄さんの話は図面の中庭のことだと考えられる。また「空襲のときガード下に逃げこんだ」ことを覚えているというが、それが新華寮からすぐ南にあるガードのことが作業中の波止場から逃げこんだ別のガードのことかは分からないようだ。

むくげ通信 177号



<フュードゥー資料>

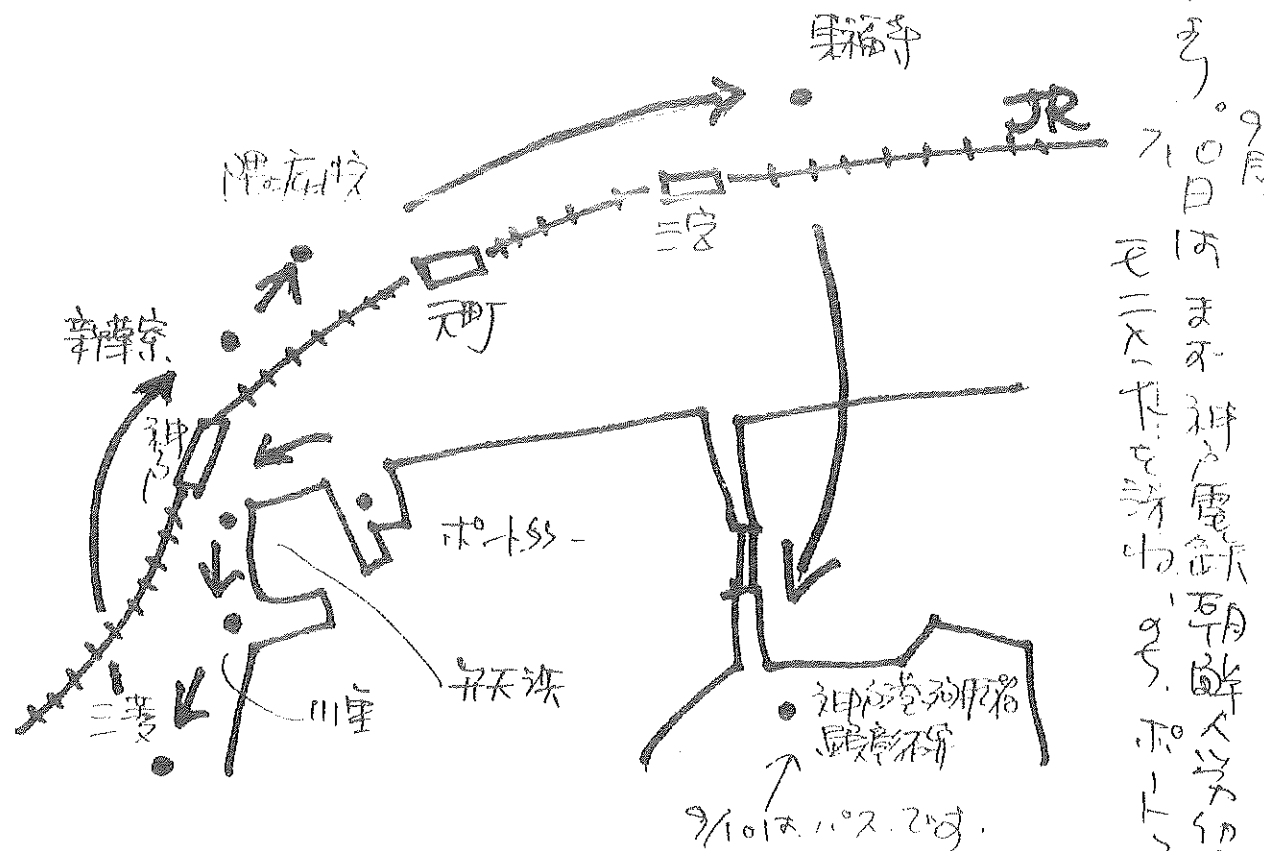
いかり ツアー

—神戸港の隠された戦争の傷跡を訪ねて—

2000年7月20日/午後1時～5時

行程【すべてバスにて移動】

- ポートタワーより神戸港一瞥
 →弁天浜(旧寄せ場跡)→三菱・川崎造船所(旧強制労働現場)
 →新華寮(連行された中国人の宿舍跡)→隈病院(連行された中国人を診療)
 →東福寺(無縁仏を収容)→ポートアイランド公園(神戸港殉職者顕彰碑)
 →JR三宮駅

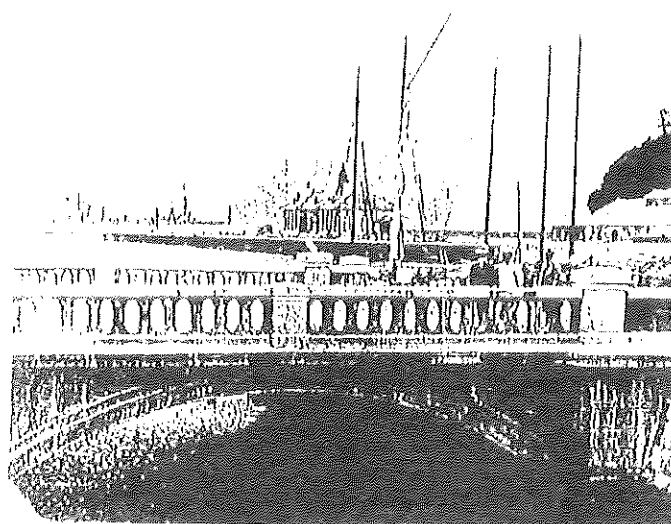


主催/神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会
 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 E-mail rokko@po.hyogo-iic.ne.jp www.hyogo-iic.ne.jp/rokko/kobeport.html

8. 衛生事情
 中谷医師を嘱託とし事務所に常備薬を備う。隊員にして皮膚病のものあり薬風呂を設けこれに入らしむると共に、中谷医師の治療を受けるなど極力伝染を防ぐ、気候差異のため風邪患者11名出るが中谷医師の治療にて全快す。作業中、降雪のため滑落、脊髄炎膜症1名足腰等打撲負傷せるも3名あり、中谷医院の治療に依り3名全快せるも1名は全快に至らず七尾に配置換えす。先天性梅毒症鼻出血過多症で死亡せるもの1名あり就寝時何等異常なきも翌朝鼻血を出し死亡。隣に寝ていた隊員も知らなかった状況。
9. 死亡診断書
 住所 河南省信陽県五里店40番
 氏名 張新 續 男 26才
 病死 出血死 鼻出血
 発病 昭和20年3月18日
 死亡年月日時 昭和20年3月18日午前9時
 死亡場所 福井県敦賀市元警察署内
 相違無候也
 昭和20年3月18日
 福井県敦賀市神楽128番地
 医師 萩原 勇
 巡查 高橋 清蔵
 團 正明
10. 労務事情
 敦賀港に於ける石炭、大豆、雑貨等の荷役貨車積卸し作業に従事。隊員100名を6班に分け各班に班長を置き班単位に作業に従事。作業場では日鮮人となるべく共同作業は避ける。作業は常雇制とし午前7時より午後5時まで就労、昼食1時間午前、午後1回休憩す。稼働率、作業能力等は関係書類焼失により不詳なるも鮮人労働者よりは良く、日本人労働者より悪し。
11. 給与待遇
 契約書に基き、隊長10円、班長7円、隊員5円。尚現金給与はその期間、短期なりしたため、七尾に配置換えとなり転往後、伏木華工管理事務所長、宮崎武雄氏に一切送金せしものにして、賃金はすべて日本港運業会に支払うことを契約しており、敦賀に存在中、華労に支払たることなし。
12. 華労の態度及事務所の態度
 期間短期なりしも相互に事故発生等も無く至極円満に終始せり。
13. 就労の成果及影響
 関係書類焼失のため不明なるも移入半島人労働者に比すればやゝ良く、戦時労力不足に際し相当寄与せる所ありたるものと思う。
14. 送還事情
 昭和20年4月12日、七尾港に配置換えとなり、当地に出向せる七尾華工管理事務所員、及敦賀警察署員引率す。この間、病死亡者1名公傷者1名ありたるのみにして、その他異常なし。

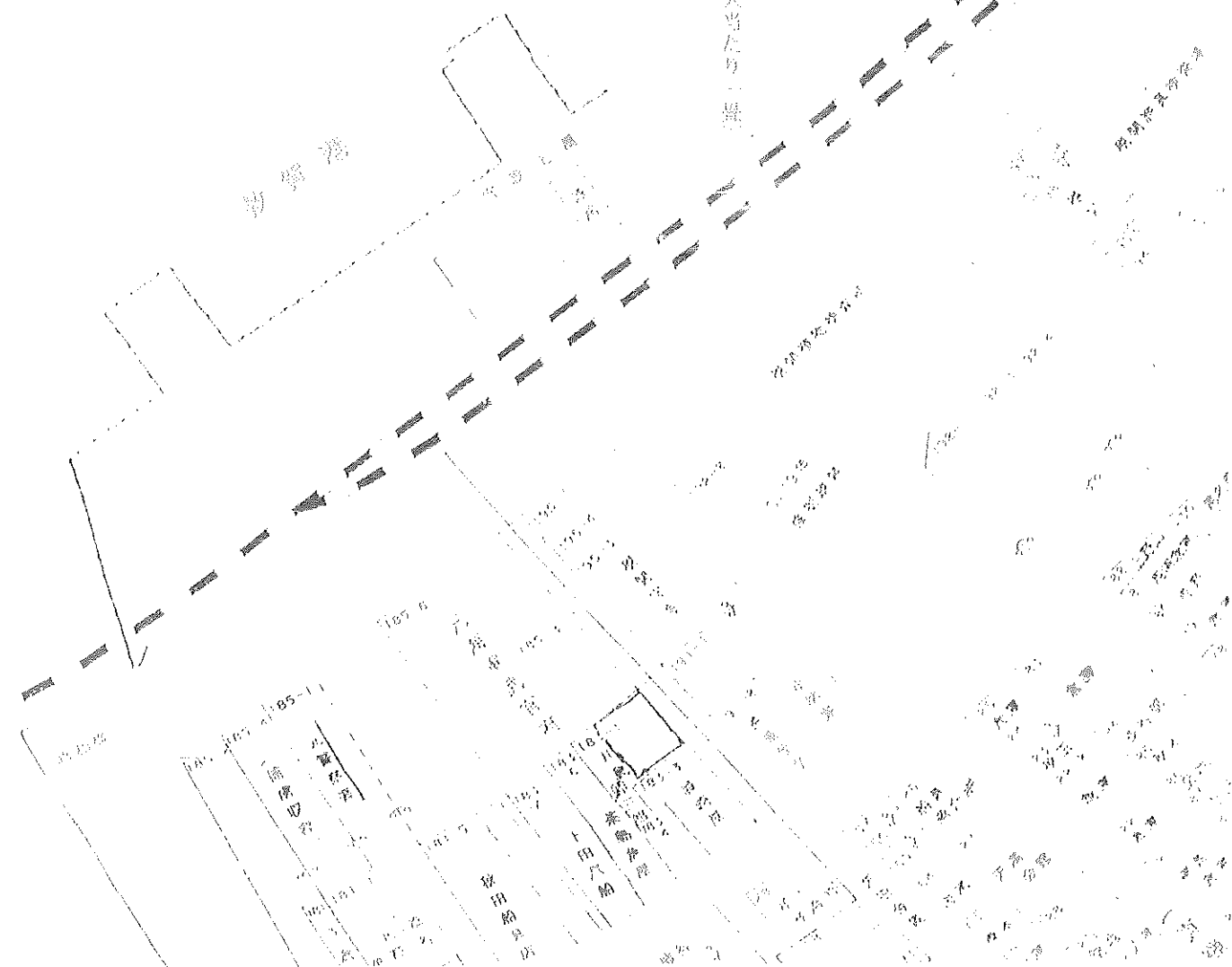
報告書の概要は以上で、敦賀華工管理事務所移行された強制連行中国人の氏名、出身地等は不明でしたが、「七尾強制連行問題を調査する会」1999年9月に発刊された「痛苦の証言、50年を越えて」附表により知ることが出来ました。

敦 賀 港



大正橋（大正2年10月竣工）

敦賀華工管理事務所
（旧敦賀警察署を改装）
計五〇名
（八畳隊長、通訳、書記三名）
外に病室（一〇畳）炊事場、食堂、浴場、
各室に木炭火鉢を備える。



⑥神戸電鉄敷設工事で起きた事故

神戸・有馬・三田・三木、この間を結ぶ神戸電鉄の全長は五三・八キロメートル。聞きとり調査によれば建設機器などはほとんど使わずに行なわれたということです。一九二〇～三〇年代に、全工程を約三年間で開通させています。山間部を縫うようにはいる鉄道敷設は、難工事であったことと想像されます。一五〇〇名ともいわれる朝鮮人労働者を使い、まさに人手をたよりに工事をすすめていったのでしよう。

○第2次労働争議 1927(昭和2)年9月2日～20日

有馬温泉
六甲山ロープウェイ
阪神急行電鉄神戸線
東〇海道線本線
阪神電気鉄道本線

事故 1928(昭和3)年5月7日
宇奥谷 2名 15mの高さから大岩
散きとなり死亡。とび散った岩の
傷。依然として賃金は払われず、
は続々と下山していった。

第1次労働争議 1927(昭和2)年7月29日～8月12日

三木線での労働争議 1936(昭和11)年12月31日

労働争議 1928(昭和3)年4月30日～5月11日
11月下旬

スライキ事件

当時の新聞に「生きる悲哀」という見出しで朝鮮人労働者の記事が載るほど、その労働は過酷をきわめました。その結果、わずかの期間に五回もの労働災害が発生しました。

■ 鉄路にひびくアリアンの唄—神戸電鉄敷設工事と朝鮮人— あり、引用。

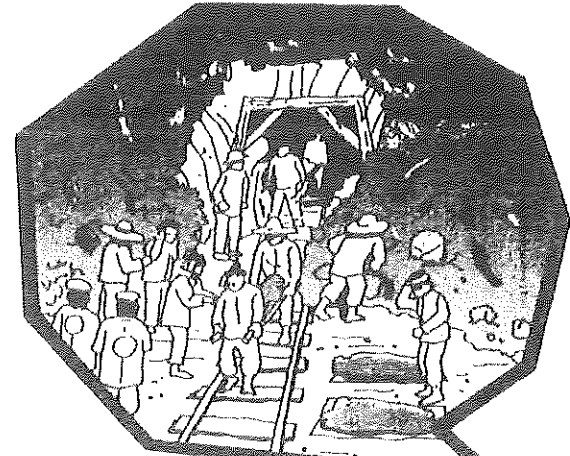
■ 編集・発行 ■ 神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者を調査し追悼する会
代表 徳富幹生
事務局 財団法人 神戸学生青年センター内
〒657 神戸市灘区山田町3-1-1
TEL 078-851-2760 FAX 821-5878

■ 編集人 ■ 高木伸夫 松谷卓人
若宮まさこ 金慶海

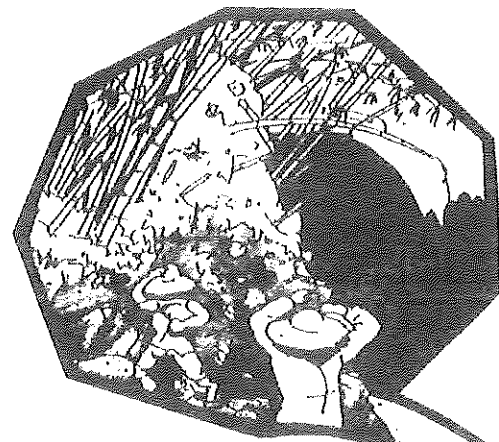
1996年11月24日 1,500部 頒価 600円

フィールドワーク①「神戸電鉄+神戸港」コース・ガイド

- 5番目の死亡事故 1936(昭和11)年11月25日
山田村藍那字平 6名 トンネル東口 土砂崩壊、巨石崩落。
11名がトンネル内に生き埋めになる。神鉄全線中、最大の
事故。事故発生が深夜0時40分と報道されている。8月に
着工した三木線は約20kmを同年中に完成させねばならなかつ
た。トンネル工事や山間部での作業を含む工程にはかなり
の無理があった。



- 1番目の死亡事故 1927(昭和2)年8月1日
山田村下谷上 2名 高さ14.4mの竹藪切り工
事中、土砂崩壊により生埋。



- 3番目の死
山田村原野
石が墜落。
破片で数名
朝鮮人労働



- 4番目に死亡事故 1928(昭和3)年10月23日
鳥原貯水池奥 1名 急勾配でのトロッコ衝突事
故。架線工事に必要な電線(260kgあまり)を運
搬中、急勾配で制動機がはずれ、前方のトロッ
コに衝突。放り出された積荷の下敷になり死亡。
他4名、重軽傷。



- 第3次労働争議 1927(昭和2)年10月20日

- 2番目の死亡事故 1928(昭和3)年1月15日
東山町4丁目 2名 東山トンネル東口で夜間作業
中、前日からの降雨と雪でゆるんだ土砂がトンネ
ル真上の老松とともに崩落。前年来の争議による
人手不足で、作業は昼夜に及んでいた。



兵庫電気軌道

4. 強制連行された中国人—静岡県事例—

強制連行された中国人—静岡県事例—

小池善之

- はじめに
- 証言(『静岡県近代史研究』掲載の一部分)

①韓忠さんの場合

韓忠さん(旧暦一九二七年六月二十三日生)は、熊谷組富士作業所に連行された。当時家族は、父母と姉、妹、弟と韓さんの六人であった。韓さんの体験を紹介しよう。

一九四四年八月十四日中秋節の日の午後、傀儡政権の中国人警察官に呼ばれました。役所に一時間ほどいて、良郷県の寺に連行され一週間監禁されました。その間、食事や水もくれませんでした。家族からの差し入れは受け取ることができました。家族は入り口で食事を渡し、警察官が届けました。そこには一〇一名閉じこめられていました。ある日の夜、四人を一組にして縛られました。逃げないように銃を持った警察官がいました。そして良郷駅から列車に乗せられ、豊台駅に着いて空き地に座られました。食事はありません。そのまま夜を過ごしました。乗り換えて塘沽へ行き、収容所に入れられました。そこは海辺で、まわりには電流が流れている鉄条網がありました。監視は日本人と中国人で、中国人は警備員と呼ばれいつも四角の棒を持っていました。長さは一握でした。

私が着いたとき、すでに多くの人が閉じこめられていました。二〇〇人くらいいました。建物は六棟あり、別の棟の人とは交流はできませんでした。そこには二、三週間いました。夜は裸で、ぼろぼろの毛布だけでした。衣服を入れる箱には鍵をかけます。ただじっと寝ているだけで、動くやうに殴られました。食事は毎日二食で、一日四個の蒸しパンで、虫が入っているとうもろこしとふすまですくったものです。おかずも水もありません。内緒で水を飲みましたが、棒で殴られました。その水は炊事場にありました、炊事場は少し離れているので、そこに入り込みました。病気の人はいましたが治療はされませんでした。死亡者が出ましたが、死体は馬車で運ばれていきました。

逃亡・蜂起事件がありました。当時私は十八歳で勇気がありませんでした。五分間の停電があったからです。私は部屋の中にいましたが、日本軍兵士は板と板との間から銃剣を刺してきました。逃げた人は撃ち殺されましたが数はわかりません。感電死した人もいました。逃げるのでした人にもいました。

日本へ行くことは収容所でも知らされず、貨物船に乗ってから噂で知りました。石炭の上に藁藁を敷いて生活しました。船の中では自由でした。船の中で死んだ人はいませんでした。船酔いの人はいませんでした。食事は塘沽にいるときと一緒で水ももらえませんでした。塘沽を出発するとき、緑の衣服(夏服)上下、白い服上下、靴一足、綿でつくった粗末な毛布が支給されました。

下関に着き、木の箱の弁当が配られました。消毒はされませんでした。服の上から粉をかけられました。列車に乗り、富士山の近くの駅に降りました。仕事は土を運んで穴を埋めて平らにするというものでした。飛行機を隠す掩体をつくり、上空から発見されないように緑で覆いました。働いているとき、日本人は近づくと暴力を振るいました。棒を持っていたこともあります。いつ暴力があるかわかりません。だから近寄りませんでした。中隊長、小隊長は待遇も良く、食事や良かつたし、量も多かつた。彼らは現場には来るけれども仕事はしませんでした。

監督するだけです。日本人の命令で殴るときもあるし、自ら進んで殴るときもありました。
大隊長は張、第二中隊長は王でした。私は第二中隊でした。第二中隊はすべて農民でした。
良郷県から行った一〇一人は農民です。第一中隊には八路軍の捕虜がいました。宿舎は中隊ごと
にあり、二段の寝台の上にとてもうすい布団と毛布で寝ましたが寒くはありませんでした。
暖房設備は監視者のところにはありました。薪を燃やすものでした。宿舎では自由に話ができ
ませんでした。中国人幹部がいたし、消灯時刻も決まっていたし、疲れてもいましたから。仕
事は夜が明けてから仕事、昼食に帰ってまた仕事、夕方までです。宿舎と現場までは近かった。
日本の警察官が寮の入り口にて、別の建物にいた警察官が鍵を持っていました。

雨の日は仕事は休みになり、その時は部屋にいます。仕事明けがをした人はたくさんいまし
た。例えば足を圧迫されてだめになるとか。第二中隊では五人くらい途中で送還されました。
人だけ知っていますが、一人はやけどで指がなくなり、一人は足がだめになりました。

厨房は宿舎にあり、料理人は私たちの中から選びました。食事の量は少なく、山へ山菜をと
りに行きましたが、それを見つけられると殴られました。お腹がすくので、ネズミ、バッタな
ど食べられるものは何でも食べました。皮膚病をなおす風呂場はありません。医者はたまに來
ました。麻雀、将棋、胡弓など娯楽はありませんでした。タバコもありません。

餓死した人もいました。体の大きい人、弱くなって死んでしまいます。病気になった人は飢
えと関係があり、二〇〇人のうち八〇人以上死にました。服がぼろぼろになり、セメントの紙
袋で服をつくりました。皮膚病はヤブ蚊が原因でした。隔離病棟がありましたが、病気になっ
たらそこへ移しました。治療はせず、誰も面倒をみないので、死んでいきました。

静岡では、死んだ人は何日間も放っておかれました。命令されて死体を焼くのは私たちで、
石油と薪で焼きました。遺骨は木の箱に入れて松本に持っていきました。

松本へは第二中隊全員が行きました。第一中隊は分けられました。松本では穴を掘りました。
その穴には機械がありました。とても重労働でした。静岡と同様によく殴られました。

松本では棒で死ぬまで殴られた人がいました。その人の名は、楊徳全です。日本の警察官に
殺されました。その人は隣の村出身でしたからよく知っています。工作中警察官に殴られたの
で文句を言いました。「私はなまけていない。一生懸命に仕事をしているのに、なぜ殴るんだ」
と言いました。それで警察に宿舎まで連行されて殴られました。手錠をかけられ、体中腫れて
傷だらけになりました。足の骨全部折られました。彼は逃げようとしたが、逃げられませ
んでした。その警察官の名は知りません。楊さんはまだ息をしているときにどこかへ連れてい
かれました。二日間くらい警察に連れていかれ、また宿舎に帰ってきました。レールに跪かさ
れ、中国人の前で殴られました。その時には生きていましたが呼吸ができないような状態でし
た。そしてまた警察に連れて行かれました。その後戻って来ませんでした。この事件はみんな
よく知っています。戦後警察に行ってその警察官を捜しましたがもういませんでした。その警
察官は三〇代でとてもがっちりした体格の男でした。

日本の敗戦は八月十五日の夜知りました。監視や警察官はその日にいなくなりましたから。
そこで私たちは翌日、スロー・ガンを赤い布に書いてデモをしました。リーダーは八路軍の捕虜
でした。

帰国については、先ず青島につきました。そこに二ヶ月以上いました。青島市内は国民党、
周りは八路軍でした。市内から外へ出られないのです。そこで持っていたお金は使い果たしま
した。日本でもらった金は一〇〇元くらいでしょうか。小麦粉二五kgが買えるくらい。一年間

勸奨第95号 昭和21年 7月24日 茨城県 内務部長

厚生省 勤労局長 殿
＝ 朝鮮人労働者に関する調査の件 ＝

6月17日勸奨第337号通牒で御照会があった標記の件別紙の通り報告致します。
尚 在日朝鮮人聯盟に關係書類を貸与し返却されない為調査困難な工場、事業場
が2、3ありますが、極力調査致して居りますから出来次第送付致します。

計	陸軍省	〇	〃	〃	〃	軍需省	省別	所管	第一号表
	羽田機械備電ケ崎工場	〇	常盤炭礦 神山鉱	関本炭礦	日本炭礦 日立鉱山	日立製作所水戸工場	名 称	工 場	
	福敷郡電ケ崎町	土浦市三〇二七一一	多賀郡関本村	多賀郡関本村	日立市宮田字芝内	那珂郡勝田町	所 在 地	事 業 場	
156	156						昭和12	年度別雇	
							13	傭 倉	
							14	庫 庫	
							15	用 用	
							16	人 員	
586					586		17	数	
867					867		18		
1453		49	73	72	1161	98	19		
364			25	23	220	86	20		
3438					2844	194	計		
2826					2834				

※

※

00 09/08 15:35 008

④「茨城新聞」(1946年5月17日付記事)

=約千名を残し大部分が帰国 県在住の 조선の人々=

本県下在住〈조선人〉のうち本国帰還希望者については県・地方事務局当局が在日本〈조선人〉聯盟茨城県本部及び各支部と連絡の上、帰国を斡旋しているが、3月18日調査による本県在住조선人 6968名中帰還希望者の5,749名の大部分が7月3日までに조선に向け出発することになる。

尚 帰国日程及び帰国市町村別者別は次の通りである。

帰 国 日	人 数	在 住 地
5月18日	1011名	水戸市(81名)、日立市(425)、土浦市(226)、多賀町(132)、 穴戸町(110)、笠間町(37)、
5月26日	1,142名	〈多賀郡〉櫛形、高萩、南中野、磯原、華川、大津、平潟、 関本 〈東茨城郡〉大貫、磯浜 〈結城郡〉結城、名崎、岡田、大花羽、豊岡、豊加美、石 下、三妻、飯沼、水海道
6月3日	818名	〈久慈郡〉太田、久慈、西小沢、幸久、郡戸、久米、金郷、 菅田、中里、賀美、黒沢、大子、袋田、上小川、佐竹 〈新治郡〉並美、牛渡、関川、田余、石岡、小幡、小桜、 志筑、七会、九重、栗原 〈行方郡〉潮来、大和、秋津、行方、玉造、延方
6月11日	771名	〈那珂郡〉平磯、前渡、佐野、村松、菅谷、国田、芳野、 木崎、大宮、小瀬 〈東茨城郡〉上大野、稲荷、大場、石崎、吉田、橋、下中 妻、濱里、石塚、伊勢畑 〈筑波郡〉北條、谷田部、小張、坂橋、久賀、三島、旭、 古沼、田水山、大穂、小野川 〈北相馬郡〉小絹、稲戸井、山王、取手、井野、川原代、 北文間
6月19日	941名	〈北茨城郡〉岩間、北川根、大原、七会、北山内、東那珂、 岩瀬 〈鹿嶋郡〉大谷、夏海、巴、飯防、銚田、新宮、上島、大 同、中野、鹿島、高松、息栖、若松、波崎 〈稲敷郡〉竜ヶ崎、朝日、芝崎、牛久、阿見、駒柴、鳩崎、 木原、舟島、根本、芝崎、大須賀、伊崎、阿波、大宮、生 板、瑞穂
6月27日	519名	〈真壁郡〉下館、竹島、養蚕、伊瀨、関本、黒子、大、紫 尾、真壁、新治、小柴、静、古河、新郷、岡郷、長田、八 俣、幸島、逆井山、香掛、岩井、境
7月3日	747名	特別事情による延期者

(5749)

②

以上働いたのですから労働の対価とは言えず、とても不満です。青島から二日間かけて歩いて帰りました。家族はとても喜びましたが、その間いろいろありました。日本人の所へ働きに行っていた兄が病死していました。そこでよく殴られたり酷使されたりしたからです。父だけが働いていましたが、生活はだめで、妹は結婚を前提としたかたちでよその家にやりました。

②李鉄山さんの場合

李さんは戦線鉄業仁科鉄山に連行された。ここは中国人強制連行の事業所のなかで最も死亡率が高いところである。李さんは、旧暦一九二三年十二月二十八日生まれ、当時の家族は母と妻との三人家族で(十五歳で結婚した)、農民だった。その証言である。

一九四四年の晩秋、住んでいた村から約一〇キロくらい離れたところで、傀儡軍か日本軍かわかりませんが、数十人に突然捕まえられました(場所は辛李庄)。そして定県の憲兵隊に連行され、木で造った檻のようなものに入れられました。食事もトイレもその中でさせられました。食事はひどく、一日二食で腹一杯になりませんでした。そこで三週間ほどいて、塘沽に連れられていきました。

塘沽では一ヶ月以上いました。そこでの食事は、一日二食、大豆を搾って作られたもので、冷たくて食べられない、スープや野菜はありませんでした。水は、大きな瓶に水を入れて代わる代わる飲ませられましたが、チャンスは一回だけでその時に飲めないともうありませんでした。だんだん気候も寒くなり、体が弱くなり下痢や病気に苦しめられました。日本に着いたとき、みんな体が弱くなっていました。

日本へは、小さな船でいきました。港がどこかは知りません。下船してから汽車に乗り、汽車を降りてバスに乗って仁科へ行きました。二〇〇人は一つの中隊で、三つの小隊に分けられました。最初の中隊長は陳俊生でした。二代目は張瑞生でした。私は第二小隊でした。仁科で多くの人が亡くなったのは、まず食事がだめだったからです。大豆のかすと臭くなったメリケン粉を混ぜて作った蒸しパン、一食に四つ。一五〇グラムくらい。三食で五〇〇グラムにもならない。質も悪いし。おかずはたまにあり、白菜や魚の干したものでした。また、中国人は日本の生活にあわないからです。労働量、働く時間が長い。私が生きて帰れたのは、当時若かったからで、仕事は他の人と違っていただけです。私は山で木を集めていました。他の人は重労働でした。彼らは山で木を切って、それから土を下の方に出して、それから石を出しました。つまり山を開きました。石の中から飛行機をつくる材料を取り出します。食事が悪く力が出ない、そして重労働でした。

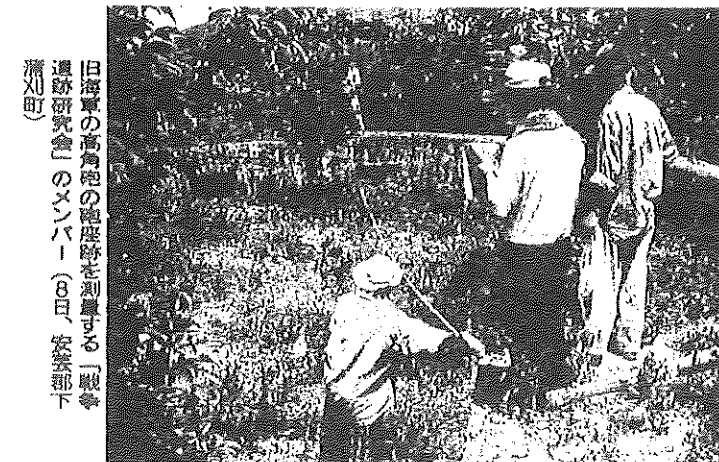
私は大きな病気にかかったことはありませんが、一度だけ病気になったが隊長がとても配慮してくれました。入り口の受付だけにしてくれました。当時病気になったら良くなる人はいませんでした。死ぬしかありませんでした。二〇〇人に一人医者がいましたが、医者は山の方には行きませんでした。病気になって病棟に送られますが、そこへ行った者は死にます。治療はされず、食事はもっと悪くなります。死ぬだけです。死んだ人の死体は穴を掘って埋めました。会社側は、「中国の習慣に従ってやれ」ということで、干渉せず、埋めても焼いてもよかった。その時には薪やガソリンがでました。次々に死んでいったのは仕方ないことだと思います。外国に連行されたのだから。住んだ所ですが、山の斜面に家を建てました。天井は松の皮でつくりました。いい天気には朝日が見えました。一小隊が一つの部屋でした。医者、会計係、隊長は字が読めました。

5. 「エノゲイラの飛んだ時……」砲台調査

(第三種郵便物認可)

2000年8月15日 中国新聞

身近な第2次大戦の記憶 次世紀へ



旧海軍の高角砲の砲座跡を測量する「戦争遺跡調査研究会」のメンバー(8日、安芸郡下清町)

「戦争遺跡」夏草に探す

旧海軍の砲台調査

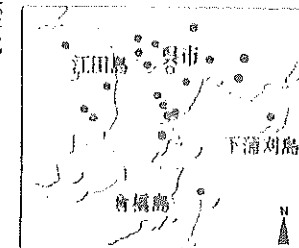
教員らで結成の研究会

県内の高校教員や教員がつくる「戦争遺跡研究会」が戦時中、空襲などに備えて築かれた旧海軍の防空砲台跡の調査を進めている。現在、測量や住民からの聞き取りに取り組み、調査結果は報告書にまとめる。十五日は「戦時の日」。身近な戦跡を、二十世紀に伝える地道な活動だ。

メンバーは、元県立高校に在籍している。社会科教師の内海隆男さん。八月には、メンバーたち(共二)東広島市西条町に五人が、安芸郡下清町の世話人に、現在六人。今年四月に研究会を立ち上げ、最初のテーマに旧海軍の砲台跡を巡った。

「呉市史」などの資料を基に、呉市一帯から山口県の大島にかけての山頂などに設置された「高角砲」の位置を調べて月一、二度は訪れ、現在の状態を確認

県内の高校教員や教員がつくる「戦争遺跡研究会」が戦時中、空襲などに備えて築かれた旧海軍の防空砲台跡の調査を進めている。現在、測量や住民からの聞き取りに取り組み、調査結果は報告書にまとめる。十五日は「戦時の日」。身近な戦跡を、二十世紀に伝える地道な活動だ。



●は呉市一帯の高角砲台(1945年2月、呉市史による)

り、弾薬を貯蔵していた穴もそのままだった。この日は、細かく測量した後、当時の様子を知る住民三人から聞き取りをした。戦時中は、砲台の建設に島民が動員されたことも確認された。

旧海軍の防空砲台は太平洋戦争開戦時には十力所、三十三門だったが、その後増設を重ね、米軍による本土空襲が本格化した四五年二月には、二十力所、八十二門、本土決戦に備え戦艦に搭載していた主砲も次々と移されていた。

研究会では既に呉市や安芸郡倉橋町、音戸町などに残る砲台跡を十力所余り訪

れ、図面に残す作業を始めている。ほとんどは保存の手が打たれず、草むらに埋もれているため、探し切れないこともある、という。

内海さんは「戦争末期には、地味住民も建設に深くかかわった砲台跡が、現在どのような状態にあるかはこれまで調査されていない。地域の戦争史を掘り起こしていくきっかけにしたい」と話している。来年は、旧海軍の砲台跡にも調査を広げていく予定だ。

21	飛行艇格納庫 (豊前橋南航空碑)	阿見町	舟島			<町史> <社史>
24	(梅)北浦航空碑	瀬奈町	大生原			<大野村史>
25	本土防衛陣地	平島一環	長瀬(長瀬川)			海岸線<市町史> <戦後復興史>
26	鬼鹿川、久慈川、小貝川 野洲川、利根川、辰川及び 支流河川、改修	河川両岸 市町村	長瀬川等			<市町史><県史> <日本土史> <飛鳥社史>等
27	鉄道施設 水原寺(大森線) 水戸線、真岡線 常磐線 常磐線、(常磐線)等		鹿島町 原谷、金沢町 小西町、高橋町 藤沢町等々			<水原寺の歴史> <大子町史> <東京日日新聞> <いはらき新聞> <茨城県気象観測史>
28	道路施設 軍用道路 山崎伏見、密島					大子、水府、金砂郷等 <町史>
31	<国田>石村	笠間市	山内、国田			<いはらき新聞>
32	日立兵隊 水戸工場	水戸市	清水橋			<社史><水戸市史>
33	日立兵隊 駒田町工場	ひたちなか市	(駒田町)	清水橋		<社史><水戸市史>
34	大日本兵器 伊賀工場	下館	伊賀	清水橋		<社史><下館市史>
35	日立製作所 水戸工場 (皇四1803工場)	ひたちなか市	(駒田町)	戸田町	194 (189)	<社史><駒田市史> <茨城県報告書>
36	京田橋 金ヶ島工場	鹿嶋市	京戸岡		155 (156) (150)	<茨城県報告書><市史>
37	日本誠山 日立誠山 海防誠山	日立市 日立市			<日本誠山> 2844 (609)	<茨城県報告書><市史> <社史><日立誠山と歴史>
38	鹿嶋誠山	七倉村			(100)	<地方経済>[11]
39	國本誠山	北茨城市	國本		95 (72)	<呉市に生きた人々>
40	常磐炭田 石岡誠山 神山誠山 中岡誠山	北茨城市	國本		(296) (68) (166)	<市史> <知事引継書> <茨城県報告書>
41	常磐炭田 柳形誠山 (東洋)	北茨城市	柳形		(127)	
42	國方南道(日通)	土浦市			49 (160)	

「<下野>」・「ソノ調査研究会」調査

(100)

00 09/06 15:28 04

民國三十三年二月二十七日院令第四〇五號 呈請核准回省

編輯人増壽者に對する柔道金銀の決定懸望について

〔要旨〕 一、南緯人物證者に對する未だ我等の辨証願頭によつて辨証された有償証者についても、償還金支拂の障礙発生の事由とする是理はすべてでない。

二、朝鮮人労働者に対する米金給の供託については、供託物最短期間第6条により取戻要求をする、とすべきである。

三、右條約において保護所が保護者に対して保護義務を負ふ又は附屬保護の地位又は保護令の東京法適用への保護令の請求を延滞しても其侵害者となるべきは、そのまゝにしておくべきでない。

〔沿革〕 明治人愛國會に對する奉天公使の委任狀(昭和二十一年八月二十六日付)第三五六一號)によつて成立された會
創立は東部鐵道の地產についてその地位を占領し擴張せしめ、其の利益を享受するの目的を掲げられてゐる。

448

[illegible]

二、義経は右佐衛門督（左衛門督をさむ）の五郎殿水ができたゆゑは、政令の施行に關するやむ（昭和三十五年大衆演習報告書第一巻）の彫刻に於ける西丹野性異國人でなく、なつた者に對し、殊にこれには、殊に北において感服できないといふ以上、

三、學區内に鉄匠名を有し、一町の各學區長に於て、此鉄匠又は附屬鉄匠の存在、その各學區長に於て鐵匠を（東京鐵匠所へ）請求方を依頼するも、鉄匠年表にこれに合致しないものを價值として。

韓國海軍

一、昭和二十一年十一月、以該縣是食糧に乏する諸戸に食糧配給券の配給に對する本館の調査

二、昭和三十一年十二月五日付農林部一九六号在買地方に附屬して設立

四年十二月六日借與奉事五二七三二番廳奉事森野

【四重】 本月十三日頃接大坂市東區の某工務部宛に、以下、左の如き郵便入。

一、製造業と流通の間の電報化の事項は、今、各新聞紙に於て述べてある。

一、供託物取扱規則第百六條に上乗取戻請求は下巻二七三頁見。

[illegible]

昭和三十二年三月十一日民事部第五三九號民部函長谷經產署

烟毒人質觀看に對する赤松金等の供託趣意によつて

〔要旨〕一、朝鮮人労働者に対する未払金等の保証金について、保証は十年を超過したときは、遅付又は既戻の
請求の許可及び時効消滅による雇入勧付の手続等をすべくはない。ただし、すでに雇入勧付の手
続をしたものは誤入せず、保証金額を超過してはならないとする。

●

二、当院委託有償診療についても、償還金其等の確立完成を事目として日本銀行へ証券取立方を請求して返済とする取組をしない。ただし、すでにこの取組をしたものは、当院関係書類を廃棄していただくものとする。

「重要」事項については、多岐にわたる事項を主として、関係の事柄の整理をすることとされた。

一、前段既取決についても、後段既取決も手紙を差出した場合には、原告方は既取決の請求を撤回すべきとせらるゝことは當然であるが、この場合においては、時効消滅による買入執行の手紙をしないこと（原告三十二番二頁）と十七日付東京府裁判所五三三本控審判、同年月報一二巻四二二三頁参照）。ただし、すでに既取決請求を乞ふべき既取決消滅による買入執行の手紙をした場合においては、一經手紙より手紙に定まらざることをとり、被告側既取決を差出ししやうとす。

二 馬賊既降有能匪徒二三百人。太平三年十一月三日有賊馬賊武陽三五等來詣臣等(條所聞係在癸丑二、三、五等賊)臣等于是匪徒也。臣等于是日。太平三年十一月三日有賊馬賊武陽三五等來詣臣等(條所聞係在癸丑二、三、五等賊)臣等于是日。

(附) 中華民國二十二年一月一日出版

Y / Y ' J 8 / 8 ' 0 K I

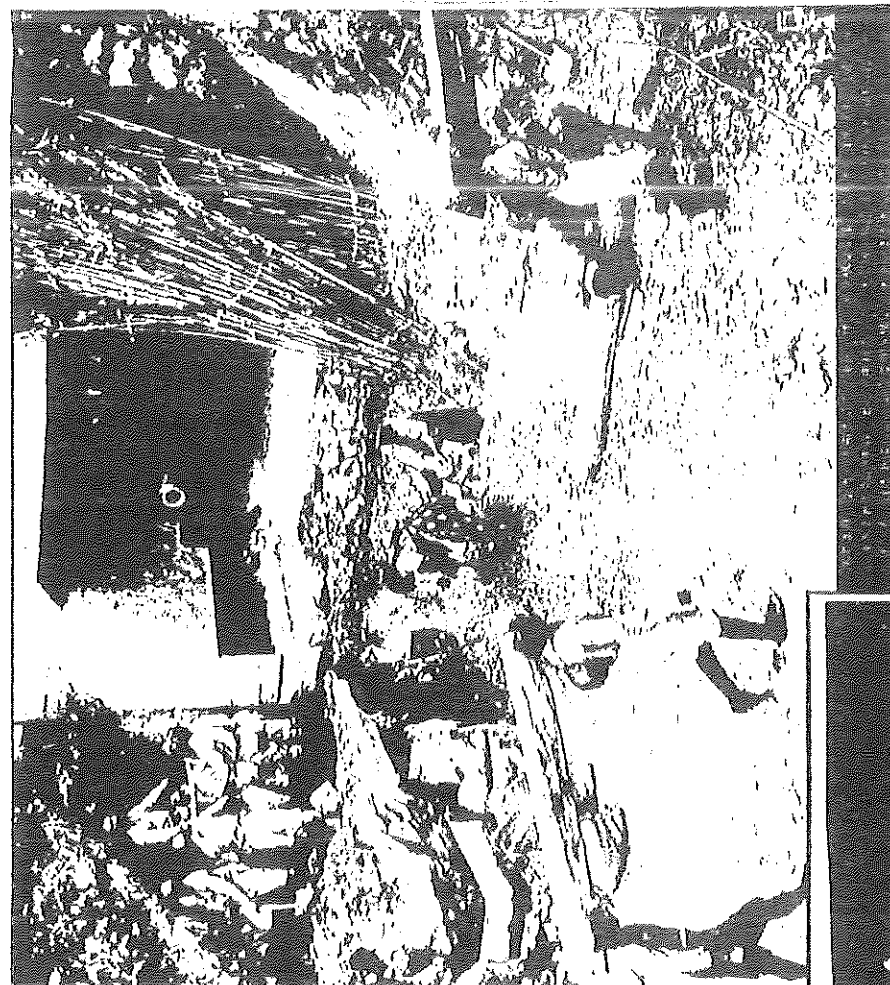
[illegible]

DATE 9-2-71 BY DDD

見發真像 台砲秘極の眞



(江島平記念資料提供)



1992年 12月 28日

別紙 2

44字 删除
44字 加入

52

供託年月日	年度	番号	供託者	被供託者	金額
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	185 185	日本通運株式会社	金安 端富	40円65銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	186 186	日本通運株式会社	国本 大熙	40円65銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	187 187	日本通運株式会社	平山 幸慶	40円65銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	188 188	日本通運株式会社	木上 在教 上 紋	139円65銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	189 189	日本通運株式会社	松田 増学	40円65銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	190 190	日本通運株式会社	富春 基宣 王	40円65銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	191 191	日本通運株式会社	末本 昌徳	40円65銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	192 192	日本通運株式会社	吉村 学淳	86円44銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	193 193	日本通運株式会社	金本 綱吉	95円74銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	194 194	日本通運株式会社	金山 命俊	89円74銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	195 195	日本通運株式会社	全州 基享	75円44銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	196 196	日本通運株式会社	松岡 敏博 松 敏	95円74銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	197 197	日本通運株式会社	金原 時義 隆	83円74銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	198 198	日本通運株式会社	東月 光彰 昭	141円28銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	199 199	日本通運株式会社	岡山 昌東	142円28銭
昭和21年6月19日 25	昭和21年度	200 200	日本通運株式会社	星川 祖保 祖	142円28銭

日本製鉄元徴用工裁判」を数える会

大正區強制連行調查活動

[illegible]

原典 2人から柳樹やん（S20年3月14日死亡）と金2503日平賀川五郎（水町191）を連ねて病院に見舞いにいったとあり、遺言の病院のため行く。友八のお義孝参事をいふことと下1番年配の、K先生を訪問。

理療心法

Kー わたしは71歳。空襲は昭和19年と20年に20年は3月と6月にあった、いつのことか。大きいのは20年。3月のは真夜中。6月は早朝だ。

卓さんー 大きい空襲：清津に病院に運んだ。自分たちは6月11日：夜中に清津にいった

Kー それなら20年3月だ。3月13日の夜だから死んだのは3月14日ですね。

昭和19年4月1日に大野記念病院の分院だった本
津川病院は中山製鋼所付属病院になった。中山製鋼の悪
者が多かったのので中山製鋼が病院を買取った。だから
20年の空襲のときですでに中山病院だった。場所が南
豊如島小学校の南となり。自分はそのとき学生だったか、
戦争で県下で習っていたに落ちた。昼は学校による勉強は
病院の手伝いに限った。だから、6月の空襲のことを知って
た。だったので参考になるとおもう。

[illegible]

会
――麻酔はあったのですか。申さん――麻酔もなく手術しましたよ。

K
一 モルヒネはたくさんありました。いまは親類が欲しいがむかしは規程がなかったたのでアヘンやモルヒネがいろいろあった。しかし、匪者がいなくてつかえない状況はあつたかもしれない。
治療のときと人の人が鑑辨のひとか、日本人がなんで分ける状況じゃなかつたか下で可也。

[illegible]

東京の七情園と着生、刊、裁版大第田

(增刊) 昭和四十四年

大
 小
 日
 一
 十

[illegible]

國一自分たち、は、2月2日くらいにかつた。額面は500

・52田
井一わたしは、57・44田です。

[illegible]

「ア、メ、カ、リ、カ、兵、備、(常) 多いは、追いつけない仕事をやさせられていた。」

「互いの創れたものを2つもってこそ日本、
取れたいのがアメリカ。小ざい本がこまに
創れていないのを覚えてる。彼が言うには

— さん割れてくる。だから日本に勝つ国は無いといっていた。それは知りませんが、アメリカ力擁護の立場所が別にありました。シンガを運ぶ仕事をしていたね。

(事) 私には一人ものだったのと同じく、食卓を下ささずしていただきました。訓練生の人は大勢だったので一緒に食事をして下さいました。だから訓練生はたくさん食べてくれていました。

会に――なぞですか。

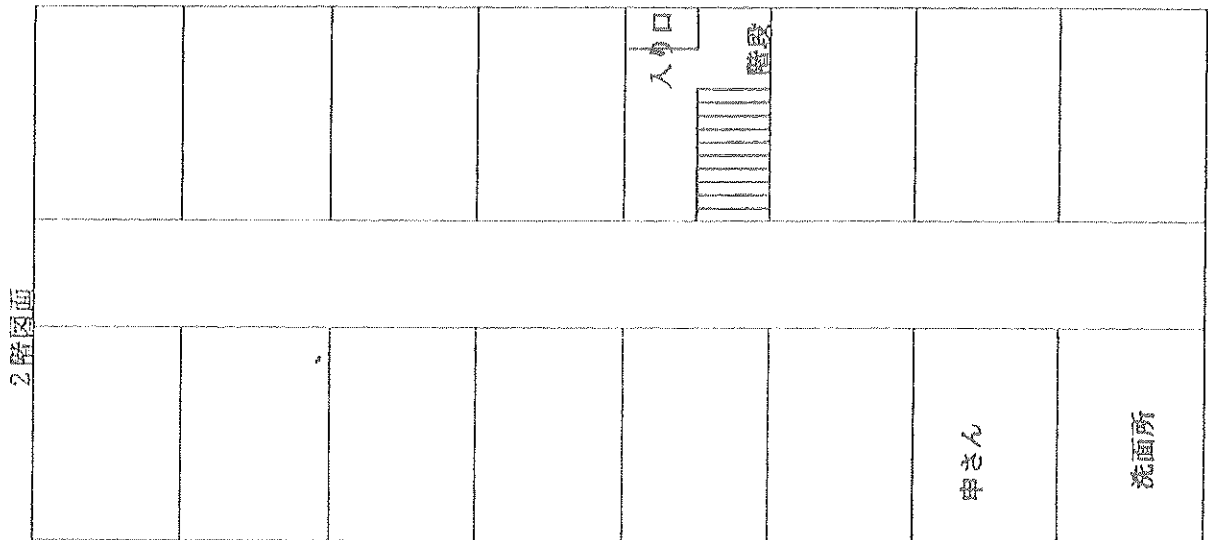
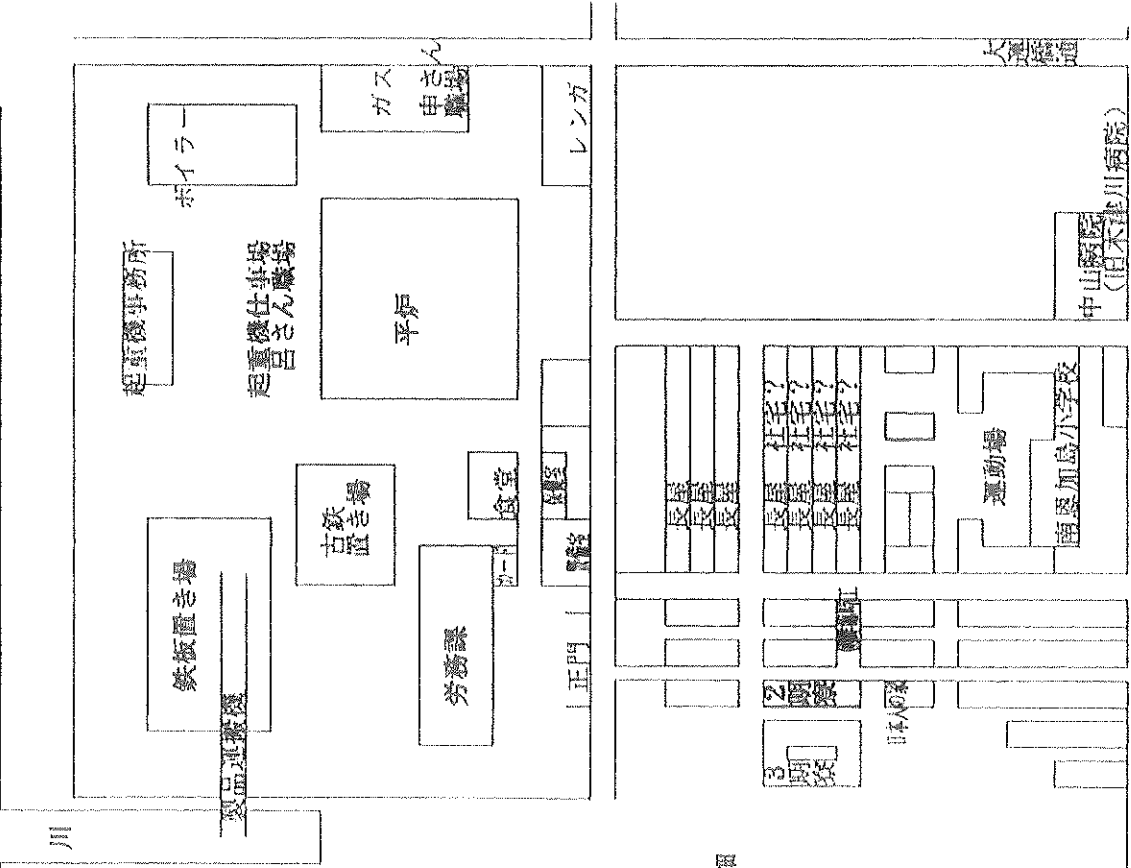
かたのだからさらに大変だ。みんななれることは大変だったけれど訓練生はそれができる。だから自分たちには外へ買い出しにいって食べをしのぎました。飯で、大豆をとった米が無いうえなものしかありません。

あなただけで国難がつかぬやうなつくつでぬくに盡さ—
あなたたつたのもないたみハメーンに米叔姑公余血—

品目一それは、自分たちは無かった。

でた。空襲で木屑の焼けたからけが入っていて、窓にもつてかえって水につけて木を溶かして取り除いてからたべたりもした。

田舎に親戚のある日本人は、1升ビニに米をいれて、棒でついで白米にしつけて飯ごうで炊いていた。こぞりやつていたけれど、おもしろいのでがまんできなかつた。日本みんないじやなかつた。20歳でよく食べる男でとにかく腹が痛た。



- 洗面所は1階か2階かは聞けていない
- 部屋数ははっきり覚えていない
- 9人が寄宿
- 川の見える部屋があった
- 申さんは2階の洗面所の横の部屋
- 呂さんには聞いていない
- 西側の日本人の家にはよく行った
- 南の韓国人の家は宛からうるさかった。

'00 08/08 15:19

004

(足尾銅山)内 関係者 名簿 (2000.08現在)

氏名	住所	年齢	性別	職業	備考
1 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
2 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
3 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
4 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
5 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
6 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
7 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
8 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
9 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
10 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
11 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
12 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
13 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
14 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
15 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
16 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
17 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
18 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
19 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
20 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
21 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20
22 金 北見 金成	足尾銅山 12.12.20	41	男	金成	足尾銅山 12.12.20

No. 2

44	軍需省	古河電工小山工場				20	200	(名簿)、地元住民、生計者(竹中工務店)	
45		(中島)大田原飛行場建設関連工事(完)	大田原市					地元住民	(前掲の古河電工)
46		金丸原飛行場(橋本金丸工場)	(完)	"				"	
47		金丸土工事(地下鉄御影品工場)	(完)	"				"	(通称)
		〈第6特別施設〉(通称6特)	"					"	国営提供
48		金丸原飛行場所員飛行機整備兵	"				2	同僚	
49		黒崎(埼玉)飛行場建設工事	(完)	黒崎			60	市史、地元住民	(通称)
50		終田飛行場飛行機整備兵	"				20	元担当教官	
51		"	郡須分庫(施設)	郡須町			100	地元住民、写真館	
52		ナヒ工事(郡須秘密地下工事施設)(完)	"					"	
53		軍需補充部隊(白河高津分庫)	"				100	地元同僚(西郷村城土資料館)	
54		第81師団特別勤務隊	河内町				200	炭下間までの搬送引率者	
55		宇都宮連隊(砲兵隊)	宇都宮市					下野新聞(S. 19. 6. 18)	
56		"	所員(訓練隊)	(郡須地域)				地元住民	
57		△ " 生徒兵	宇都宮市					下野新聞(S. 19. 4. 10)	
58		天上沢山	塩谷町				50	地元住民	
59		西澤金山採掘所	栗山				50	"	(通称)
60		日向山	"				50	"	元勤務者
61		津川開墾所建設関連工事	(完)	塩原			100	〈新本水力発電史〉、元勤務者(明治工業)	3
62	(通・特)	足尾谷道(わたらせ渓谷鐵道)建設工事(完)	(通・特・神戸)				100-100	(明治45、資料庁調査)〈広島組〉	
63		西川田駅一貫針駅(貴船線)建設工事(完)	宇都宮市						
64		(明治末〜昭和20)各地発電所工事	東北地域					〈新本水力発電史〉	
A	△	各地域での飛行機急造工事							
		・ 湯澤上 飛行場 建設 (完)	湯澤上村					〈市町村史〉	
		・ 矢板 " " (完)	矢板市					"	
		・ 小山 " " (完)	小山市					"	
		・ 南河内 " " (完)	南河内町					"	
B	△	その他の兵器製造分庫工場						〈軍事引継書〉	
		・ 各地航空機製作所	宇都宮市					"	
①		・ 日本製鋼所宇都宮工場 兵機地下工場	"					社史	
		・ 小平重工業製	小山市					"	
		・ 日本造船所藤沢工場	藤沢市					"	
		・ 関西航空工場	"					"	
		・ 日立製作所新潟工場	大塚町					"	
C	△	その他							
		〈拓城車庫〉格納庫建設関係工事	栃木市					地元住民	
D	△	関東大震災時(1923年)の被災(東北被災、8名)、強制収容(大田原、400名)、(各警察署、約100名)※大田原死亡者(不明)							(8)
E	①	大丸組(通称、下流(通)、②大丸組(通称、下流(通)、③早川組(通称、下流(通))=朝鮮人名 △専念寺(足尾)、延経寺(塩谷)							752
		(備考) 1) 〈調査報告〉 --- 1946年 6月、日本政府が知事を通じて関係企業に命じた朝鮮人労働者に対する							① 123
		(名簿) 未払金、退職金、遺族年金、労働保険等の立替金の貸、求職に関する調査への報告							
		1946年7月24日付(昭第615号)『朝鮮人労働者に関する調査報告書』							
		栃木県 内務課長→厚生省労働局長							
		1950年8年、日本政府(朝鮮人労働者に関する調査報告書)→ 韓国政府							
		(※ 87000余名分の労働者名簿を含む)※栃木県内17事業所(5413名分)							
		2) 〈報告書〉 --- 1945年11月 8日付の報告書 第244号(徴用解除の件)							
		3) 〈特選〉 --- 1945年 8月16日 特選高等機務文書 第3645号							
		4) 〈知事引継〉 --- 1949年 2月 2日 公明集例法に基づき栃木県が初めて公開した「知事事務引継書」							
		※官(官時族)、徴(徴兵、徴)、募(自由一般募集)							

△「朝鮮人強制連行栃木県真相調査団」+「(下野)朝鮮問題研究会」調査結果報告

9月19日1時半地裁202号第12回日鉄大阪裁判

未払金
供託金名簿の発見者

古庄正先生が

国と企業の犯罪を暴きます。

『未払金供託は国と企業の戦後補償要求つぶしだった。』

9月19日第12回裁判では、日鉄の供託報告書の発見者である、古庄正先生(元駒沢大学教授)が、学者証言に立ちます。

古庄先生は、(第1に)呂さん、申さんの強制連行における強制性を、明らかにします。募集、連行、労働、戦後処理など、一連の過程全体が、朝鮮人戦時動員と呼ばれる強制性をもち、「労働力を、確保」と言うものではなく、「ただ働きの労働者を確保」するシステムであったことを明らかにします。原告の徴用は、募集と言う形態を取りましたが、これは、1人1人を把握できないピョンヤンなどの都市部において、良質な労働力を確保するための手段であり、「2年経てば、技術を得て、朝鮮の日鉄工場で勤めら

れる」などの甘言もそのために用いられたうそでした。賃金を受け取る自由、退職する自由、帰国する自由などが奪われていることが、すべての形態の徴用に当てはまる強制性です。

(第2に)原告2人の賃金の供託は、国と企業が結託し、当時の在日朝鮮人連盟の未払い金などの補償要求に対抗するための不当な策謀のなかで行われたことを明らかにします。古庄先生は、3929人分の未払い金供託書を含む、日鉄の内部資料「朝鮮人労務者関係」を分析・研究し、1985年に未払い金問題を論文に発表しました。1991年朝日新聞、東亜日報が「朝鮮人労務者関係」および供託報告書を大きく取り上げ、未払い金問題は、各地の裁判で争われるようになりました。当時日鉄本社は、未払い金の処理(ウラハ焼く)

9月19日第12回公判スケジュール

8:00~9:00	新日鉄大阪支店前朝宣伝行動(地下鉄肥後橋下車すぐ朝日新聞ビル前)
10:00~	大阪支店交渉
12:00~12:40	新日鉄大阪支店前昼休み集会 (地下鉄肥後橋下車すぐ朝日新聞ビル前)
13:00~	大阪地裁1階控元室集合
13:30~16:00	大阪地裁202号大法庭 古庄証言 (地下鉄御堂筋線淀屋橋下車7分)
16:15~17:30	弁護士会館報告会
17:30~	交流会

日本製鉄元徴用工裁判を支援する会

TEL06-6939-7540, FAX06-6939-7405

をめぐり、岩手県の調停をうけて朝鮮人連盟に妥協をしようとした日鉄釜石製鉄所にたいして「全国に波及する恐れがある」として、妥協案を白紙撤回させました。この過程に、他の企業や国も深く関わりました。そして最終的に未払い金を朝鮮人連盟に渡さないために、国は、各企業に賃金の供託を実行させました。古庄先生がその重

要性を世に訴えた、「朝鮮人労務者関係」にはその経過を示す資料がはつきりと残っています。

古庄先生の証言は、原告2人の怒りの背景に、国と企業の朝鮮人戦時動員の政策、戦後処理の不当な策謀があったことを明らかにする重要な学者証言となるでしょう。

10月ポハン製鉄要請行動、12月5日全国総行動

新日鉄と韓国ポハン製鉄提携に異議あり!

戦後処理を
放置したままの

新日鉄は韓国の浦項(ポハン)製鉄との提携を発表しました。大口需要家に対する価格交渉力の維持とアジアでの主導権の確保が目的であると報じられています。われわれは、戦後処理を放置したまま、新日鉄が韓国の企業と提携を深めていくことに無関心ではられません。原告・太平洋戦争犠牲者遺族会ソウル支部とも相談した結果、韓国の浦項製鉄に対して、「戦後処理を無視する新日鉄の姿勢を放置したままの提携は遺憾である」との申し入れを行うことを決めました。前回の裁判を前後し日本では1000枚を超える新日鉄社長への要請ハガキが取り組まれましたが、社長は、これを無視しています。われわれは、新日鉄がこのような態度を続ける限り、さらに闘いを広げていきます。今回の行動は、韓国国内に大きな共感を呼び起こすでしょう。9月7日から9日、関西事務局では第1次要請団を派

遣し、韓国国内の諸団体に共闘を呼びかけます。10月には浦項製鉄への大規模な要請行動を実施します。また12月5日の裁判の時には新日鉄各工場、支店に対する全国的な総行動を計画中です。社長に決断をせまる、大行動をこの秋作り上げていきましょう。

新日鉄と浦項

提携が決定し記者会見を前に握手する新日鉄の千達社長(左)と浦項総合製鉄の劉常夫会長(2日午後、東京・大手町の新日鉄本社)



左、千達社長に1000枚の要請ハガキを送りました。

〈強制動員(官警兵・徴用(兵)・募集)〉により朝鮮人が

(1910~1945年)

従軍させられていた新日本軍下 事業所・作業場・部隊 (1900.9)

No. 1

所管	雇用企業・作業所	所在地	入所経路	資料	証言	記録資料	死亡者
1 軍需省	古河製鋼所(足尾銅山)	足尾町	官	徴	2415	〔調査報告〕(名簿)〔報告書〕(協)	72(42)
2 〃	古河電工(日光精錬所)	日光市					
3 内務省	日光土木建設部	〃			65	30	〔調査報告〕(名簿)地元住民、生存者
4 〃	日光、足尾銅山道路工事 (完)	日光・足尾					〔近代民衆の歴史〕
5 (陸軍)	日・露・韓三國境沿線工事(足尾) (完)	(原村)				700	地元住民(足尾銅山) 捕縛
6 内務省	帝國鐵道(日光)第2工場	日光市			紅 50		社史、地元住民
7 〃	所野第1・2発電所建設工事 (完)	〃					〔新日本水力発電史〕
8 〃	東武、下町鉄道敷設工事 (完)	日光・今市				715000	〔近代民衆の歴史〕、町史
9 〃	(今市) 飛行場建設工事(塩野) (未完)	今市市					地元住民、町史
10 〃	下海発電所(塩野川水力電気) (完)	塩野町・栗山			栗山	30	〔新日本水力発電史〕、〔近代民衆の歴史〕、町史
11 〃	栗山発電所建設工事 (完)	栗山村					地元住民、〃
12 軍需省	日本製鋼所(戸ヶ沢鉱山)	戸ヶ沢町	官	徴	300		〔調査報告〕(名簿)〔報告書〕(町史) 〃
13 内務省	本戸ヶ沢鉱山(内)日産土木部	〃			104		{ 〃 } { 〃 }
14 軍需省	日本製鋼所(日光鉱山)	塩谷町	官	徴	510	紅 101	{ 〃 } { 〃 } (報告書)町史、当時勤務者
15 〃	帝國鐵道(日光)之沢鐵道所	〃	官	徴	134	紅 101	{ 〃 } { 〃 } 町史、〃
16 内務省	之沢鐵道所(内)鐵道建設所	〃			80		{ 〃 } { 〃 }
17 〃	大宮(大成)鉱山(文庫)	今市市					地元住民
18 〃	加藤鉱山・東加藤鉱山	鹿沼市				紅 28	〔新日本水力発電史〕、〔近代民衆の歴史〕
19 内務省	帝國鐵道(鹿沼)工場	〃			71		〔調査報告〕(名簿)
20 〃	鹿沼鐵道	〃			1020		{ 〃 } (名簿一部)
21 〃	鐵道建設(鹿沼)2155工場建設工事	〃			221		〔調査報告〕(名簿)
22 〃	中島(鹿沼)工場 工事(完)	岩舟町				30	地元住民 (コンクリート基礎)
23 〃	〃 〃 富士山 〃 (〃)	〃				50	〃
24 〃	〃 〃 南赤嶺山 〃 (〃)	〃				30	〃 (山田組)
25 〃	〃 鹿沼飛行場建設 〃 (完)	鹿沼町				30	〃 (大橋組) 下町民衆(元職員)
26 〃	〃 (鹿沼)第4工場 〃 (完)	鹿沼市				100	当時勤務者 員(新日本製鋼)
27 〃	東京陸軍第1師団第1師団司令部(〃)	鹿沼市				400	〔調査報告〕(名簿) (地下鉄道) 地元住民
28 〃	海軍地下防空基地 建設 〃 (〃)	鹿沼市				100	〔旧陸軍施設調査報告〕 〃
29 〃	國府飛行場 〃	壬生町				50	町史、当時勤務者 〃
30 〃	小倉川河川敷砂利採取場	〃				100	〃
31 軍需省	関東ロームイト製煉所(鹿沼)	栃木・鹿沼	徴		73		〔調査報告〕(名簿)
32 〃	製煉所(鹿沼)製煉所	鹿沼	官		213		{ 〃 } (名簿) 報告書
33 〃	吉澤石灰工業所	〃	徴		22		{ 〃 } (名簿) 〃
34 軍需省	日通(宇都宮)支店	宇都宮市	官		48		{ 〃 } { 〃 } 住所不明(調査)
35 〃	中島(鹿沼)第1工場 建設工事	〃					員(富士重工)
36 〃	宇都宮陸軍航空工場 〃	〃					
37 〃	(ウ工場) 武蔵大谷地下工場建設 〃	〃					当時勤務者、米軍調査報告(地下鉄道)
38 〃	(〃) 大谷製作所(地下工場) 〃	〃					〃 (新日本製鋼・明治工業等)
39 〃	陸軍第1師団(鹿沼)工務部(完)	〃					〔調査報告〕(名簿) 生存者、地元住民
40 〃	海軍飛行場(鹿沼)建設所 (完)	〃			152		〔調査報告〕(名簿) 社史(戸田組)
41 〃	東京電力機械製造(地下工場)建設 (完)	鹿沼市			365		町史、地元住民 (地下鉄道) 〃
42 〃	陸軍航空機修理工場	〃					〃 (鹿沼組) { 〃 }
43 〃	東京 (鹿沼)第524地下工場 建設(完)	鹿沼市					社史 〃 元勤務者 (〃)

2000年(平成12年)5月14日(日曜日)

ずい道出入り口は8カ所

宇都宮の長岡地下軍需工場跡地

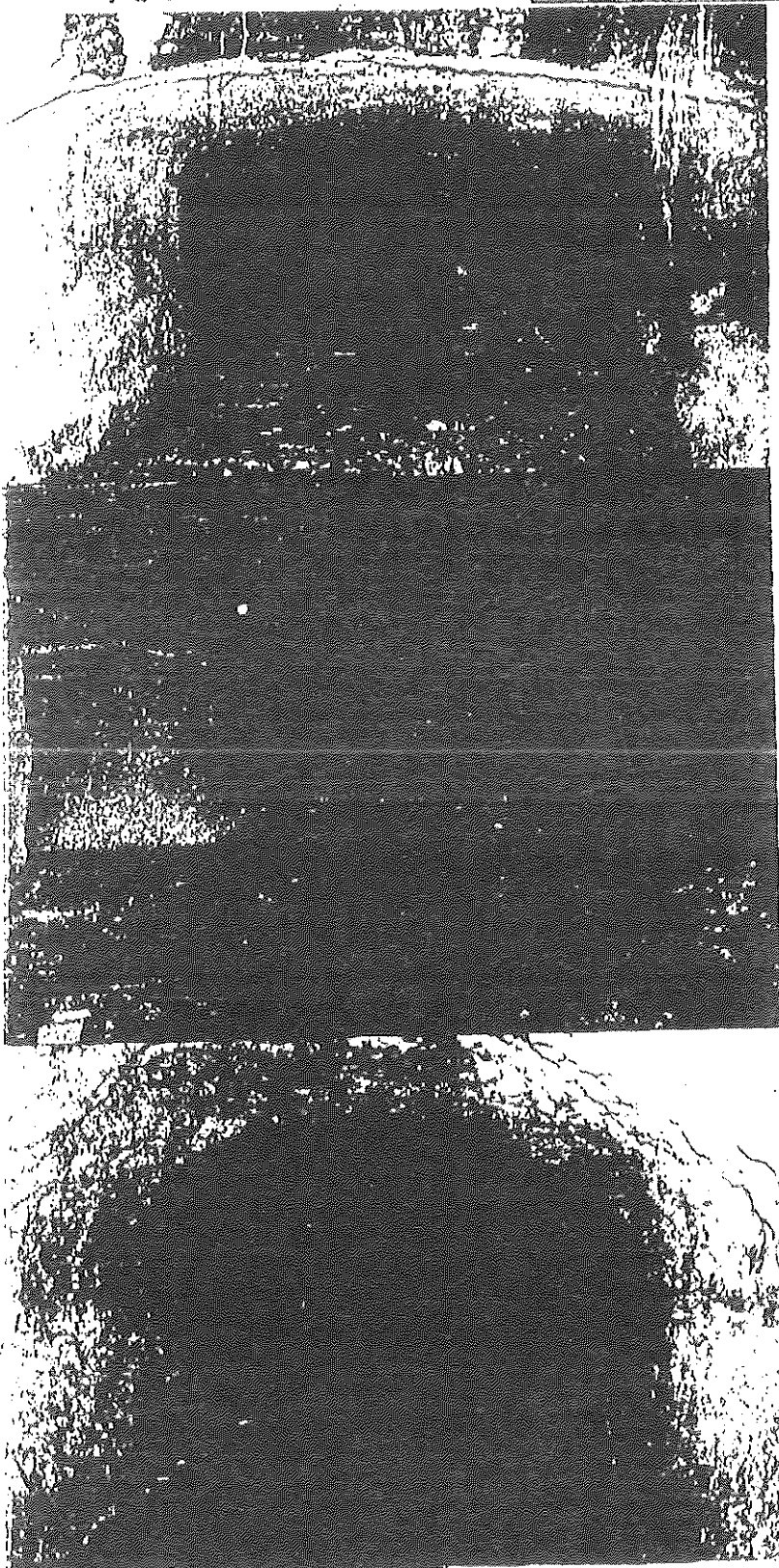
規模「大谷」に匹敵か 在日朝鮮人の研究会調査

【宇都宮】戦時中、朝鮮人労働者を動員して地下軍需工場建設が進められたとされる長岡町(旧・長岡村)の強制連行跡地について、在日朝鮮人の研究グループがこのほど現地調査を行った。この跡地は市史にほとんど記述がなく、規模や敷設経路など不明な点が多い。今回、研究グループは探検隊跡地からずい道が深く掘られていたのを確認したほか、地元住民の証言などから二、三百人の朝鮮人が飯沼から運搬していたとみており、「大谷地下工場」にも匹敵する規模だったのではと推測している。

市史によると、一九四三年四月に設立した「軍需工場」が、この探検隊跡地を利用して地下工場建設を進めたといわれている。市史には、これに詳しい資料がなく、ほかには、このため市では戦災被害対策の一環として、同跡地に埋める計画を練っていた。研究グループは、この探検隊跡地を調査したのが小山市在住の在日二世、孫大進さん(67)が代表を務める。

研究グループは、この探検隊跡地を調査したのが小山市在住の在日二世、孫大進さん(67)が代表を務める。研究グループは、この探検隊跡地を調査したのが小山市在住の在日二世、孫大進さん(67)が代表を務める。

地下軍需工場建設が進められたとされる探検隊跡地のずい道出入り口。市史にほとんど記述がなく、規模や敷設経路など不明な点が多い。今回、研究グループは探検隊跡地からずい道が深く掘られていたのを確認したほか、地元住民の証言などから二、三百人の朝鮮人が飯沼から運搬していたとみており、「大谷地下工場」にも匹敵する規模だったのではと推測している。



1. 慶尚北道。土谷クローム強制連行体験者をたずねて

慶尚北道、土谷クローム強制連行体験者をたずねて

一日本人・在日朝鮮人・韓国人学生らによる共同聞き取り調査

殿平 真(北海道・空知民衆史講座)

- 調査地域：韓国・慶尚北道達城郡、高靈郡、星州郡、大邱市
- 事前調査日時：2000年7月～
- 共同調査日時：2000年8月17、18、21～23日

■今回使用の調査名簿について

今回の調査に用いた名簿は、昭和23(1948)年に作成された、北海道雨竜郡幌加内村(現・幌加内町)の「除居留簿半島人」という名称の名簿を出身地別に整理(空知民衆史講座・田中泰介作成)した、独自の名簿である。

この名簿は、それまで幌加内村に居住していた朝鮮人を外国人登録令の施行に伴って日本国籍から排除した結果として作成されたものである。したがって、この名簿に記載される人々は戦中～敗戦直後まで幌加内村に居住していたものと考えられる。居住に至った要因が強制連行であるかは、この名簿に基づく調査によって確認されなければならない。名簿によると土谷鉱業所(新成生地区)が労働者総数812名中436名、帝国砂白金(添牛内地区)88名、朱鞠内地区は68名等となっている。

韓国の出身地別を見ると、総計(家族を含め)1,022名のうち、慶尚北道が548名と過半を占めている。そのうち、以下の地域で合計322名となる。

慶尚北道達城郡 89名 一主に土谷鉱業所高靈郡 74名 一主に土谷鉱業所
星州郡 38名 一主に土谷鉱業所 大邱府 49名 一主に土谷鉱業所
清道郡 72名 一主に土谷鉱業所、帝国砂白金

これらの人のほとんどは単身渡航であり、しかも同じ面からのまとまった人数であることから、いわゆる強制連行である可能性が極めて強いと思われる。

■今回の調査の方針について

- 調査地域を限定し、上記の慶尚北道大邱地域周辺を調査対象とする。事前調査として、面事務所において戸籍、住民票の閲覧を行い、又、電話帳などを用いて、体験者・遺族の居場所の特定をすすめる。聞き取り調査に先だって電話等で連絡をとっておく。
- 日本・在日・韓国3者の共同活動であることを十分に認識し、事前学習を十分に行う。又、日韓共通の調査表を用意し、フィールドノートを各自がとる。ビデオカメラや、テープレコーダー、カメラ等を用いて記録を残す。

3. 強制連行調査班の構成

日本人	大学生 2	社会人 2	研究者 1	同行記者 1
韓国人	大学生 9	社会人 1		
在日朝鮮人		社会人 1	研究者 1	

4. 強制連行犠牲者・体験者調査票の項目

- 対象者の名前、年齢、現住所、本籍地、家族構成、他
- なぜ日本に働きに行く事になったか 当時の韓国での生活の様子を含めて
- 日本へ到着するまでの経路 渡航年月、引率者、交通手段、集団の人数等
- 日本での移動状況 移動年月と方法、労働場所、労働内容、人数等
- 日本での最終労働場所と状況 所属の組、労働人員、待遇、労働内容など
- 帰国の状況 帰国時期、日本企業の対応、帰国手段(犠牲者の場合 遺骨の受け取り状況)
- 戦後から現在までの遺族または日本人・家族の生活状況
- まとめと感想

■調査を終えて

今回2000年夏の調査は、前回98年同様、日本で調査・整理した名簿を元に、現地韓国で個人を追跡、特定させる方法での聞き取り調査を行った。

今回も調査の前段階として、ひと月前から慶北・嶺南大学校文化人類学科の大学院生らによる事前戸籍調査が行われたが、これが想像以上に困難を極めた。実際に名簿と一致する人物を特定出来、聞き取り調査まで漕ぎ着けたのは、対象となる300余人中6人(遺族含む)であった。この他にも名簿と戸籍が一致した対象者はいたが、住居を移転していたり(戸籍には記載されない)、残念なことだがすでに故人となっていた。

而事務所を直接訪ねての調査では、戸籍の閲覧・複製は依然として許可されるものの、いわゆる住民票(住民登録証)の閲覧については、近年プライバシー保護の関係から難しくなり、現在ではほぼ不可能となっている。その為、戸籍を残したまま住居を移転した対象者を探し出すのは、物理的に不可能となりつつある。又、そもそも而事務所を訪ね、戸籍台帳をひとつひとつあたっていく作業は大変に根気を伴う作業であるし、対象者の人数が少ない面はどうしても後回しにされがちである。さらに最近では、住民票のみならず戸籍もコンピュータへの入力が進み、植民地時代～戦後すぐの記載項目などは更新の際に省略されてしまっている場合が多い。

今回、こうした問題点が浮き彫りにされ、調査方法の再検討の必要性を強く感じている。

調査を終えてから、韓国内で強制連行調査を続けておられる鄭恵瓊教授(国家記録研究院)らと交流する機会があった。鄭教授らも独自に聞き取り調査を続けているが、彼女たちの場合、個人を特定しての調査は行わず、逆に面や洞などの地域コミュニティ施設や、養護老人施設などで無差別に呼びかけを行い、対象となる年齢層の人々を集めて、一気に聞き取りをすすめるという方法を探っているという。

例えばこの方法では、言葉は悪いが一つの地域をしらみつぶしに調査し、その地域に住む強制連行体験者・犠牲者遺族の徹底的な洗い出しが可能であるだろう。加えて、「誰が連行され、誰が連行されなかったのか」といった、名簿からは見えてこない当時の朝鮮農村の状況も聞き出すことができるかもしれない。なによりも強制連行体験者の高齢化がすすみ、“ここ数年”でどれだけ聞き取りを進められるか、といった差し迫った状況では、大変有効な方法であるといえる。

しかし、当然のことながら同一の面で聞き取りをするとはいえ、その労働場所は複数多岐に渡るであろうことは想像に難くない。そこで必要なのが、日本の各地の強制連行状況に精通した調査者の存在である。今回私たちが用いた名簿などとの照合をすすめ、地域毎に整理をすすめる作業も併せ持たなければならない。

こうしたことから、鄭教授らと私たちは、両方の方法を兼ね備えた日韓合同の調査の必要性和、今後の協力を確認しあった。

「2000年夏の日韓共同ワークショップ」フィールドワークの一環として計画された今回の調査旅行であったが、青年・学生たちの共同の営みを無事に終えられたことで、97年から続く「日韓共同ワークショップ」と、98年の聞き取り調査から築き上げてきた日・韓・在日の学生、研究者の連帯とネットワークを再度確認することができた。このことは、今後の私たちの調査継続にとって自信を与えるものとなった。

私たちのワークショップは、「出会い」をキーワードに「過去を心に刻み、未来を共に築く」べく、人と人が出会い、共同の体験を重ね、共に語り合うことを通し、過去の歴史を主体的に認識し、共に課題を確認し、政治や国家といった枠組みをこえた共同の創造の場を提案してきた。強制連行体験者との人間的出会いから、その“生”を感じ、共同で民衆の歴史を掘り起こす営みが、必ずや東アジアの平和的共存に寄与するものと確信している。

多くの方が、このワークショップに共鳴され、共に参加されることを願ってやまない。

4、日通と「供託」⑤(資料-1、2、3)

一日通宇都宮営業所

- ・48人分(未払賃金、預貯金)
- ・昭21年6月19日 供託
- ・昭32年5月9日 供託金歳入編入 → 国庫
- ・出身、本籍地不明

5、茨城県内労役地調査 ⑥(資料-1、2)

-(件・市・町・村史、戦後処理史、新聞等)調査

-岩瀬山中の地下工場跡地 ⑦(資料-7)

-帰国状況 ⑧(新聞資料-8)

-茨城県「<조선인>労務者に関する調査の」⑨(資料-9)

△栃木・茨城県下における「強制連行・労働」等 に関する主要参考資料

『知事引継書』『朝鮮人労務者に関する調査の件』(栃木・茨城県)

「足尾銅山・朝鮮人強制連行と戦後処理」(古庄正氏)

「茨城県における朝鮮人・中国人強制連行に関するノート」(相沢一正氏)

茨城、栃木県内『県史初め全市町村史』、郷土史

朝鮮人強制連行の記録」(朴慶植氏)

『茨城県戦後処理史』

「<韓国併合>直後の在日朝鮮人、中国人」(木村健二、小松裕氏共書)

「遙かなるアリランの故郷よ」(朝鮮人強制連行栃木県真相調査団)

「日立鉱山朝鮮人強制連行の記録」(山田昭次氏)

「第2次大戦中の植民地鉱業労働者のついて」(長沢秀氏)

社史(鴻池、戸田、大林、大成、日立鉱山、日製、古河鉱業、清水、鹿島組等)

「戦争と民衆の社会史」(大江志乃夫氏)

「地図にないアリラン峠」(林えいだい氏)

新聞(いはらき、下野、茨城等) その他多数

2、犠牲（死亡）者への追跡調査

▲ 以前まで確認された

犠牲（死亡）者	101名（県内）
遺骨	1体（足尾）
埋葬地	1ヶ所（塩谷）

1）第1次追跡調査

- －「埋・火葬許可書」、「寺院過去帳」、証言と現地確認
- －調査結果＝123名（101名中2名＝東北出身日本人）
＝供養碑、無縁之墓 6ヶ所
＝埋葬地 5ヶ所
- －足尾銅山<포서현>労働者 約2500人、（女工160名含）
・犠牲者（42名）③（資料－3） 死亡者（30名）＝72名
・『紛議解決協定書』（昭20・12・5）④（資料－4）
疑問点？ ＊労資交渉参加者証言
- －関東大震災時被害者＝8名（被撲殺者）
＊<総数>123＋8＝131名

2）第2次追跡調査

▲ 犠牲（死亡）者（131名）中＝本籍・出身地確認（100名）

- －調査依頼（戸籍謄本送付要請） → 邑・面事務所（役所）
- －回答 100名中88名分（戸籍謄本、死亡地、遺族等）

3）第3次追跡調査

- －確認された遺族方への調査－遺骨返還、補償有無等
・現在進行中 （現10名の回答有）
- ＊「紛議解決協定書」約定通りなされたのか

3、社会保険事務所との交渉（栃木県内5ヶ所）

- －「厚生年金保険」加入状況調査依頼
- －遺族方委任状提出－（未）（加入）、期間 判明

△ 現在年金受給者（在日）－加入期間 「一時金」受給（受給年金＋α）
被強制連行者（1年間足尾銅山、逃亡）

■聞取調査報告

呉 學 述 (OH HAK-SUL)さん(72) 聞取日時:2000年8月17日

現住所:大邱市南区企鵝 5-335 本籍地:高靈郡星山面茂溪洞 185-7

1944年9月、面事務所からの呼出状によって徴用された。徴用当時、私は農業を営んでいた。当時の年齢はかぞえて18(16)歳だった。その年、17歳の妻と結婚したばかりだった。妻は、挺身隊に引っ張られるのを恐れ、結婚していた方が安全だと考え、急いで結婚したとのことだった。

同じ面からは他にも何人かが(日本へ)行ったようだが、詳しいことは分からない。北海道へは、列車で釜山まで行き、船で下関へ。下関から座席のついた臨時列車を乗り継いで青森、連絡船で兩館、そこから又列車に乗って、沼牛(ぬまうし・・・兩竜郡幌加内町)に着いた。移動中に軍隊・警察などによる監視は無かったようだが、移動の間に下関で3人、秋田で暗闇に紛れて1人が逃亡したのを見ている。逃げた人がどうなったかは、分からない。まだ若かったし、生まれた土地を離れるのも、船に乗るのも初めてだったので、たいへん興奮したのを覚えている。

沼牛駅から2km離れたところに宿舎があり、そこで2日間休んだ。(そこは土屋クロームのようだが)そこではすでに働いている人々がいた。そこで、40人くらいの小隊7つに分けられ、現場に向かった。仕事は日の出とともに働き、日の入りとともに終わるという就業時間で、山の上を掘り崩すような労働だったので、それほど危険ではなかった。食事は、1日3食摂ることができた。飯場での食事の準備(飯炊き)は日本女性が行い、朝鮮人女性などは居なかった。

働いている間に現場から3人逃げ出したことがあった。あとから聞いたことだが、彼らはすぐに周旋屋に捕まって、砂川のタコ部屋(三井砂川炭坑)に売られたそう。3人は10日間そこで働かされたが、会社(上谷鉱業所)が買い戻してくれて、元の職場に戻ることができた。しかし、その話を聞いて恐くなり、逃げる者はいなくなったようだ。しかし、労働現場等で(見せしめに)みんなの前で人が殺られるようなことは無かった。

事故で死んだ人もなかったが、病気になると「赤痢」扱いにされ隔離された。隔離されたあと、その人がどうなったかは分からない。

休暇は月に二度、2日と17日だった。休日は幌加内の街に遊びに行つて、店で日用品を買ったり、食事をしたりした。それが唯一の楽しみだった。日給は2円90銭だが、普段の食費と家へ送金する分は引かれていた。家にはいづらか届いていたようだ。成人前だったので、煙草の配給はなかった。

日本の敗戦は、全員が集合させられて、会社の人から聞かされた。解放後は、その年(1945)の10月幌加内を出発し、青森から船に乗って釜山に着くまでは、会社の責任で(会社の人間が同行して)送られた。青森では一度に全員が船に乗れないので、その順番はくじびきで決められた。釜山には11月に着いた。釜山からは自分の金で帰った。その後、大邱に移って暮らしている。

日本へ行ったことを話すのは、今回が初めてだ。
(日本についてどう思うかという問いに)反日感情は別れない。他の人はどうか知らないけれど。

■土谷鉱業所と帝国砂白金の事業所について

土谷鉱業所：所在地 幌加内村新成生（しんなりう）

業務内容：1941年に土谷祇太郎が砂クロームの鉱業権を獲得し本格的操業を開始。軍需工場として事業規模が拡張され、操業当時の42年頃は従業員50人くらいであったが、44～45年の最盛期には「海軍の指定鉱山として従業員630余人、事務及び付帯雑役従事者470名、計1100余人となり、労務従業者の主体は朝鮮人で、大東重寮に収容され、その数は268人」であった。『幌加内町史』

* 除留者名簿では436人となっており、268人の根拠は定かではない。
 ** 「砂クローム」：これは蛇紋岩地帯を流れる河川地域に土砂とともに、正八面体の結晶をなして混在しており、白金の産地と同一である。用途は「クローム銅（車輪、不銹鋼、武器、発条）染料、耐火煉瓦等で全部軍需である。」（『北海道の鉱業』1943年刊）

帝国砂白金開発有限会社雨竜鉱業所：所在地 幌加内村添牛内（そえうしな）

本社 北海道旭川市（北海道砂白金組合事務所【軍需省特設砂白金生産本部】と同居）
 設立 1943年10月 帝国鉱業開発KK（本社東京、軍指令による半官半民の特種会社）
 の全額出資により発足
 役員 取締役社長 菅 礼之助（軍国日本鉱業界の総元締めである帝国鉱産KK社長）
 専務取締役 船橋 要（北海道砂白金組合専務理事）
 常務取締役 島田 要一（雨竜鉱業所長）

吉田延司著『砂白金に想う』（1965年刊）より

鉱業所は、雨竜鉱業所のほかに和寒、夕張などに鉱業所を併設したが、最も主力を傾注したのは雨竜郡多度志村鷹泊であった。鷹泊以外でも、雨竜川「上流の政和、朱鞠内等にも出張所を置き、高潮時には2000人を超える稼働員を擁した。内約1500人は朝鮮本土から徴募した鮮人部隊で、白紙徴用の民間人（軍の召集令状を赤紙といい、一般勤労徴発を白紙といった）を併せて軍隊風に編成し、いわゆる人海戦術を以ってまっしぐらに表土剥離作業に突撃したのであった。」（吉田著）

雨竜鉱業所は当初鷹泊駅を中心に下流を第1鉱区（長、富岡正勝）、上流を第2鉱区（長、中山萬）に分けて操業したが、1944年秋に、一元化して嶋田常務が統率した。（『昭和20年度砂白金増産計画書』の抜粋が吉田著に記載されている。）

『多度志町史』には「雨竜鉱業所」の規模について次のような記述がある。
 「当鉱業所の名称を雨竜鉱業所と称す、この会社は、北海道一内の白金鉱区を買収した。現場の人手は1300名くらいで、半島人、挺身隊、地元住民等である。中隊組織とし、第1中隊より第8中隊は幌加内地域で、この分は1943年夏に、棚田初次の指揮で100名程度の人員をもって、雨煙別から第3鉄橋（政和）までの区間を担当した。雨煙別では1944年まで2年にわたって採取したが、150匁程度の生産であった。」

空知民衆史講座：074-0141 北海道深川市多度志町 一乗寺気付
 TEL/FAX：(0164)27-2359 E-mail：tompei@cocoa.ocn.ne.jp
 空知民衆史講座 <http://member.nifty.ne.jp/minsyushi/>
 日韓共同ワークショップ <http://city.hokkai.or.jp/tanakat/WS-J/>

9. 栃木・茨城県下における朝鮮人強制連行・労働に関する調査現況

<報告> 2000・9・9

＝栃木、茨城県内下における<조선인>強制連行・労働に関する調査現況＝

報告者「下野<チョソン問題研究会>」

代表、孫・大勇

(ソ・テヨン)

栃木、茨城県下における<조선인>強制連行・労働に関しては、故朴慶植氏を始め古庄正氏、相沢一正氏ら多くの研究者と「<조선인>強制連行栃木県真相調査団」による報告や論文等がある。その中でも足尾銅山と日立鉱山に関する調査研究は広く知られており、多くの方々の地道な努力によって栃木県下における<強制労働の実態はかなり明らかになった。

しかし、その他の労役地と犠牲（死亡）者及び補償に関する調査確認は十分とはいい兼ねる。

20世紀の幕が閉じられる今日、「過去」という闇にその「恨」が葬り去られようとしている現状を私たちは痛感し韓国留学生、OB等と共に<조선인>労役地の探索と犠牲（死亡）者への追跡調査に取り組みました。

金沢、熊本集会にて、すでに報告した内容については割愛いたしその後の調査結果を中心にその概要を報告します。

－調査結果－

1、栃木県下新たに確認された<조선인>労役地

①（資料－1）＝栃木県下<조선인>労役地一覧表

- 1) 足尾銅山内選鉱場（足尾町）－<조선인>選鉱女工（160名）
- 2) 加蘇鉱山、東加蘇鉱山（鹿沼市）－<조선인>労働者集合写真入手
- 3) 日向鉱山（栗山村）－元鉱夫証言
- 4) 碓氷発電所建設工事（塩原町）－元勤務者証言
- 5) 足尾「神戸発電所」建設工事（群馬県）－元管理者、住民証言
- 6) 足尾鉄道（現わたらせ溪谷鉄道）敷設工事（桐生－足尾）－元土工証言

<明45年警視庁調査>

- 7) 日本製鋼所宇都宮製作所長岡地下工場（宇都宮市）－社史、住民証言

②（資料－2）

- * 病死 17名（肺結核 1 急性肺炎 14 髄膜炎 1 大腸カタル 1 肺腫 1 病名不明 7）
- * 公傷死 8名（眼 4 名 三菱 1 名 船 3 名） 事故死（三菱 1名）
- * 空爆死 14名（眼 8 名 三菱 5 名 神 1名） 眼失明 7 脚痺痺 14名 東証毒瘡 50体
- * 死因不明 15 名（眼 4 名 三菱 2 名 船 8名 病名不明 1 名）

脱走者 1,077名（連行総数の28.03%）

脱出手段 = 監視手ずる 脱金 食料 切符 市営案内 入所 一ヵ月以内に脱走 来る途中に脱走 特設警察機関
警備の脱走 45,3 神戸大空襲（神戸造船所 14 名 三菱 7 名 / 45,6 三菱 眼 70名 中東コム 23名）

強制連行の特徴

奴隷狩り

- * 徴用令状（白紙の招集）19才から22才 警察力 崩壊 家庭の監視なし
- * 面倒無用の連行
面 → 郡 → 道（強制）→ 支店（強引）
収容所（神戸揚子 = 三菱の例 船 30名 ジストマ 9名 船 3名 性病 5名 病名不明 18名 計 65 名）

炭鉱、鉱山労働から重工業労働（製鉄、造船、機械等）

眼 950名 三菱 1,745 名 船 456 名 順 1,600名 庫 356名 一発 = 3K 重労働

脱出者 数回

軍隊式（檻のなか）集団生活

- * 精神修養、約一ヵ月半強 みるき
- * 軍事教練 生活軍式
- * 軍人あがりの指導員 下士官 無罪人 殴ることありま
- * 工場死守の名の下の監禁（無用な犠牲）
非武装に脱 脱走防止 眼 川重 船 女性 同じ檻のなかの死
- * 寮生活 食料不足、不衛生、衣服不備、寝具暖房不備 → 病人 脱走者、病気の蔓延 脱出

今後の課題

- 国交正常化交渉の中での植民地支配清算の重要問題
- * 強制連行実態の全面的解明
- * 「報告書」の各県別名簿の整理（北半部地域出身者名簿抽出作業）
- * 現地生存者の聴き取り調査と、その体験談を聞く集会の開催

兵庫県下における共和国出身者

強制連行工場別実態一覧表（表 1）

	平廣府	平南道	平北道	咸南道	咸北道	黄海道	江原道	合計
川鉄資合			381		285	196	88	950
神戸製鋼			73	(292名分 資料消失 脱走者不明)				7365
中央コム							98	98
大阪ガス	16	10	6			9		41
三菱造船	107	1,508	43	7	1	79		1,745
日亜製鋼						39		39
古河電気		2				76		78
住友電気		2	1			2	41	46
日本パイプ				100				100
神戸鋼鉄		66	4					70
横濱造船		8	448					456
三菱名 船		1	1			258		260
合計	123	1,597	224	107	226	659	188	2,342